



Adobe

LiveCycle™ ES2 のインストールおよび デプロイ (WebSphere® 版)

2010 年 9 月 24 日

Adobe® LiveCycle™ ES2

バージョン 9

© 2010 Adobe Systems Incorporated and its licensors. All rights reserved.

Adobe® LiveCycle™ ES2 のインストールおよびデプロイ (WebSphere® 版)
2010年9月24日

This guide is licensed for use under the terms of the Creative Commons Attribution Non-Commercial 3.0 License. This License allows users to copy, distribute, and transmit the guide for noncommercial purposes only so long as (1) proper attribution to Adobe is given as the owner of the guide; and (2) any reuse or distribution of the guide contains a notice that use of the guide is governed by these terms. The best way to provide notice is to include the following link. To view a copy of this license, visit <http://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/3.0/>.

Adobe, the Adobe logo, Adobe Reader, Acrobat, FrameMaker, LiveCycle, PageMaker, PhotoShop, and PostScript are either registered trademarks or trademarks of Adobe Systems Incorporated in the United States and/or other countries. IBM and AIX are trademarks of International Business Machines Corporation in the United States, other countries, or both. Linux is the registered trademark of Linus Torvalds in the U.S. and other countries. Microsoft, SharePoint, and Windows are either registered trademarks or trademarks of Microsoft Corporation in the United States and/or other countries. Oracle, Java, Solaris, Sun, and SunOS are trademarks or registered trademarks of Oracle and/or its affiliates. UNIX is a registered trademark of The Open Group in the US and other countries. All other trademarks are the property of their respective owners.

Adobe Systems Incorporated, 345 Park Avenue, San Jose, California 95110, USA.

目次

このドキュメントの内容	6
このドキュメントの内容	6
このドキュメントの対象読者	6
関連情報	7
1 インストールとデプロイメントの概要	9
インストール、設定およびデプロイメントプロセス	9
設定およびデプロイのためのタスクの選択	9
LiveCycle ES2 へのアップグレード	10
LiveCycle ES2 インストール、設定およびデプロイメントリスト	11
自動インストールおよびデプロイメントリスト	11
手動インストールおよびデプロイメントリスト	11
2 LiveCycle ES2 モジュールのインストール	13
インストーラの確認.....	13
製品ファイルのインストール	14
Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへの インストール.....	15
JAVA_HOME 環境変数の設定	15
LiveCycle ES2 のインストール	15
エラーログの表示.....	17
次の手順.....	17
3 LiveCycle ES2 をデプロイするための設定	18
LiveCycle Configuration Manager の概要	18
分散環境での Configuration Manager の実行	19
LiveCycle Configuration Manager の CLI バージョンと GUI バージョン	19
アプリケーションサーバーの SOAP ポートの判断.....	20
LiveCycle ES2 の設定、デプロイ	20
EAR ファイルのアンインストール.....	29
次の手順.....	29
4 デプロイメント完了後の作業	30
アプリケーションサーバーの再起動	30
日付、時刻およびタイムゾーンの設定	30
デプロイメントの確認.....	31
LiveCycle 管理コンソールへのアクセス	31
デフォルトのパスワードの変更	31
ログファイルの表示	31
LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール	32
モジュールの Web アプリケーションへのアクセス.....	32
Rights Management ES2 へのアクセス	33
User Management へのアクセス.....	34
LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定	34
環境変数の設定.....	35
HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定	36
Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定.....	36
Acrobat Professional の設定.....	36

マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定	37
Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには.....	38
PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 へのフォントの追加	39
HTML から PDF への変換の設定	40
Microsoft Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する	41
ネットワークプリンタクライアントのインストール	42
監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定	43
LiveCycle Rights Management ES2 の最終設定	44
LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定	44
FIPS モードの有効化.....	45
HTML 電子署名の設定	46
Document Management サービスの設定.....	46
Connector for EMC Documentum サービスの設定.....	46
Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成.....	49
Configuring the Connector for IBM FileNet service.....	50
SharePoint クライアントアクセスの設定	55
share.war ファイルの取得と編集.....	55
share.war ファイルのデプロイ.....	56
IPv6 モードでの CIFS の有効化.....	56
contentservices.war ファイルの編集.....	56
Connector for IBM Content Manager の設定	57
システムイメージバックアップの実行.....	61
LiveCycle ES2 のアンインストール	61
5 LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 の構成およびデプロイ.....	63
BAM Server 用の WebSphere の構成.....	64
キーストアの構成.....	65
bam.properties ファイルの作成.....	65
BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースの作成.....	66
ユーザーアカウントの作成	66
データベース環境の設定 (DB2 のみ)	66
BAM Server メタデータデータベースのデータソースの定義.....	69
BAM サーバー地理的データベースのデータソースの定義.....	71
BAM サーバーをサポートするための WebSphere の設定	72
BAM Server 用の Process Management ES2 の設定	73
WebSphere への BAM Server のデプロイ	74
Business Activity Monitoring ES2 の設定.....	75
LiveCycle User Management からのユーザーの同期	76
BAM Dashboard の使用	77
関連ドキュメント	78
Business Activity Monitoring ES2 のアンインストール	78
6 高度な実稼働環境の設定	79
Output ES2 および Forms ES2 のプールサイズの設定	79
LiveCycle PDF Generator ES2.....	79
EJB プールサイズの設定	79
Windows での CIFS の有効化	80
NetBIOS over TCP/IP の有効化	81
他の IP アドレスの追加.....	81
SMB over NetBIOS レジストリの無効化 (Windows 2003 のみ)	81
ファイルとプリンタの共有の無効化 (Windows 2008 のみ)	81

7	トラブルシューティング	82
A	付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール	83
	LiveCycle ES2 のインストール	83
	エラーログ	85
	コンソールモードでの LiveCycle ES2 のアンインストール	85
	次の手順	86
B	付録 - LCM コマンドラインインターフェイス	87
	操作の順序	87
	コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル	88
	共通のプロパティ	88
	LiveCycle の構成プロパティ	90
	アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ	92
	LiveCycle のデプロイプロパティ	94
	LiveCycle の初期化プロパティ	94
	BAM の初期化プロパティ	94
	LiveCycle コンポーネントのデプロイプロパティ	95
	コマンドラインインターフェイスの使用	95
	使用例	98
	エラーログ	98
	次の手順	98
C	付録 - WebSphere の手動設定	99
	ディレクトリ権限の設定	99
	JVM 引数の設定	100
	WebSphere のタイムアウトの設定	101
	LiveCycle PDF Generator ES2 のスロットリングの設定	102
	LiveCycle ES2 データベース接続の設定	103
	データソース用の J2C 認証の設定	103
	DB2 データソースの設定	104
	Oracle データソースの設定	109
	SQL Server データソースの設定	113
	次の手順	119
D	付録 - WebSphere への手動デプロイ	120
	LiveCycle ES2 モジュールのデプロイについて	120
	WebSphere ディレクトリ名	120
	デプロイ可能なコンポーネントの概要	121
	WebSphere へのデプロイ	121
	アプリケーションの起動	122

このドキュメントの内容

このドキュメントは、Adobe® LiveCycle™ ES2 (Adobe LiveCycle Enterprise Suite 2) の理解に役立つ資料の 1 つです。LiveCycle ES2 は、顧客、パートナー、構成員および社員間におけるビジネスクリティカルな情報フローの自動化と迅速化を支援する、柔軟で拡張性の高いプラットフォームです。

このドキュメントの内容

このガイドでは、次のモジュールを Microsoft® Windows®、Linux®、IBM® AIX® および Sun™ Solaris™ でインストールおよび設定する方法と、これらのモジュールを IBM WebSphere® Application Server にデプロイする方法について説明します。

- Adobe LiveCycle Business Activity Monitoring
- Adobe LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum
- Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet
- Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager
- Adobe LiveCycle Content Services ES2
- Adobe LiveCycle Digital Signatures ES2
- Adobe LiveCycle Forms ES2
- Adobe LiveCycle Foundation
- Adobe LiveCycle Output ES2
- Adobe LiveCycle PDF Generator ES2
- Adobe LiveCycle PDF Generator 3D ES2
- Adobe LiveCycle Process Management ES2
- Adobe LiveCycle Reader Extensions ES2
- Adobe LiveCycle Rights Management ES2

このドキュメントの対象読者

このドキュメントで提供される情報は、LiveCycle ES2 コンポーネントのインストール、設定、管理またはデプロイを担当する管理者や開発者を対象にしています。このドキュメントで扱う内容は、J2EE アプリケーションサーバー、オペレーティングシステム、データベースサーバーおよび Web 環境に関する十分な知識がある読者を想定しています。

このドキュメントで使用する表記

このドキュメントで使用する一般的なファイルパスの命名規則は、次のとおりです。

名前	デフォルト値	説明
[LiveCycleES2 root]	Windows : C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2¥ AIX、Linux および Solaris : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es2/	すべての LiveCycle ES2 モジュールで使用するインストールディレクトリ。インストールディレクトリには、Adobe LiveCycle Configuration Manager 用のサブディレクトリがあります。このディレクトリには、サードパーティ製品に関連したディレクトリも含まれます。
[appserver root]	これらはインストール場所の例です。ご使用のマシンでのインストール場所は異なる場合があります。 WebSphere (Windows) : C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer¥ WebSphere (Linux および Solaris) : /opt/IBM/WebSphere/AppServer/ WebSphere (AIX) : /usr/IBM/WebSphere/AppServer	LiveCycle ES2 サービスを実行するアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。
[server name]	WebSphere の LCServer1	アプリケーションサーバーで設定されているサーバーの名前。
[dbserver root]	データベースタイプとインストール時の設定によって異なります。	LiveCycle ES2 データベースサーバーがインストールされている場所。

このガイドに記載されているディレクトリの場所に関するほとんどの情報は、すべてのプラットフォームに該当します (AIX、Linux および Solaris では、すべてのファイル名とパスにおいて大文字と小文字が区別されます)。プラットフォーム固有の情報は、必要に応じて特記します。

関連情報

次の表に、LiveCycle ES2 についての詳細情報の参照先を示します。

情報	参照先
LiveCycle ES2 およびモジュールに関する全般的な情報	LiveCycle ES2 の概要
LiveCycle ES2 (Enterprise Suite) リリースの新機能	LiveCycle ES2 の新機能
LiveCycle ES2 の用語	LiveCycle ES2 用語集
LiveCycle ES2 モジュール	Adobe LiveCycle ES2
LiveCycle ES2 に統合できる他のサービスや製品	Adobe Developer Connection

情報	参照先
Adobe LiveCycle Workbench ES2 のインストール	Installing Your Development Environment
旧バージョンから LiveCycle ES2 へのアップグレード	LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備 LiveCycle ES2 へのアップグレード (WebSphere 版)
LiveCycle ES2 のトラブルシューティング	LiveCycle ES2 のトラブルシューティング
LiveCycle ES2 の管理タスクの実行	LiveCycle ES2 管理ヘルプ
LiveCycle ES2 に使用できるすべてのマニュアル	LiveCycle ES2 ドキュメンテーション
LiveCycle ES2 リリース情報および製品に加えられた最新の変更	リリースノート
現在のバージョンに関するパッチアップデート、テクニカルノートおよび関連情報	LiveCycle テクニカルサポート

1

インストールとデプロイメントの概要

ここでは、インストールおよびデプロイメントのためにどのような作業を実行する必要があるのかわかりやすく説明し、インストール、設定およびデプロイメントのプロセスの理解に役立つ情報を紹介します。

- [「インストール、設定およびデプロイメントプロセス」](#) (9 ページ)
- [「LiveCycle ES2 インストール、設定およびデプロイメントリスト」](#) (11 ページ)

システム要件など、LiveCycle ES2 をインストールするためのシステムの準備について詳しくは、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備](#)』を参照してください。

1.1 インストール、設定およびデプロイメントプロセス

LiveCycle ES2 のインストール、設定およびデプロイには、次のプロセスが含まれます。

インストール：インストールプログラムを実行して LiveCycle ES2 をインストールします。LiveCycle ES2 をインストールすると、必要なすべてのファイルが、使用するコンピュータ上の 1 つのインストールディレクトリ構造内に配置されます。デフォルトのインストールディレクトリは C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2 (Windows) または /opt/adobe_livecycle_es2 (AIX、Linux および Solaris) ですが、これ以外のディレクトリにファイルをインストールすることもできます。このドキュメントでは、デフォルトのインストールディレクトリを [LiveCycleES2 root] と呼びます ([「LiveCycle ES2 モジュールのインストール」](#) (13 ページ) を参照)。

設定およびアセンブリ：LiveCycle ES2 の設定では、LiveCycle ES2 の動作方法を決定する様々な設定を変更します。製品のアセンブリでは、設定の指示に従って、すべてのインストール済みコンポーネントがデプロイ可能な EAR および JAR ファイルに配置されます。LiveCycle Configuration Manager を実行して、デプロイメント用コンポーネントの設定とアセンブリを行います ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」](#) (18 ページ) を参照)。複数の LiveCycle ES2 モジュールに対して同時に設定およびアセンブリを行うこともできます。

デプロイ：製品のデプロイでは、アセンブリされた複数の EAR ファイルといくつかの補助ファイルを、LiveCycle ES2 ソリューションを実行する予定の WebSphere アプリケーションサーバーにデプロイします。複数のモジュールを設定およびアセンブリを行った場合は、デプロイ可能なコンポーネントがデプロイ可能な EAR ファイル内にパッケージングされています。また、コンポーネントおよび LiveCycle ES2 アーカイブ (LCA) ファイルは、JAR ファイルとしてパッケージングされています。

LiveCycle ES2 データベースの初期化：LiveCycle ES2 と共に使用するデータベースの初期化では、User Management およびその他のソリューションコンポーネントと共に使用されるテーブルが作成されます。LiveCycle ES2 データベースに接続するモジュールをデプロイする場合は、デプロイメントプロセスの完了後に LiveCycle ES2 データベースを初期化する必要があります。

1.2 設定およびデプロイのためのタスクの選択

インストール完了後には、LiveCycle Configuration Manager を実行して、次のような様々なタスクを実行することができます。

- アプリケーションサーバーにデプロイするために EAR ファイルの LiveCycle ES2 モジュールを設定する
- LiveCycle ES2 をサポートするようにアプリケーションサーバーのプロパティを設定する
- アプリケーションサーバーの設定を検証する
- LiveCycle ES2 EAR ファイルをデプロイする
- LiveCycle ES2 データベースを初期化する

- LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする
- LiveCycle ES2 コンポーネントのデプロイメントを検証する
- LiveCycle ES2 サンプルを LiveCycle ES2 に読み込む (オプション)

注意：読み込むことができる LiveCycle ES2 サンプルに加えて、[Adobe の Web サイト](#)ではさらに多くのサンプルを利用できます。

- LiveCycle ES2 コンポーネントを設定する

Reader Extensions ES2 をインストールする場合は、PDF ドキュメントに使用権限を適用するために必要な Reader Extensions ES2 使用権限資格情報を指定して読み込むこともできます。

Business Activity Monitoring をインストールする場合は、他のすべての LiveCycle ES2 コンポーネントをインストールしてから、[「LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 の構成およびデプロイ」 \(63 ページ\)](#) を参照してください。

アプリケーションサーバーの設定およびデータベースに対するデータソースの設定は LiveCycle Configuration Manager を使用して実行できますが、これらの手順は手動で実行した方が望ましい場合もあります。

次の理由から、アプリケーションサーバーを手動で設定する必要がある場合があります。

- アプリケーションサーバーで他のアプリケーションを実行しており、設定が競合する可能性がある場合
- 設定管理に関する会社のセキュリティ手順により、より細かい制御が求められている場合
- 自動設定が使用できないデプロイメントの場合

手動で設定する場合は、次のタスクを実行します。

- LiveCycle Configuration Manager を使用して、LiveCycle ES2 コンポーネントを設定し、必要なフォント、一時ディレクトリおよび GDS ディレクトリを設定します。
- アプリケーションサーバーの設定、データソースの設定および LiveCycle ES2 EAR ファイルのデプロイを手動で行います。
- LiveCycle Configuration Manager を実行してデータベースを初期化します。
- LiveCycle Configuration Manager を実行して LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイし、LiveCycle ES2 コンポーネントのデプロイメントを検証します。
- LiveCycle ES2 コンポーネントを設定します。

1.3 LiveCycle ES2 へのアップグレード

LiveCycle 7.x からアップグレードする場合は、『LiveCycle 7.x から LiveCycle ES2 へのアップグレード』ガイドを参照してください。

LiveCycle 8.x 以降から LiveCycle ES2 にアップグレードする場合は、『[LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』に記載されている作業を完了したことを確認してください。また、使用しているアプリケーションサーバー版の [LiveCycle ES から LiveCycle ES2 へのアップグレード](#)ガイドを参照してください。

1.4 LiveCycle ES2 インストール、設定およびデプロイメントリスト

この節では、インストールおよび設定プロセスを進めていく際に使用できるリストを用意しました。インストールと設定のためのリストには、自動オプション用のものと手動オプション用のものがあります。

自動オプション: LiveCycle Configuration Manager を使用して、LiveCycle ES2 EAR ファイルの設定とデプロイ、アプリケーションサーバーの設定、データベースの初期化、サーバーへのモジュールのデプロイを行う方法です。自動オプションは、LiveCycle ES2 のインストール、設定およびデプロイメントのための入力処理を少なくしたい場合に使用します。

手動オプション: LiveCycle Configuration Manager を、LiveCycle ES2 EAR ファイルの設定、データベースの初期化、サーバーへのモジュールのデプロイだけに使用する方法です。アプリケーションサーバーの設定、データベースへの接続、および LiveCycle ES2 EAR ファイルのサーバーへのデプロイは、このマニュアルで後述する手順に従って、管理者が実行します。手動オプションは、LiveCycle ES2 のインストール、設定およびデプロイメントのための厳密な入力を行う場合に使用します。例えば、このオプションは、ロックダウンされたサーバー環境で使用できます。

1.4.1 自動インストールおよびデプロイメントリスト

次のリストに、自動オプションを使用して LiveCycle ES2 モジュールをインストールするために必要な手順を示します。WebSphere Application Server をインストールしておく必要があります。

- 必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールされているか確認します ([『LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)』](#) を参照)。
- インストールプログラムを実行します ([『LiveCycle ES2 モジュールのインストール』 \(13 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle Configuration Manager を実行し、タスク選択画面のすべてのタスクを選択します。この手順により、LiveCycle ES2 EAR ファイルの設定とアセンブリ、アプリケーションサーバーの設定、アプリケーションサーバーへの EAR ファイルおよびその他のコンポーネントのデプロイ、LiveCycle ES2 データベースの初期化およびデプロイメントの検証が行われます ([『LiveCycle ES2 をデプロイするための設定』 \(18 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle 管理コンソールおよび User Management にアクセスします ([『LiveCycle 管理コンソールへのアクセス』 \(31 ページ\)](#) を参照)。
- (オプション) LDAP アクセスを設定します ([『LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定』 \(44 ページ\)](#) を参照)。

1.4.2 手動インストールおよびデプロイメントリスト

次のリストに、手動オプションを使用して LiveCycle ES2 をインストールする場合に必要な手順を示します。インストールを実行する前に、アプリケーションサーバーをインストールおよび設定しておく必要があります。

- 必要なソフトウェアがインストール先の環境にあらかじめインストールおよび設定されていることを確認します ([『LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)』](#) を参照)。
- インストールプログラムを実行します ([『LiveCycle ES2 モジュールのインストール』 \(13 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle Configuration Manager を実行し、LiveCycle ES2 EAR の設定タスクを選択します。このタスクにより、LiveCycle ES2 の設定とアセンブリが行われます ([『LiveCycle ES2 をデプロイするための設定』 \(18 ページ\)](#) を参照)。
- WebSphere Application Server の設定を構成します。各種の設定を調整する必要があります ([『付録 - WebSphere の手動設定』 \(99 ページ\)](#) を参照)。
- EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイします。これは、手動で行うか、LiveCycle Configuration Manager を使用して行うことができます ([『付録 - WebSphere への手動デプロイ』 \(120 ページ\)](#) を参照)。

- LiveCycle Configuration Manager を実行して LiveCycle ES2 コンポーネントファイルをデプロイし、LiveCycle ES2 データベースを初期化して、必要に応じて製品サンプルをデプロイします ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(18 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle 管理コンソールおよび User Management にアクセスします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(31 ページ\)](#) を参照)。
- (オプション) LDAP アクセスを構成します ([「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」\(44 ページ\)](#) を参照)。

2

LiveCycle ES2 モジュールのインストール

ここでは、Windows、AIX、Linux および Solaris 上で LiveCycle ES2 インストールプログラムを実行している LiveCycle ES2 システムを設定する最初のフェーズについて説明します。後続のフェーズでは、LiveCycle Configuration Manager を実行して、LiveCycle ES2 の設定およびデプロイを行います。

モジュールをインストールする前に、LiveCycle ES2 の実行に必要なソフトウェアとハードウェアが使用環境に含まれていることを確認してください。また、各インストールオプションについて理解し、必要に応じて環境を整えておく必要があります（『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照）。

LiveCycle ES2 には、インストールプログラム用にコマンドラインインターフェイス (CLI) も用意されています。CLI の使用方法について詳しくは、『[付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール](#)』(83 ページ) を参照してください。LiveCycle Configuration Manager でも CLI を使用できます。『[付録 - LCM コマンドラインインターフェイス](#)』(87 ページ) を参照してください。CLI は、LiveCycle ES2 の上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムや LiveCycle Configuration Manager でグラフィカルユーザーインターフェイスがサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。

この章には、以下のトピックが含まれています。

- [「インストーラの確認」](#) (13 ページ)
- [「製品ファイルのインストール」](#) (14 ページ)
- [「エラーログの表示」](#) (17 ページ)

2.1 インストーラの確認

インストールプロセスを開始する前に、インストーラファイルについて、次のベストプラクティスを確認してください。

▶ DVD インストールメディアの確認：

入手したインストールメディアが破損していないことを確認します。LiveCycle ES2 をインストールするコンピュータのハードディスクにインストーラのメディアコンテンツをコピーする場合は、必ず、すべての DVD コンテンツをハードディスクにコピーしてください。インストールエラーを避けるには、Windows のパスの最大長を超えるディレクトリパスに DVD インストールイメージをコピーしないでください。また、ローカルパスに番号記号 (#) などの特殊文字を使用しないでください。ローカルパスに番号記号を使用した場合、適切なライセンス情報がインストール中に表示されないことがあります。

▶ ダウンロードしたファイルの確認：

アドビの Web サイトからインストーラをダウンロードした場合は、MD5 チェックサムを使用してインストーラファイルの整合性を検証してください。次のいずれかを実行し、ダウンロードファイルの MD5 チェックサムを計算して、アドビのダウンロード用 Web ページで公開されているチェックサムと比較します。

- Linux : md5sum コマンドを実行する。
- Solaris : Solaris で digest コマンドを実行する。
- Windows : WinMD5 などのツールを使用する。

▶ ダウンロードしたアーカイブファイルの展開：

アドビの Web サイトから ESD をダウンロードしたら、アーカイブファイルである [appserver]_DVD.zip (Windows) または [appserver]_DVD_unix.tar.gz (AIX、Linux、または Solaris) 全体を、コンピュータに展開します。Solaris の場合は、gunzip を使用して .gz ファイルを展開します。

注意：元の ESD ファイルのディレクトリ階層は変更しないようにしてください。

2.2 製品ファイルのインストール

正常にインストールするには、インストールディレクトリに対する読み取りと書き込み権限が必要です。デフォルトのインストールディレクトリは以下のとおりですが、必要に応じて、別のディレクトリを指定することもできます。

- (Windows) C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2\
- (AIX、Linux、または Solaris) /opt/adobe/adobe_livecycle_es2/

LiveCycle ES2 のインストールパスに国際文字が含まれ、システムに UTF-8 ロケールが設定されていない場合、LiveCycle ES2 では、国際文字を使用した [LiveCycleES2 root] 内のフォントインストールディレクトリを認識しません。このような問題を回避するには、UTF-8 ロケールセットを使用して新しいフォントディレクトリを作成してから、LiveCycle Configuration Manager を UTF-8 ロケールで実行します。このとき、ConfigurationManager.bat または ConfigurationManager.sh スクリプトに `-Dfile.encoding=utf8` 引数を追加します。

警告：LiveCycle ES2 をインストールするときに、インストールパスに 2 バイト文字または拡張ラテン文字 (€ など) を使用しないでください。

Linux でのインストールでは、インストールプログラムにより、ログインしているユーザーのホームディレクトリがファイルを格納するための一時ディレクトリとして使用されます。そのため、次のようなメッセージがコンソールに表示される場合があります。

```
WARNING: could not delete temporary file /home/<username>/ismp001/1556006
```

インストールが完了したら、一時ファイルを手動で削除する必要があります。

警告：オペレーティングシステムの一時的ディレクトリが、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備](#)』に記載されている最小要件を満たしていることを確認してください。一時ディレクトリは次のいずれかの場所にあります。

- (Windows) 環境変数で設定されている TMP または TEMP パス
- (AIX、Linux または Solaris) ログインユーザーのホームディレクトリ

UNIX 系のシステムでは、root 以外のユーザーは次のディレクトリを一時的ディレクトリとして使用できます。

- (Solaris) /var/tmp
- (AIX) /tmp

モジュールを UNIX 系のシステムにインストールする際に、デフォルトのインストール先である /opt/adobe/adobe_livecycle_es2 に正常にインストールするには、ルートユーザーでログインする必要があります。ルートユーザー以外でログインした場合は、権限 (読み取り、書き込み、実行権限) を持っている別のディレクトリにインストール先を変更してください。例えば、ディレクトリを /home/[username]/adobe_livecycle_es2 に変更します。

Windows では、LiveCycle ES2 のインストールには管理者権限が必要です。LiveCycle ES2 インストーラを実行する場合は、WebSphere Application Server をインストールしたユーザーと同じユーザーとして実行する必要があります。

一時ファイルは、システムのデフォルトの一時ディレクトリまたは指定したディレクトリに生成されます。生成された一時ファイルが、インストーラの終了後も残る場合があります。これらのファイルは手動で削除することができます。

Windows の場合は、インストール中にオンアクセスウイルススキャンソフトウェアを無効にすることにより、インストールに要する時間が短縮されます。

2.2.1 Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール

Linux または UNIX プラットフォームにデプロイするために、LiveCycle ES2 を Windows にインストールして設定することができます。この機能を使用して、ロックダウンされた Linux または UNIX 環境にインストールできます。例えば、ロックダウンされた環境にはグラフィカルユーザーインターフェイスはインストールされていません。

Windows でインストールプログラムを実行するときに、LiveCycle ES2 をデプロイするターゲットプラットフォームとして Linux または UNIX オペレーティングシステムを選択することができます。インストールプログラムにより、AIX、Linux または Solaris のバイナリがインストールされます。このバイナリは、製品を設定する際にも LiveCycle Configuration Manager で使用されます。

その後、Windows を実行するコンピュータを、デプロイ可能なオブジェクトのステージング場所として使用できません。これらのオブジェクトは、アプリケーションサーバーへのデプロイメント用に Linux または UNIX コンピュータにコピーできます。対象とするアプリケーションサーバーは、オペレーティングシステムに関係なく、インストールおよび設定時に選択したものと同一である必要があります。

2.2.2 JAVA_HOME 環境変数の設定

JAVA_HOME 環境変数は、ご使用のアプリケーションサーバーの Java SDK を指している必要があります。『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』の「サポートされているソフトウェア」の表を参照してください。

2.2.3 LiveCycle ES2 のインストール

ここでは、LiveCycle ES2 製品ファイルの初期インストールについて説明します。設定およびデプロイメントについて詳しくは、[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 \(18 ページ\)](#) を参照してください。

注意： デプロイメントの際に権限の問題を回避するため、アプリケーションサーバーを実行する場合と同じユーザーで、LiveCycle ES2 インストーラおよび LiveCycle Configuration Manager を実行してください。

▶ LiveCycle ES2 のインストール：

1. インストールプログラムを起動します。
 - (Windows) 次のいずれかを実行します。
 - インストールメディアの `lifecycle_server` ディレクトリまたはハードディスク上のコピー先フォルダに移動して、`run_windows_installer.bat` ファイルを起動します。バッチファイルによって、Windows のバージョンに適したインストーラ (32 ビット版または 64 ビット版) が起動されます。
 - インストールメディアまたはハードディスク上にあるインストーラのコピー先フォルダ内で、適切なディレクトリに移動して、`install.exe` ファイルをダブルクリックします。
 - (Windows 32 ビット版) %lifecycle_server%9.0%Disk1%InstData%Windows%VM
 - (Windows 64 ビット版) %lifecycle_server%9.0%Disk1%InstData%Windows_64bit%VM

- (AIX、Linux、Solaris) 適切なディレクトリに移動して、コマンドプロンプトで `./install.bin` と入力します。
 - (AIX) `/livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/AIX/VM`
 - (Linux) `/livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Linux/NoVM`
 - (Solaris) `/livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Solaris/NoVM`
- 注意：** UNIX または Linux にインストールするが、リリース DVD からは直接インストールしない場合は、インストールファイルに実行権限を設定します。
2. プロンプトが表示されたら、インストールプログラムで使用する言語を選択して、「OK」をクリックします。
 3. はじめに画面で「次へ」をクリックします。
 4. インストーラを実行するコンピュータに、LiveCycle ES (8.x) の以前のバージョンがインストールされている場合は、アップグレードの準備画面が表示されます。LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備をしたり、LiveCycle ES2 の新規インストールを実行したりできます。「次へ」を選択して、LiveCycle ES2 のインストールを続行します。
 - **既存のインストールを LiveCycle ES2 v9.0 にアップグレードする準備：** インストールプログラムでは、既存の LiveCycle ES (8.x) インストールに基づいて、LiveCycle ES2 へのアップグレードで必要となるデータを準備します。このオプションを選択した場合、インストール後に、LiveCycle 管理コンソールでモジュールライセンスを更新してください。
 5. **LiveCycle ES2 v9.0 をインストール：** インストールプログラムは、LiveCycle ES2 をインストールします。インストールフォルダを選択画面で、表示されたデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、「選択」をクリックして LiveCycle ES2 のインストール先ディレクトリを選択してから、「次へ」をクリックします。
存在しないディレクトリの名前を入力すると、そのディレクトリが作成されます。
- 警告：** Linux または UNIX にインストールする場合は、指定するディレクトリ名にスペースを含めないでください。スペースを含めると、モジュールがインストールされません。
6. **(Windows のみ、および手動インストールが選択されている場合)** 手動インストールオプション画面で、目的のデプロイメントオプションを選択し、「次へ」をクリックします。
 - **Windows (ローカル)：** ローカルサーバーに LiveCycle ES2 をインストールしデプロイする場合は、このオプションを選択します。
 - **ステージ化 (リモートシステムを対象としている Windows にインストールされました)：** デプロイメント用のステージングプラットフォームとして Windows を使用する場合は、このオプションを選択します。その後で、リモートサーバー上のターゲットオペレーティングシステムを選択します。Windows 上でインストールを行っている場合でも、デプロイメント対象として UNIX オペレーティングシステムを選択できます ([「Linux または UNIX にインストールするための Windows ステージングプラットフォームへのインストール」 \(15 ページ\)](#) を参照)。
- 注意：** 保護されたデータソースが WebLogic で使用された場合、`adobe-livecycle-weblogic.ear` ファイルと `adobe-contentservices.ear` ファイルは、リモートマシンにデプロイできません。詳しくは、[TechNote](#) を参照してください。
7. LiveCycle ES2 サーバーの使用許諾契約書を読み、「同意します」を選択して使用許諾契約書の条件に同意し、「次へ」をクリックします。使用許諾契約書に同意しない場合は、操作を継続することはできません。
 8. プリインストールの概要画面で、詳細を確認して「インストール」をクリックします。インストールプログラムによりインストールの進行状況が表示されます。
 9. リリースノートの情報を確認して「次へ」をクリックします。
 10. インストール完了画面で詳細を確認します。

11. 「LiveCycle Configuration Manager を起動」チェックボックスはデフォルトで選択されています。「完了」をクリックして LiveCycle Configuration Manager を実行します。

注意： LiveCycle Configuration Manager を後で実行するには、「完了」をクリックする前に、「LiveCycle Configuration Manager を起動します」オプションの選択を解除します。[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin ディレクトリにある該当するスクリプトを使用して、LiveCycle Configuration Manager を後で起動することができます。[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(18 ページ\)](#) を参照してください。

注意：(Windows のみ) 適切な JDK を使用して LiveCycle Configuration Manager が実行中でないことを確認してください。通常、WebSphere インストールでは、IBM JDK を使用します。お使いの WebSphere インストールで IBM JDK を使用していない場合は、[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin/ConfigurationManager.bat スクリプトを使用して、LiveCycle Configuration Manager を再起動します。[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin/ConfigurationManager.exe は使用しないでください。

2.3 エラーログの表示

インストール中にエラーが発生した場合は、Adobe_LiveCycle_ES2_InstallLog.log ファイルが作成され、エラーメッセージが記録されます。このログファイルは、[LiveCycleES2_root]/log ディレクトリに作成されます。

2.4 次の手順

9.5 の新機能

デプロイする LiveCycle ES2 を設定する必要があります ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(18 ページ\)](#) を参照)。LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator をインストールする予定がある場合は、LiveCycle ES2 を後から設定することもできます。その場合は、まず LiveCycle ES2 サービスパック 2 以降を適用してから LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator をインストールする必要があります。

Solution Accelerator のインストールについて詳しくは、『[LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールおよびデプロイ](#)』を参照してください。

3

LiveCycle ES2 をデプロイするための設定

この章では、次のタスクを実行する方法について説明します。

- アプリケーションサーバーにデプロイするため、EAR ファイルに LiveCycle ES2 モジュールを設定する
- LiveCycle ES2 をサポートするようにアプリケーションサーバーのプロパティを設定する
- アプリケーションサーバーの設定を検証する
- LiveCycle ES2 EAR ファイルをデプロイする
- LiveCycle ES2 のデータベースを初期化する
- LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする
- LiveCycle ES2 コンポーネントを設定する
- LiveCycle ES2 コンポーネントのデプロイメントを検証する
- (オプション) LiveCycle ES2 の Connectors for ECM、Reader Extensions ES2、PDF Generator ES2 および PDF Generator 3D ES2 モジュールを設定する

注意：(オプション) LiveCycle Configuration Manager では、手動インストールによる LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 の設定、デプロイメントおよびデータベースの初期化をサポートしていません。BAM をインストールする場合は、[「LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 の構成およびデプロイ」\(63 ページ\)](#) を参照してください。

- (オプション) LiveCycle ES2 のサンプルを LiveCycle ES2 に読み込む

3.1 LiveCycle Configuration Manager の概要

LiveCycle Configuration Manager は、LiveCycle ES2 コンポーネントをアプリケーションサーバーにデプロイするために必要な設定、デプロイおよび検証を行うためのウィザード型のツールです。必要に応じて、LiveCycle Configuration Manager を使用して、アプリケーションサーバーを設定し、製品の EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイできます。

LiveCycle Configuration Manager は、LiveCycle ES2 のインストールプログラムの実行時に、モジュールのファイルと共にインストールされます。LiveCycle Configuration Manager の実行時には、設定する LiveCycle ES2 モジュールおよび LiveCycle Configuration Manager で実行するタスクを指定します。

LiveCycle Configuration Manager は、インストールプログラムから実行するか、インストール後にいつでも実行することができます。アプリケーションサーバーの設定またはアプリケーションサーバーへのデプロイを行うために LiveCycle Configuration Manager を使用する場合は、そのアプリケーションサーバーを起動しておく必要があります。

別のコンピュータにインストールされているアプリケーションサーバーも設定できます。ただし、その場合は、そのアプリケーションサーバーのライブラリファイルを LiveCycle Configuration Manager で使用できるようにするために、LiveCycle Configuration Manager を実行しているコンピュータにもアプリケーションサーバーをインストールする必要があります (そのアプリケーションサーバーを実行する必要はありません)。

3.1.1 分散環境での Configuration Manager の実行

保護されたサーバーを対象とした分散環境にインストールする場合は、LiveCycle Configuration Manager の実行時に SSL ハンドシェイクの例外が発生する可能性があります。このエラーを回避するには、LiveCycle Configuration Manager を実行する前に、次の実行ファイルを実行します。[appserver root]/bin/retrieveSigners.bat

retrieveSigners は、WebSphere デプロイメントマネージャサーバーから証明書を取得し、これらの証明書をローカルサーバーの Trust Store に追加します。詳しくは、IBM インフォメーションセンターの「[retrieveSigners ユーティリティの使用によるクライアントでの署名者の取得](#)」に関する記事を参照してください。

3.1.2 LiveCycle Configuration Manager の CLI バージョンと GUI バージョン

ここでは、LiveCycle Configuration Manager の GUI バージョンについて説明します。LiveCycle Configuration Manager のコマンドラインインターフェイス (CLI) バージョンの使用方法については、「[付録 - LCM コマンドラインインターフェイス](#)」(87 ページ) を参照してください。

LiveCycle の設定は、GUI や CLI モードで LCM を使用したり、手動モードを利用して実行できます。次の表は、設定手順とそれらの手順に対応する有効なモード (GUI、CLI、手動) をまとめたものです。

LiveCycle ES2 の設定タスク	LCM GUI	LCM CLI	手動タスク (LCM 以外)
LiveCycle ES2 を設定する	可	可	不可
アプリケーションサーバーを設定する	可	可	可
アプリケーションサーバーの設定を検証する	可	可	可
LiveCycle ES2 EAR をデプロイする	可	可	可
LiveCycle ES2 のデータベースを初期化する	可	可	不可
Business Activity Monitoring ES2 を初期化する	可	可	可
LiveCycle ES2 サーバー接続を検証する	可	可	不可
LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする	可	可	不可
LiveCycle ES2 コンポーネントのデプロイメントを検証する	可	可	可
LiveCycle コンポーネントを設定する (次のタスクを含む) <ul style="list-style-type: none"> ● ECM コネクタを設定する ● PDF Generator ES2 を設定する ● Reader Extensions ES2 を設定する 	可	可	可
サンプルを読み込む	可	可	可

3.2 アプリケーションサーバーの SOAP ポートの判断

LiveCycle Configuration Manager の画面によっては、アプリケーションサーバーの SOAP ポートを指定することが必要になります。アプリケーションサーバーとの SOAP 接続で使用しているポートを判断するには、このトピックで説明している手順に従ってください。デフォルトのポートは 8880 です。

▶ WebSphere Base の SOAP ポートを判断するには：

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションパネルで、次の操作を実行します。
 - (WebSphere 6.1) Servers / Applications Servers / [serverName] / Communications / Ports をクリックします。
 - (WebSphere 7) Server Types / WebSphere Application Servers / [serverName] / Communications / Ports をクリックします。
2. 「Communications」で、「Ports」をクリックします。次の画面で、SOAP_CONNECTOR_ADDRESS のポート番号を確認します。

▶ WebSphere ND の SOAP ポートを判断するには：

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションパネルで、System Administration / Deployment Manager をクリックします。
2. 「Additional Properties」で、「Ports」をクリックします。次の画面で、SOAP_CONNECTOR_ADDRESS のポート番号を確認します。

WebSphere Administrative Console は、SOAP Connector Address を 2 つの異なるセクションに表示します。WebSphere ND 用の手順 1 で指定したパスを、必ず使用してください。Servers / Application Servers / [serverName] / Communications / Ports に表示される SOAP ポートを使用する場合は、LiveCycle Configuration Manager の実行時に次のエラーが発生します。

```
com.adobe.livecycle.cdv.util.JaclResponseParser, parseString: WASX7017E: Exception received while running file "...\scripts\jacl\config.jacl"; exception information: com.ibm.ws.scripting.ScriptingException: WASX7070E: The configuration service is not available.
```

3.3 LiveCycle ES2 の設定、デプロイ

LiveCycle Configuration Manager の実行時には、自動的に実行するタスクを選択することができます。

注意： LiveCycle Configuration Manager によるリモートサーバーへの LiveCycle ES2 モジュールのデプロイは、管理されるアプリケーションサーバーでのみサポートされ、スタンドアロンのアプリケーションサーバーではサポートされません。

ヒント： LiveCycle Configuration Manager では、各画面で「次へ」をクリックしたときに、その画面で指定した値が検証されます。検証できない値があると、警告メッセージが表示され、画面上のプロパティは赤色で表示されて、有効な値を入力するまで次の操作に進めなくなります。

ヒント： 前回の実行後、LiveCycle Configuration Manager をもう一度実行している場合、既に設定されているパラメータが表示されますが、編集はできません。これらのフィールドを編集可能にして、変更を行うには「設定を編集」をクリックします。

LiveCycle Configuration Manager によって LiveCycle ES2 EAR ファイルが設定された後、次のファイルが [LiveCycleES2 root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。

- adobe-livecycle-native-websphere-[OS].ear
- adobe-livecycle-websphere.ear

- adobe-workspace-client.ear (if you installed LiveCycle Process Management ES2)
- adobe-contentservices.ear (LiveCycle Content Services ES2 をインストールしている場合)

LiveCycle Configuration Manager を使用して EAR ファイルをデプロイする場合、LiveCycle Configuration Manager が EAR ファイルにアクセスしてアプリケーションサーバーに自動的にデプロイします。LiveCycle ES2 EAR ファイルを手動でデプロイする場合は、このディレクトリ内のファイルにアクセスしてアプリケーションサーバーにデプロイすることができます。

注意： ローカライズされた Windows 上で WebSphere を使用する場合、『[LiveCycle ES2 のトラブルシューティング](#)』ガイドで説明されている追加の手順を実行する必要があります。

LiveCycle Configuration Manager で LiveCycle ES2 EAR ファイルを設定した後で、EAR ファイルの名前をカスタムファイル名に変更できます (例えば、バージョン ID や、ローカル JDK 環境の標準的な操作で必要な情報をファイル名に指定できます)。

LiveCycle Configuration Manager では、カスタムファイル名を持つ EAR ファイルのデプロイまたはデプロイ解除をサポートしていません。EAR ファイルがカスタムファイル名を使用している場合は、アプリケーションサーバーに手動でデプロイまたはデプロイ解除する必要があります (例えば、最初にカスタム名を持つ EAR ファイルをデプロイしていて、後からサービスパックやパッチなどの変更を適用する場合)。

リモートアプリケーションサーバーを設定する場合は、そのアプリケーションサーバーのライブラリファイルを LiveCycle Configuration Manager で使用できるようにするために、LiveCycle Configuration Manager のコンピュータにもアプリケーションサーバーがインストールされていることを確認してください。

ヒント： LiveCycle Configuration Manager 画面でディレクトリやファイルの名前を選択したり、参照したりしているときに、フォントを上書きできます。次の JVM 引数を ConfigurationManager.bat (Windows) または ConfigurationManager.sh (Linux、UNIX) に追加してください。

```
-Dlcm.font.override=<FONT_FAMILY _NAME>
```

例えば、-Dlcm.font.override=SansSerif のように指定します。

► LiveCycle Configuration Manager を使用した設定：

ヒント： LiveCycle Configuration Manager で F1 キーを押すと、表示されている画面のヘルプ情報が表示されません。このヘルプには、このドキュメントに含まれていない詳細な情報や、LiveCycle Configuration Manager の各画面に固有の情報が表示されます。

ヒント： 前回の実行後、LiveCycle Configuration Manager をもう一度実行している場合、既に設定されているパラメータが表示されますが、編集はできません。これらのフィールドを編集可能にして、変更を行うには「設定を編集」をクリックします。

1. LiveCycle Configuration Manager がインストールプログラムで自動的に起動しない場合は、[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin ディレクトリに移動し、適切なコマンドを入力して起動します。
 - (Windows) ConfigurationManager.bat
 - (Windows 以外) /ConfigurationManager.sh
2. 言語を選択するよう求められた場合は、選択して「OK」をクリックします。
3. ようこそ画面で「次へ」をクリックします。

- アップグレードタスクの選択画面で、オプションが選択されていないことを確認し、「次へ」をクリックして続行します。

警告： 既存の LiveCycle ES インストールをアップグレードする場合は、この手順を続行しないでください。アップグレードの情報と手順については、LiveCycle ES2 の現在のバージョン用の『[LiveCycle ES 8.x から LiveCycle ES2 へのアップグレードの準備](#)』ガイドと、使用しているアプリケーションサーバー版の『[LiveCycle ES2 へのアップグレード](#)』ガイドを参照してください。

- モジュールの選択画面で、LiveCycle ES2 モジュールを選択し、「次へ」をクリックします。
- タスク選択画面で、実行するすべてのタスクを選択し、「次へ」をクリックします。

アプリケーションサーバーを設定して、LiveCycle Configuration Manager を使用して自動で LiveCycle ES2 をデプロイする予定がない場合は、「アプリケーションサーバーを設定します」、「アプリケーションサーバーの設定を検証します」、「LiveCycle ES2 EAR をデプロイします」の各タスクは選択しないでください。ただし、『[付録 - WebSphere の手動設定](#) (99 ページ)』の各手順を完了してアプリケーションサーバーを手動で設定する必要があります。

- LiveCycle ES2 を設定 (1/5) 画面で、「設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
- LiveCycle ES2 を設定 (2/5) 画面で、「次へ」をクリックしてデフォルトのディレクトリをそのまま使用するか、LiveCycle ES2 がフォントへのアクセスに使用するディレクトリをカスタマイズします。その後で「次へ」をクリックします。
 - (オプション) 「Adobe サーバーフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するかディレクトリを参照します。
 - (オプション) 「カスタムフォントディレクトリ」のディレクトリを指定します。ディレクトリには、ライセンスおよびインストールされている追加のフォントが格納されています。
 - (オプション) 「システムフォントディレクトリ」のデフォルトの場所を変更するには、パスを入力するか、ディレクトリを参照します。
 - (オプション) FIPS を有効にするには、「FIPS を有効にする」を選択します。このオプションは、連邦情報処理規格 (FIPS) を適用する場合にのみ選択してください。
- LiveCycle ES2 を設定 (3/5) 画面で、「参照」をクリックし、「一時ディレクトリの場所」を指定します。

(UNIX のみ) ルートユーザー以外がアプリケーションサーバーを実行している場合、ユーザーは指定された一時ディレクトリに対して全権限を持つ必要があります。

注意： 一時ディレクトリを作成しないと、システムで設定されているデフォルトの場所が使用されます。

- LiveCycle ES2 を設定 (4/5) 画面で「参照」をクリックして、グローバルドキュメントストレージ (GDS) ディレクトリのパスを指定します。

注意： デフォルトの GDS ディレクトリは [appserver root]¥profiles¥[profile_name]¥installedApps¥adobe¥server1¥DocumentStorage です。

- 永続的なドキュメントストレージを設定 (5/5) 画面で、GDS ディレクトリのほかに、永続的なドキュメントストレージのオプションを選択します。次のいずれかを選択します。
 - GDS を使用：** すべての永続的なドキュメントストレージにファイルシステムベースの GDS を使用します。このオプションでは、最高のパフォーマンスを実現し、ストレージの場所として GDS だけを使用します。
 - データベースを使用：** 永続的なドキュメントや長期間有効な成果物の保存に、LiveCycle ES2 データベースを使用します。ただし、ファイルシステムベースの GDS も必要です。データベースを使用することにより、バックアップと復元の手順が簡単になります。

- 「設定」をクリックし、LiveCycle ES2 EAR にこのディレクトリ情報を設定します。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。
- (**Content Services ES2 のみ**) LiveCycle Content Services ES2 設定画面で、Content Services ES2 で使用する次のパラメータを設定して、「次へ」をクリックします。

- **デプロイの種類**：「シングルサーバー」を選択します。
- **コンテンツ保存場所のルートディレクトリ**：Content Services ES2 で使用するルートディレクトリを指定します。
- **WebSphere 共有ライブラリの場所 (myfaces libs)**：LiveCycle Configuration Manager が Content Services ES2 で必要となる myfaces jar ファイルを追加する場合の追加先のフォルダを指定します。デフォルトでは、ディレクトリ myfaces1_1 が、LiveCycle Configuration Manager を実行しているマシン上の [LiveCycleES2 root]¥lib の下に作成されます。

リモートサーバーに LiveCycle ES2 をインストールする場合は、リモートサーバーに同じディレクトリ構造 ([LiveCycleES2 root]¥lib) を作成して、リモートサーバーに myfaces1_1 ディレクトリをコピーする必要があります。

注意： インターナショナル文字を含んだコンテンツ保存場所のルートディレクトリを指定する場合は、UTF-8 ロケールを使用して LiveCycle Configuration Manager を実行します。

- (オプション) **CIFS を有効にする**：このオプションを選択すると、LiveCycle ES2 を実行しているサーバーのファイルに Windows ベースのクライアントからアクセスするときに Common Internet File System (CIFS) プロトコルが使用できます。「次へ」をクリックし、以下の詳細を指定します。

- **CIFS サーバー名**：Content Services ES2 リポジトリへアクセスできるようにするための名前を指定します。LiveCycle Configuration Manager のデフォルトでは、LiveCycle ES2 サーバーに「a」を付けたサーバー名が設定されます。例えば、LiveCycle ES2 サーバーの名前が lcservers である場合は、CIFS サーバーの名前は lcserversa に設定されます。指定する CIFS サーバー名は、ネットワーク内で一意である必要があります。

- **CIFS サーバー実装を選択**：サーバーでサポートされている、次のいずれかの CIFS 実装の種類を選択します。

JAVA (ソケットベース)：CIFS サーバーに割り当てられている代替 IP アドレスを指定し、ローカルドメインでのサーバー名の解決方法を指定します。例えば、プライマリ IP が 10.40.68.142 である場合は、10.40.68.143 を代替 IP として割り当てます。この IP がネットワーク上の他のマシンに割り当てられていないことを確認してください。

Windows ネイティブ (DLL ベース)：「参照」をクリックして、LiveCycle Configuration Manager が DLL ファイルをコピーする先のパス (通常は C:¥Windows¥system32) を選択します。DLL ファイルのコピー元となるパスは、システムの PATH 環境変数に指定する必要があります。例えば、Windows Server 2003 および 2008 の場合、システム PATH に C:¥Windows¥system32 を含める必要があります。

- **WINS サーバーまたはブロードキャストを使用してローカルドメインを解決してください**：ローカルドメインの解決に使用する方法を選択します。

ブロードキャスト：ローカルドメインにおけるネットワークセグメントのブロードキャストアドレス (サブネットマスク) を指定します。例えば、10.40.91.255 などです。ブロードキャストモードでは、CIFS サーバーとクライアントは同じサブネットに属している必要があります。

WINS サーバー：プライマリおよびセカンダリ WINS サーバーの IP アドレスを指定します。例えば、10.40.4.248 などです。WINS サーバーを選択する場合、クライアントはローカルドメイン内のどのサブネットでも使用できます。

Windows のみ

アプリケーションサーバーが Pure IPv6 モードで実行されている場合、CIFS は、Windows ではサポートされません。

CIFS サーバー名および割り当てられた仮想 IP アドレスを使用して、DNS エントリを更新し、Windows クライアントが CIFS サーバーに名前前でアクセスできるようにする必要があります。

UNIX のみ

UNIX マシンの場合、サポートされるのは Java の実装だけです。UNIX マシンでは、仮想インターフェイスを作成し、仮想 IP アドレスを割り当てる必要があります。この IP アドレスは、CIFS の実装で代替 IP アドレスとして使用することができます。これにより、UNIX マシンの場合は、Samba と CIFS を同じマシンで実行することができますが、2つの異なる IP アドレスで実行されることとなります。これらのサービスは同じポートを使用するためです。

LiveCycle ES2 の IPv6 の実装で CIFS を有効にする場合は、EAR ファイルの設定が完了した後で、contentservices.war ファイルを編集する必要があります。EAR ファイルを更新してから、LiveCycle Configuration Manager の次の手順へ進みます。[「IPv6 モードでの CIFS の有効化」\(56 ページ\)](#) を参照してください。

Windows Server 2003 および Windows Server 2008 では、LiveCycle Configuration Manager でのこれらの手順に加えて、他の設定手順を手動で実行する必要があります。『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』ガイドの「CIFS を有効にするためのサーバー設定」を参照してください。

14. (**Content Services ES2 のみ**) LiveCycle Content Services ES2 モジュール設定画面で、次のタスクを実行してから、「設定」をクリックし、Content Services ES2 の設定を使用して LiveCycle ES2 EAR ファイルを設定します。設定が完了したら、「次へ」をクリックします。詳しくは、Alfresco のドキュメントを参照してください。

- Content Services ES2 に実装する Alfresco Module Packages (AMP) を選択します。デフォルトでは、選択した LiveCycle ES2 モジュールに関連するすべての AMP が実装されます。
- (オプション) 独自の AMP を実装するには、「Content Services で独自の AMP をパッケージングしますか?」ボックスを選択し、「参照」をクリックして、カスタム AMP が保存されているディレクトリを選択します。選択したディレクトリ内のすべての AMP がパッケージングされます。

注意： SharePoint クライアントを Alfresco CMS に移行できるようにするには、SharePoint AMP である [LiveCycleES2 root]¥LiveCycle_ES_SDK¥misc¥ContentServices¥adobe-vti-module.amp を追加する必要があります。

このファイルを追加したら、[「SharePoint クライアントアクセスの設定」\(55 ページ\)](#) で説明されている手順を実行します。

15. (**Windows のみ**) Acrobat を LiveCycle PDF Generator に合わせて設定画面で、「設定」をクリックして、Adobe Acrobat および必要な環境設定を設定するスクリプトを実行します。完了したら「次へ」をクリックします。

この画面は、サーバーコンピュータでローカルに LiveCycle Configuration Manager を実行している場合のみ表示されます。Adobe Acrobat が既にインストールされている必要があります。インストールされていないと、この手順は失敗します。

注意： Linux または Solaris で OpenOffice.org を使用するには、Openoffice_PATH 環境変数を設定します。[「環境変数の設定」\(35 ページ\)](#) を参照してください。

16. LiveCycle ES2 の概要を設定画面で、「次へ」をクリックします。設定したアーカイブは [LiveCycleES2 root]/configurationManager/export ディレクトリに配置されます。アプリケーションサーバーが設定され、実行されていることを確認してください。

17. アプリケーションサーバーの設定の詳細画面で、各フィールドの情報を指定して (すべてのフィールドは必須です)、「サーバー接続を検証」をクリックします。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、F1 キーを押してください。

注意： LiveCycle Configuration Manager を使用してアプリケーションサーバーを設定し、ホスト名を IP アドレスで入力している場合、そのアプリケーションサーバーへのアクセスには常にその IP アドレスを使用する必要があります。

注意： WebSphere Network Deployment スタンドアロンアプリケーションサーバーを使用している場合は、デプロイメントマネージャのポート番号を「管理ポート」フィールドに入力します。

18. アプリケーションサーバーの設定の選択画面で、LiveCycle Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、F1 キーを押してください。次の 1 つ以上のタスクを選択することができます。デフォルトでは両方のタスクが選択されます。

- サーバー設定を設定
- データソースを設定

19. (「**サーバー設定を設定**」を選択した場合のみ) サーバー設定の設定画面で、各フィールドに情報を入力して「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、F1 キーを押してください。

サーバー設定を手動で設定している場合は、LiveCycle Configuration Manager を実行したまま、[「付録 - WebSphere の手動設定」\(99 ページ\)](#) の節の説明に従ってタスクを実行します。

20. (「**データソースを設定**」を選択した場合) データソース設定画面で、各フィールドに情報を入力し、「データベース接続をテスト」をクリックします。接続のテストが正常に終了したら、「次へ」をクリックします。必要な情報について詳しくは、F1 キーを押してください。

注意： デフォルトで、LiveCycle Configuration Manager では、作成されたデータソースはノードレベルで設定されます。データソースをサーバーレベルで設定するには、[「付録 - WebSphere の手動設定」\(99 ページ\)](#) で、データベース用に JDBC プロバイダを作成する方法を参照してください。

21. アプリケーションサーバーの設定画面で、「設定」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。

22. アプリケーションサーバーの設定の検証画面で、検証するタスクを選択し、「検証」をクリックします。プロセスが完了したら、「次へ」をクリックします。

注意： このタスクでは、バージョン情報を取得できるように adobe-lcm-lcvalidator.ear ファイルが WebSphere Application Server にデプロイされます。

注意： ローカライズされた Windows 上で WebSphere を使用する場合、[『LiveCycle ES2 のトラブルシューティング』](#) ガイドで説明されている追加の手順を実行する必要があります。

23. LiveCycle ES2 IVS EAR の対象範囲の確認画面が表示される場合は、この画面で、インストール検証サンプル (IVS) EAR ファイルをデプロイメントセットに含めるオプションを選択します。

警告： IVS EAR ファイルを実稼働環境にデプロイすることは、お勧めしません。

24. LiveCycle ES2 EAR をデプロイ画面で、デプロイする EAR ファイル および仮想ホストを選択してから「デプロイ」をクリックします。デプロイには数分かかる場合があります。指示があったら、サーバーを再起動します。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。

注意： LiveCycle Configuration Manager が IBM Websphere® JACL デプロイメントスクリプトの実行を開始した後は、デプロイメントが完了する前に LiveCycle Configuration Manager を終了またはキャンセルしても、デプロイメントは中止されません。EAR は正常にデプロイされるので、ユーザーによるアクションは必要ありません。

デフォルトでは、LiveCycle Configuration Manager は、EAR ファイルを WebSphere のデフォルトの仮想ホスト default_host にデプロイします。EAR ファイルを別の仮想ホストにデプロイする場合は、仮想ホストリストからターゲットホストを選択します。

LiveCycle Configuration Manager を実行しているときに、安全なポートを使用してアプリケーションサーバーに接続するには、次のタスクを実行します。

- IBM から提供された crypto.jar ファイルを LiveCycle Configuration Manager パスに追加します。
- 次の JVM 引数を設定してホスト名の検証を無効にします。

```
ssl.disable.url.hostname.verification.CWPKI0027I=CWPKI0027I
```

デフォルトの HTTPS ポートを使用している場合にのみ、この対処方法を使用してアプリケーションサーバーに接続できます。

25. LiveCycle ES2 データベースの初期化画面で、ホストとポートの情報を確認して、「初期化」をクリックします。データベースの初期化タスクによって、データベースにテーブルが作成され、デフォルトのデータがテーブルに追加されて、データベースに基本的なロールが作成されます。初期化が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
26. LiveCycle ES2 サーバー情報画面で、「パスワード」ボックスに password (これはデフォルトの管理者パスワードです。後で変更することをお勧めします) を入力します。
27. 「サーバー接続を検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックします。

注意： この画面に表示されるサーバー情報はデプロイメントの既定値です。

サーバー接続の検証は、デプロイメントや検証でエラーが発生した場合に、トラブルシューティングの対象を絞り込むのに役立ちます。接続テストが正常に終了しても以降の段階でデプロイメントや検証のエラーが発生する場合は、接続の問題をトラブルシューティングの対象から除外できます。

28. Central Migration Bridge Service デプロイメント設定画面が表示される場合は、この画面で「Central Migration Bridge Service をデプロイメントに含める」オプションを選択し、「次へ」をクリックします。
29. LiveCycle コンポーネントのデプロイメント画面で、「デプロイ」をクリックします。ここでデプロイされるコンポーネントは、サービスのデプロイ、統合および実行を目的として LiveCycle ES2 サービスコンテナにプラグインされている Java アーカイブファイルです。検証の進行状況を確認するには、「進行状況ログを表示」をクリックします。デプロイメントが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
30. LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証画面で、「検証」をクリックします。LiveCycle Configuration Manager によって、LiveCycle コンポーネント (Java アーカイブファイル) が LiveCycle ES2 サーバーにデプロイされ、稼働していることが検証されます。検証の進行状況を確認するには、「進行状況ログを表示」をクリックします。検証が正常に完了したら、「次へ」をクリックします。
31. LiveCycle コンポーネントを設定画面で、LiveCycle Configuration Manager で実行するタスクを選択し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
32. (オプション - EMC Documentum のみ) EMC Documentum のクライアントを指定画面で、「Connector for EMC Documentum コンテンツサーバーを設定します。」を選択して、次の情報を指定します。詳細情報を入力して、「検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
 - **EMC Documentum クライアントのバージョンを選択：** EMC Documentum Content Server で使用するクライアントのバージョンを選択します。
 - **EMC Documentum クライアントのインストールディレクトリのパス：**「参照」をクリックして、ディレクトリのパスを選択します。
33. (オプション - EMC Documentum のみ) EMC Documentum Content Server 設定を指定画面で、EMC Documentum Server の詳細を入力し、「次へ」をクリックします。入力する必要がある情報について詳しくは、F1 キーを押してください。
34. (オプション - EMC Documentum のみ) Adobe LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum を設定画面で、「Documentum Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

35. **(オプション - IBM Content Manager のみ)** IBM Content Manager のクライアントを指定画面で、「IBM Content Manager のクライアントを指定」を選択し、「IBM Content Manager クライアントのインストールディレクトリのパス」を入力します。「検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
36. **(オプション - IBM Content Manager のみ)** IBM Content Manager サーバーの設定を指定画面で、IBM Content Manager Server の詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
37. **(オプション - IBM Content Manager のみ)** Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager を設定画面で、「IBM Content Manager Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。
38. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet のクライアントを指定画面で、「IBM FileNet のクライアントを指定」を選択し、次の設定を指定します。詳細情報を入力して、「検証」をクリックし、完了したら、「次へ」をクリックして次に進みます。
 - **IBM FileNet クライアントのバージョンを選択** : EMC Documentum Content Server で使用するクライアントのバージョンを選択します。
 - **IBM FileNet クライアントのインストールディレクトリのパス** : 「参照」をクリックして、ディレクトリのパスを選択します。
39. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet Content Server の設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
40. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet Process Engine のクライアントを指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「確認」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
41. **(オプション - IBM FileNet のみ)** IBM FileNet Process Engine サーバーの設定を指定画面で、必要な詳細情報を入力し、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
42. **(オプション - IBM FileNet のみ)** Adobe LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet を設定画面で、「FileNet Connector を設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。詳しくは、F1 キーを押してください。
43. **(オプション - LiveCycle ES2 Connector for Microsoft SharePoint のみ)** Adobe LiveCycle ES2 Connector for Microsoft SharePoint の画面で、次の詳細情報を入力して「設定」をクリックします。完了したら、「次へ」をクリックします。

注意 : LiveCycle 管理コンソールを使用して後で SharePoint Connector を設定する場合は、この手順をスキップできます。

 - **ユーザー名およびパスワード** : SharePoint サーバーへの接続に使用するユーザーアカウントの詳細情報を入力します。
 - **ホスト名** : SharePoint サーバーのホスト名を <hostname>:<port> の形式で入力します。SharePoint サーバー上の Web アプリケーションのポート番号を指定します。
 - **ドメイン名** : SharePoint サーバーが存在しているドメインを入力します。
44. **(PDF Generator ES2 のみ)** LiveCycle サーバマシン管理者のユーザー資格情報を管理画面で、サーバーコンピュータの管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力して、「追加」をクリックします。

注意 : Windows Server 2008 の場合は、管理ユーザーを 1 人以上追加する必要があります。Windows Server 2008 では、追加するユーザーのユーザーアカウント制御 (UAC) を無効にする必要があります。UAC を無効にするには、コントロールパネル/ユーザーアカウント/ユーザーアカウント制御の有効化または無効化を順にクリックし、「ユーザーアカウント制御 (UAC) を使ってコンピュータの保護に役立たせる」の選択を解除します。次に、「OK」をクリックします。変更を適用するには、コンピュータを再起動します。

Windows Server 2003、Linux および Solaris の場合は、ユーザーの追加は必須ではありません。AIX プラットフォームでは、マルチスレッドの変換はサポートされていません。Linux および Solaris プラットフォームで追加されるユーザーには、sudo 権限が必要です。

詳しくは、この画面で **F1** キーを押し、LiveCycle Configuration Manager ヘルプにアクセスしてください。

45. **(LiveCycle Configuration Manager がサーバーマシン上でローカルに実行されている場合の PDF Generator ES2 のみ)** LiveCycle PDFGenerator System Readiness Test 画面で、「開始」をクリックし、システムが PDF Generator ES2 に合わせて適切に設定されているかどうかを検証します。
46. **(PDF Generator ES2 のみ)** System Readiness Tool レポートを確認し、「次へ」をクリックします。
47. **(Reader Extensions ES2 のみ)** LiveCycle Reader Extensions ES2 の秘密鍵証明書の設定画面で、モジュールサービスをアクティブにする Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書に関連する詳細を指定します。
 - **秘密鍵証明書ファイル**：Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書のパスとファイル名 (.pfx または .p12 ファイルタイプ)。
 - **秘密鍵証明書のパスワード**：秘密鍵証明書に関連付けられるパスワード。このパスワードは秘密鍵証明書ファイルと共に提供されています。
 - **この秘密鍵証明書のユーザー定義の名前**：設定時にこの秘密鍵証明書に対して指定した名前（またはエイリアス）。

この名前は、Reader Extensions ES2 Web インターフェイスに表示され、SDK 呼び出しを通じて秘密鍵証明書の参照に使用されるエイリアスです。Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書には任意の一意名を作成できます。

注意：ここで、「LiveCycle 管理コンソールを使用して後から設定」を選択すると、この手順をスキップできます。デプロイメントの完了後に、LiveCycle 管理コンソールで Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書を設定できます (LiveCycle 管理コンソールにログインしたら、ホーム/設定/Trust Store の管理/ローカル秘密鍵証明書の順にクリックします)。

「設定」をクリックし、「次へ」をクリックします。

48. (オプション) LiveCycle ES2 サンプルを読み込み画面で、「読み込み」をクリックします。読み込みが正常に完了したら、「次へ」をクリックします。または、「LiveCycle ES2 サンプルの読み込みをスキップ」をクリックしてから「次へ」をクリックし、サンプルを後で読み込みます。

警告：LiveCycle ES2 サンプルは実稼働環境に読み込まないでください。これらのサンプルによりデフォルトパスワードを持つユーザーが作成され、実稼働環境にセキュリティ上の問題が生じる可能性があります。

49. 概要ページで、実行するタスクを確認して、「次へ」をクリックします。
50. 次の手順画面に、URL とログイン情報が表示されます。「完了」をクリックし、LiveCycle Configuration Manager を終了します。

注意：LiveCycle ES2 を設定したら、実際のソリューション実装に該当する設定後の作業を行います。

3.4 EAR ファイルのアンインストール

LiveCycle ES2 モジュールのデプロイを解除するには、次の手順を実行します。

1. アプリケーションサーバーを起動します。
2. Web ブラウザの URL 行に `http://hostname:port/admin` と入力して、WebSphere Administrative Console を起動します。
3. ナビゲーションツリーで、次の操作を実行します。
 - (WebSphere 6.1) Applications / Enterprise Applications をクリックします。
 - (WebSphere 7) Applications / Application Types / WebSphere enterprise applications をクリックします。
4. `adobe-livecycle-native-websphere-[OS].ear`、`adobe-livecycle-websphere.ear`、`adobe-contentservices.ear`、`adobe-workspace-client.ear` の各アプリケーションおよびインストールされているその他のすべての LiveCycle ES2 アプリケーションを選択してから、「Stop」をクリックします。

注意： `adobe-workspace-client.ear` は Process Management ES2 と共にのみデプロイされます。また、`adobe-contentservices.ear` は Content Services ES2 と共にのみデプロイされます。
5. `adobe-livecycle-native-websphere-[OS].ear`、`adobe-livecycle-websphere.ear`、`adobe-contentservices.ear`、`adobe-workspace-client.ear` の各アプリケーションおよびインストールされているその他のすべての LiveCycle ES2 アプリケーションを選択してから、「Uninstall」をクリックします。
6. 「Save directly to Master Configuration」をクリックしてから、WebSphere を再起動します。

3.5 次の手順

LiveCycle ES2 の設定とデプロイを完了したら、次の作業を実行できます。

- デプロイメントの確認 ([「デプロイメントの確認」\(31 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle 管理コンソールへのアクセス ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(31 ページ\)](#) を参照)。
- PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 の設定 ([「LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定」\(34 ページ\)](#) を参照)。
- Rights Management ES2 の最終設定 ([「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(43 ページ\)](#) を参照)。
- LDAP にアクセスするための LiveCycle ES2 モジュールの設定 ([「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」\(44 ページ\)](#) を参照)。
- PDF Generator ES2 の監視フォルダパフォーマンスの設定 ([「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(43 ページ\)](#) を参照)。
- FIPS モードの有効化 ([「FIPS モードの有効化」\(45 ページ\)](#) を参照)。
- HTML 電子署名の設定 ([「HTML 電子署名の設定」\(46 ページ\)](#) を参照)。
- Connector for EMC Documentum、Connector for IBM Content Manager または Connector for IBM FileNet の設定 ([「Connector for EMC Documentum サービスの設定」\(46 ページ\)](#)、[「Configuring the Connector for IBM FileNet service」\(50 ページ\)](#) または [「Connector for IBM Content Manager の設定」\(57 ページ\)](#) を参照)。
- PDF Generator ES2 の環境変数の設定 ([「環境変数の設定」\(35 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 のインストールおよびデプロイ ([「LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 の構成およびデプロイ」\(63 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle ES2 のアンインストール ([「LiveCycle ES2 のアンインストール」\(61 ページ\)](#) を参照)。

4

デプロイメント完了後の作業

この章では、LiveCycle 管理コンソールにアクセスしてアプリケーションサーバーのログファイルを確認することにより、デプロイメントの検証を行う方法について説明します。また、インストール、設定およびアプリケーションサーバーへのデプロイを完了した LiveCycle ES2 モジュールおよびサービスを使用して処理を開始する方法についても説明します。

- [「アプリケーションサーバーの再起動」 \(30 ページ\)](#)
- [「日付、時刻およびタイムゾーンの設定」 \(30 ページ\)](#)
- [「デプロイメントの確認」 \(31 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール」 \(32 ページ\)](#) (オプション)
- [「モジュールの Web アプリケーションへのアクセス」 \(32 ページ\)](#)
- [「User Management へのアクセス」 \(34 ページ\)](#)
- [「LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定」 \(34 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」 \(44 ページ\)](#)
- [「FIPS モードの有効化」 \(45 ページ\)](#)
- [「HTML 電子署名の設定」 \(46 ページ\)](#)
- [「Document Management サービスの設定」 \(46 ページ\)](#)
- [「Connector for EMC Documentum サービスの設定」 \(46 ページ\)](#)
- [「Configuring the Connector for IBM FileNet service」 \(50 ページ\)](#)
- [「Connector for IBM Content Manager の設定」 \(57 ページ\)](#)
- [「システムイメージバックアップの実行」 \(61 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2 のアンインストール」 \(61 ページ\)](#)

この章の設定を行った後、LiveCycle ES2 の開発環境および実稼働環境の設定について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

4.1 アプリケーションサーバーの再起動

LiveCycle ES2 を初めてデプロイするとき、サーバーはデプロイメントモードになっています。このモードでは、ほとんどのモジュールがメモリ内に配置されます。このため、メモリの消費量が高く、サーバーは実稼働に適した状態ではありません。アプリケーションサーバーを再起動して、サーバーをクリーンな状態に戻す必要があります。

4.2 日付、時刻およびタイムゾーンの設定

LiveCycle ES2 環境に接続するすべてのサーバーで日付、時刻およびタイムゾーンを設定することで、時間に依存するモジュール (LiveCycle Digital Signatures ES2 や LiveCycle Reader Extensions ES2 など) が正常に機能するようになります。例えば、未来の時間に作成された署名は、有効になりません。

同期を必要とするサーバーは、データベースサーバー、LDAP サーバー、HTTP サーバーおよび J2EE サーバーです。

4.3 デプロイメントの確認

LiveCycle 管理コンソールにログインすることで、デプロイメントの検証を行うことができます。正常にログインできる場合は、LiveCycle ES2 がアプリケーションサーバーで実行されており、データベースにデフォルトのユーザーが作成されています。

アプリケーションサーバーのログファイルを確認して、コンポーネントが正しくデプロイされたことを確認したり、発生する可能性のあるデプロイメントの問題の原因を特定したりすることができます。

4.3.1 LiveCycle 管理コンソールへのアクセス

LiveCycle 管理コンソールは、各種設定ページにアクセスするための Web ベースのポータルです。これらの設定ページでは、LiveCycle ES2 の動作を制御する実行時プロパティを設定できます。LiveCycle 管理コンソールにログインすると、User Management、監視フォルダ、電子メールクライアント設定、および他のサービスの管理設定オプションにアクセスできます。LiveCycle 管理コンソールでは、管理者がアーカイブの管理およびサービスの実稼働環境へのデプロイに使用するアプリケーションおよびサービスにもアクセスできます。

ログインする場合のデフォルトのユーザー名とパスワードは、それぞれ administrator と password です。初回のログイン後は、User Management にアクセスしてパスワードを変更してください。アップグレードした環境の場合は、ユーザー名とパスワードは、管理者が LiveCycle ES (8.x) を設定したときに指定したものと同じです。

LiveCycle 管理コンソールにアクセスするには、デプロイ済みの LiveCycle ES2 がアプリケーションサーバー上で実行されている必要があります。

LiveCycle 管理コンソールの使用について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

▶ LiveCycle 管理コンソールにアクセスするには

1. Web ブラウザに次の URL を入力します。

```
http://[host name]:[port]/adminui
```

WebSphere のデフォルトのポート番号は 9080 です。

2. ログイン後、「サービス」をクリックして、サービスの管理ページにアクセスするか、「設定」をクリックして、様々なモジュールの設定を管理できるページにアクセスします。

4.3.2 デフォルトのパスワードの変更

LiveCycle ES2 では、インストール時に 1 つ以上のデフォルトのユーザーが作成されます。これらのユーザーのパスワードは製品資料に記載され、公開されています。セキュリティ要件に応じて、このデフォルトのパスワードを変更する必要があります。

LiveCycle ES2 管理者のユーザーパスワードは、デフォルトで「password」に設定されています。このパスワードは、LiveCycle 管理コンソール/設定/User Management で変更する必要があります。

4.3.3 ログファイルの表示

実行時や起動時のエラーなどのイベントは、アプリケーションサーバーのログファイルに記録されます。アプリケーションサーバーへのデプロイ中に何らかの問題が発生した場合には、ログファイルを参照して問題を見つけることができます。ログファイルは、テキストエディタを使用して開くことができます。

次のログファイルが [appserver root]/profiles/[profilename]/logs/[server name] ディレクトリにあります。

- SystemErr.log
- SystemOut.log
- startServer.log

注意：(WebSphere 7.0 のみ) LiveCycle ES2 を起動するたびに、ログに次のエラーが記録されます。

```
FacesConfigur E org.apache.myfaces.config.FacesConfigurator  
configureRenderKits failed to configure class  
com.adobe.framework.jsf.renderkit.SecureInputRenderer  
java.lang.ClassCastException
```

このエラーは、WebSphere 7.0 で必要とされる IBM JSF エンジンとは異なるバージョンのエンジンが原因で発生します。これは既知の問題で、無視しても問題のないエラーです。

4.4 LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール

9.5 の新機能

LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールを予定している場合は、最初に LiveCycle ES2 サービスパック 2 以降を適用してから LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator をインストールする必要があります。ただし、LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストール後に LiveCycle Configuration Manager を再実行する必要があります。ご注意ください。

Solution Accelerator のインストールについて詳しくは、『[LiveCycle ES2.5 Solution Accelerator のインストールおよびデプロイ](#)』を参照してください。

4.5 モジュールの Web アプリケーションへのアクセス

LiveCycle ES2 のデプロイ後には、次のモジュールに関連付けられた Web アプリケーションにアクセスできます。

- LiveCycle Reader Extensions ES2
- LiveCycle Workspace ES2
- LiveCycle Content Services ES2
- LiveCycle Rights Management ES2
- LiveCycle Business Activity Monitoring ES2

デフォルトの管理者権限を使用して Web アプリケーションにアクセスし、そのアプリケーションにアクセス可能であることを確認したら、他のユーザーがログインしてアプリケーションを使用できるように追加のユーザーとロールを作成できます ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照)。

▶ Reader Extensions ES2 Web アプリケーションにアクセスするには

注意： Reader Extensions ES2 秘密鍵証明書を適用して、新しいユーザーのユーザーロールを適用する必要があります ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「秘密鍵証明書を Reader Extensions ES2 で使用するための設定」を参照)。

1. ローカルデプロイメントを使用している場合は、Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

```
http://localhost:[port]/ReaderExtensions
```

WebSphere の場合、ポートは 9080 です。

2. デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

注意 : デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインするには、管理者またはスーパーユーザーの権限が必要です。他のユーザーが Reader Extensions ES2 Web アプリケーションにアクセスできるようにするには、User Management でユーザーを作成し、そのユーザーに Reader Extensions Web アプリケーションロールを付与する必要があります。

▶ **Workspace ES2 にアクセスするには :**

1. ローカルデプロイメントを使用している場合は、Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

`http://localhost:[port]/workspace`

WebSphere の場合、ポートは 9080 です。

2. デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

▶ **Content Services ES2 Web アプリケーションにアクセスするには :**

注意 : 新しいユーザーがこの Web アプリケーションにログインできるように、LiveCycle ContentSpace 管理者ロールまたは LiveCycle ContentSpace ユーザーロールを適用する必要があります。ロールを適用するには、User Management でユーザーを作成して適切なロールを適用します。

1. ローカルデプロイメントを使用している場合は、Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

`http://localhost:[port]/contentspace`

WebSphere の場合、ポートは 9080 です。

2. デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

4.6 Rights Management ES2 へのアクセス

User Management で LiveCycle Rights Management End User ロールのユーザーを作成し、そのユーザーに関連付けられたログイン情報を使用して Rights Management ES2 の管理者またはエンドユーザーアプリケーションにログインする必要があります。

注意 : デフォルトの管理者ユーザーは、Rights Management ES2 エンドユーザー Web アプリケーションにはアクセスできません。ただし、このユーザーのプロファイルに必要なロールを追加できます。新しいユーザーを作成したり、既存のユーザーを修正したりするには、LiveCycle 管理コンソールを使用します。

▶ **Rights Management ES2 エンドユーザー Web アプリケーションにアクセスするには :**

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

`http://[server]:[port]/edc/Login.do`

▶ **Rights Management ES2 管理 Web アプリケーションにアクセスするには：**

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
`http:// [server] : [port] /adminui`
2. サービス / LiveCycle Rights Management ES2 をクリックします。Rights Management ES2 でのユーザーおよびロールの設定について詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照してください。

▶ **LiveCycle Rights Management End User ロールをアサインするには**

1. LiveCycle 管理コンソールにログインします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(31 ページ\)](#) を参照)。
2. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。
3. 「キーワード」ボックスに `すべての` と入力し、「条件 2」リストで「グループ」を選択します。
4. 「検索」をクリックし、該当するドメインについて、表示されるリストの「すべてのプリンシパル」をクリックします。
5. 「ロールアサイン」タブをクリックし、「ロールを検索」をクリックします。
6. ロールのリストで、「LiveCycle Rights Management End User」の横にあるチェックボックスを選択します。
7. 「OK」をクリックし、「保存」をクリックします。

4.7 User Management へのアクセス

管理者は、User Management を使用して、1 つ以上のサードパーティユーザーディレクトリと同期するすべてのユーザーおよびグループのデータベースを管理できます。User Management には、Reader Extensions ES2、Workspace ES2、Rights Management ES2、Process Management ES2、Forms ES2、PDF Generator ES2、PDF Generator 3D ES2 および Content Services ES2 などの LiveCycle ES2 モジュールのユーザー認証、権限付与およびユーザー管理の機能があります。

▶ **User Management にアクセスするには：**

1. LiveCycle 管理コンソールにログインします。
2. ホームページで、設定 / User Management をクリックします。

注意： User Management でのユーザー設定について詳しくは、User Management ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックしてください。

4.8 LiveCycle PDF Generator ES2 または 3D ES2 の設定

LiveCycle PDF Generator ES2 または LiveCycle PDF Generator 3D ES2 を LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールしている場合は、次のタスクを実行します。

- [「環境変数の設定」\(35 ページ\)](#)
- [「HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定」\(36 ページ\)](#)
- [「Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定」\(36 ページ\)](#)
- [「Acrobat Professional の設定」\(36 ページ\)](#)
- [「マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定」\(37 ページ\)](#)
- [「Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには」\(38 ページ\)](#)

- [「PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 へのフォントの追加」 \(39 ページ\)](#)
- [「ネットワークプリンタクライアントのインストール」 \(42 ページ\)](#)
- [「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」 \(43 ページ\)](#)

4.8.1 環境変数の設定

PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 モジュールをインストールして、ファイルを PDF に変換するように設定した場合、一部のファイル形式については、環境変数を手動で設定して、対応するアプリケーションの起動に使用する実行ファイルの絶対パスを含める必要があります。次の表に、PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 で環境変数を設定する必要があるネイティブアプリケーションを示します。

アプリケーション	環境変数	例
Acrobat	Acrobat_PATH	C:\Program Files\Adobe\Acrobat 9.0\Acrobat\Acrobat.exe 注意： 環境変数 Acrobat_PATH は大文字と小文字が区別されます。
Adobe FrameMaker®	FrameMaker_PATH	C:\Program Files\Adobe\FrameMaker7.1\FrameMaker.exe
メモ帳	Notepad_PATH	C:\WINDOWS\Notepad.exe 注意： Notepad_PATH 変数は空欄でかまいません。
OpenOffice	OpenOffice_PATH	C:\Program Files\OpenOffice.org 3
Adobe PageMaker®	PageMaker_PATH	C:\Program Files\Adobe\PageMaker 7.0\PageMaker.exe
WordPerfect	WordPerfect_PATH	C:\Program Files\WordPerfect Office 12\Programs\wpwin12.exe

注意： 環境変数 OpenOffice_PATH は、実行ファイルのパスではなく、インストールフォルダのパスに設定します。

Word、PowerPoint、Excel、Visio、Project などの Microsoft Office アプリケーションや AutoCAD のパスを設定する必要はありません。これらのアプリケーションがサーバーにインストールされている場合は、Generate PDF サービスが自動的にこれらのアプリケーションを起動します。

▶ 新しい Windows 環境変数を作成するには

1. スタート/コントロールパネル/システムを選択します。
2. 「詳細設定」タブをクリックして、「環境変数」をクリックします。
3. 「システム環境変数」セクションで、「新規」ボタンをクリックします。
4. 設定が必要な環境変数の名前（例えば、Photoshop_PATH など）を入力します。このフォルダは、実行ファイルを含むフォルダです。例えば、次のコードを入力します。

```
D:\Program Files\Adobe\Adobe Photoshop CS4\Photoshop.exe
```

▶ Linux または UNIX で PATH 変数を設定するには (OpenOffice のみ) :

- 次のコマンドを入力します。

```
export OpenOffice_PATH=/opt/openoffice.org3
```

4.8.2 HTTP プロキシサーバーを使用するようにアプリケーションサーバーを設定

LiveCycle ES2 が実行されているコンピュータが、プロキシ設定を使用して外部 Web サイトにアクセスしている場合、アプリケーションサーバーは、次の値を Java 仮想マシン (JVM) 引数として設定して起動する必要があります。

```
-Dhttp.proxyHost=[server host]
-Dhttp.proxyPort=[server port]
```

アプリケーションサーバーを HTTP プロキシホスト設定で起動するには、次の手順を完了します。

▶ WebSphere に設定を追加するには：

1. WebSphere Administrative Console ナビゲーションツリーで、次の操作を実行します。
 - (WebSphere 6.1) WebSphere Administrative Console にログインして、Servers / Application servers をクリックし、設定するサーバーインスタンスの名前 (例えば server1) をクリックします。
 - (WebSphere 7) WebSphere Administrative Console にログインして、Servers / Server Types / WebSphere application servers をクリックし、設定するサーバーインスタンスの名前 (例えば server1) をクリックします。
2. 「Server Infrastructure」で、Java and Process Management / Process Definition をクリックします。
3. 「Additional Properties」で、Java Virtual Machine / Custom Properties をクリックします。
4. 「New」をクリックし、「Name」ボックスに `http.proxyHost` と入力します。
5. 「Value」ボックスに、HTTP プロキシサーバーのホスト名または IP アドレスを入力し、「OK」をクリックします。
6. 「New」をクリックし、「Name」ボックスに `http.proxyPort` と入力します。
7. 「Value」ボックスに、HTTP プロキシサーバーのポート番号を入力し、「OK」をクリックします。
8. 「Messages」ボックスで、「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. WebSphere サーバーインスタンスをすべて再起動します。

4.8.3 Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定

Adobe PDF プリンタを、サーバーのデフォルトプリンタに設定する必要があります。Adobe PDF プリンタがデフォルトとして設定されていない場合、PDF Generator ES2 ではファイルを変換できません。

▶ デフォルトのプリンタを設定するには

1. スタート / プリンタと FAX を選択します。
2. プリンタと FAX ウィンドウで、「Adobe PDF」を右クリックして「通常使うプリンタに設定」を選択します。

4.8.4 Acrobat Professional の設定

この手順は、LiveCycle ES2 のインストールを完了後に Acrobat 9.0 へのアップグレードまたはインストールを行った場合にのみ必要です。Acrobat のアップグレードは、LiveCycle Configuration Manager を実行してアプリケーションサーバーに LiveCycle ES2 をデプロイした後に実行できます。Acrobat Professional のルートディレクトリは、`[Acrobat root]` と表記します。通常、ルートディレクトリは `C:\Program Files\Adobe\Acrobat 9.0\Acrobat` です。

▶ PDF Generator で使用するために Acrobat を設定するには：

1. Acrobat の以前のバージョンがインストールされている場合、Windows コントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して Acrobat をアンインストールします。
2. 次のいずれかを実行します。
 - メディアを使用する場合は、Acrobat の CD を挿入します。
 - ESD ダウンロードを使用している場合は、ESD の場所から Acrobat をダウンロードします。
3. AutoPlay.exe ファイルを実行して、Acrobat をインストールします。
4. LiveCycle ES2 インストールメディアの additional¥scripts フォルダに移動します。
次のバッチファイルを実行します。`Acrobat_for_PDFG_Configuration.bat`
`[LiveCycleES2 root]/pdfg_config`
5. Acrobat を開き、ヘルプ/アップデートの有無をチェック/環境設定を選択します。
6. 「自動的に新しいアップデートを確認する」を選択解除します。

▶ Acrobat のインストールを検証するには：

1. システム上の PDF ファイルに移動し、そのファイルをダブルクリックして Acrobat で開きます。PDF ファイルが正常に開いた場合は、Acrobat が正しくインストールされています。
2. PDF ファイルを正しく開くことができない場合は、Acrobat をアンインストールしてから再インストールします。

注意： Acrobat のインストール完了後に表示される Acrobat のすべてのダイアログボックスを閉じてから、Acrobat の自動アップデートを無効化してください。

環境変数 `Acrobat_PATH` を、Acrobat.exe を指すように設定してください（例えば、`C:¥Program Files¥Adobe¥Acrobat 9.0¥Acrobat¥Acrobat.exe`）。

▶ ネイティブアプリケーションサポートを設定するには

1. 前の手順で説明したように、Acrobat をインストールして検証します。
2. Adobe PDF プリンタをデフォルトのプリンタとして設定します。
3. (PDF Generator 3D ES2) `[LiveCycleES2 root]¥plugins¥x86_win32¥`にある DLL ファイルを登録します。
`PDFG3dAddin.dll`にある DLL ファイルを登録します。

4.8.5 マルチスレッドファイル変換のユーザーアカウントの設定

デフォルトでは、PDF Generator ES2 は、一度に 1 つの OpenOffice、Microsoft Word または PowerPoint ドキュメントのみを変換できます。マルチスレッド変換を有効にすると、OpenOffice または PDFMaker の複数のインスタンスを起動して PDF Generator ES2 で同時に複数のドキュメントを変換できます (PDFMaker は、Word 文書と PowerPoint ドキュメントの変換に使用されます)。

注意： マルチスレッドファイル変換は、Microsoft Word 2007 および Microsoft PowerPoint 2007 のみでサポートされています。Microsoft Excel 2003 および Microsoft Excel 2007 ではサポートされていません。

マルチスレッドファイル変換を有効にするには、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』ガイドの「マルチスレッドファイル変換の有効化」の節で説明されているタスクを実行する必要があります。

Linux および Solaris ユーザーの場合、ユーザーを作成して、パスワードプロンプトが表示されないように追加設定を指定する必要があります。

▶ ユーザーアカウントの追加：

1. LiveCycle Configuration Manager で、サービス/LiveCycle PDF Generator ES2/ユーザーアカウントをクリックします。
2. 「追加」をクリックし、LiveCycle ES2 サーバー上での管理者権限を持つユーザーのユーザー名とパスワードを入力します。OpenOffice のユーザーを設定する場合は、最初に表示される OpenOffice のアクティベート用のダイアログを閉じます。

注意： OpenOffice のユーザーを設定する場合、OpenOffice のインスタンス数を、この手順で指定したユーザーアカウント数よりも大きくすることはできません。

3. LiveCycle ES2 サーバーを再起動します。

▶ Linux または Solaris での OpenOffice に必要な追加設定

1. 上記の説明に従って、ユーザーアカウントを追加します。
2. /etc/sudoers ファイルで、追加のユーザー (LiveCycle ES2 サーバーを実行する管理者以外) のエントリを追加します。例えば、ユーザー lcadm サーバー myhost として LiveCycle ES2 を実行している場合、user1 および user2 として動作させるには、/etc/sudoers に次のエントリを追加します。

```
lcadm myhost=(user1) NOPASSWD: ALL  
lcadm myhost=(user2) NOPASSWD: ALL
```

この設定により、lcadm は、ホスト myhost において user1 または user2 として、パスワードの入力を求められることなくすべてのコマンドを実行できるようになります。

3. 「ユーザーアカウントの追加」で追加したすべてのユーザーが LiveCycle ES2 サーバーに接続できるようにします。例えば、user1 というローカルユーザーに LiveCycle ES2 サーバーに接続する権限を許可するには、次のコマンドを使用します。

```
xhost +local:user1@
```

詳しくは、xhost コマンドのドキュメントを参照してください。

4. サーバーを再起動します。

4.8.6 Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには

PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 を使用して HTML ファイルを PDF に変換すると、日本語、韓国語、中国語などの一部の東アジア言語は、アラビア語、アルメニア語、グルジア語、ヘブライ語、インド系言語、タイ語、ベトナム語などの右から左方向に書く言語同様、PDF ファイルに表示されない可能性があります。

これらの言語を Windows Server 2003 で正常に表示するには、クライアントおよびサーバーに適切なフォントが必要です。

▶ Windows Server 2003 に東アジア文字をインストールするには

1. スタート/コントロールパネル/地域と言語のオプションを選択します。
2. 「言語」タブをクリックし、「東アジア言語のファイルをインストールする」を選択します。
3. 「詳細設定」タブをクリックし、「コードページ変換テーブル」のすべてのオプションを選択します。

変換された PDF ファイルで依然としてフォントが正しく表示されない場合は、C:\WINDOWS\FONTS ディレクトリに Arial Unicode MS (True Type) フォント (ARIALUNI.TTF) があることを確認します。

4.8.7 PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 へのフォントの追加

LiveCycle ES2 には、Adobe LiveCycle ES2 Fonts Management というフォントの中央リポジトリがあり、すべての LiveCycle ES2 モジュールからアクセスできます。サーバー上の LiveCycle ES2 以外のアプリケーションで、追加フォントを使用できるように設定します。これにより、PDF Generator では、そのアプリケーションを使用して作成された PDF ドキュメントで追加フォントを使用できるようになります。

4.8.7.1 LiveCycle 以外のアプリケーション

次のリストには、PDF Generator ES2 または PDF Generator 3D ES2 でサーバー側の PDF 生成に使用できる LiveCycle ES2 以外のアプリケーションが含まれています。

Windows 専用アプリケーション

- Microsoft Office Word
- Microsoft Office Excel
- Microsoft Office PowerPoint
- Microsoft Office Project
- Microsoft Office Visio
- Microsoft Office Publisher
- AutoDesk AutoCAD
- Corel WordPerfect
- Adobe Photoshop CS
- Adobe FrameMaker
- Adobe PageMaker
- Adobe Acrobat Professional Extended

マルチプラットフォームアプリケーション

- OpenOffice Writer
- OpenOffice Calc
- OpenOffice Draw
- OpenOffice Impress

注意：これらのアプリケーションの他にも、各ユーザーが追加したアプリケーションが含まれている場合があります。

上記のアプリケーションのうち OpenOffice スイート (Writer、Calc、Draw および Impress) は、他のアプリケーションが Windows にのみ対応しているのに対して、Windows、Solaris および Linux プラットフォームに対応しています。

4.8.7.2 Windows 専用アプリケーションへの新しいフォントの追加

上記のすべての Windows 専用アプリケーションでは、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダにあるすべてのフォントにアクセスできます。これらのアプリケーションには、C:\Windows\Fonts に加えて、それぞれ固有のフォントフォルダが存在する場合があります。

このため、LiveCycle ES2 フォントディレクトリにカスタムフォントを追加する場合、C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダにそのフォントをコピーして、Windows 専用のアプリケーションでもこれらのフォントを使用できるようにする必要があります。

カスタムフォントの使用に際しては、使用許諾契約に基づくライセンスを取得して、そのフォントにアクセスするアプリケーションでの使用が許可されている必要があります。

4.8.7.3 OpenOffice スイートへの新しいフォントの追加

OpenOffice スイートへのカスタムフォントの追加方法は、OpenOffice Fonts-FAQ ページ (<http://wiki.services.openoffice.org>) で説明されています。

また、OpenOffice スイートには、フォント関連の動作に関して次のようなリソースがあります。

- 「OpenOffice Fonts Troubleshooting Guide」 (<http://www.openoffice.org/FAQs/fontguide.html>)。このガイドの項目の一部は OpenOffice 1.x にのみ適用されます。したがって、OpenOffice 3.x 以降に関しては情報が古くなっている可能性があります。
- 「Importing Fonts into OpenOffice 2.1」 (http://openoffice.blogspot.com/openoffice/2007/02/font_import_wiz.html) このブログは OpenOffice 2.1 を対象としていますが、内容は OpenOffice 2.2 以降にも適用されます。

4.8.7.4 その他のアプリケーションへの新しいフォントの追加

他のアプリケーションに PDF 作成のサポートを追加した場合、これらのアプリケーションのヘルプを参照して新しいフォントを追加します。Windows では、通常はカスタムフォントを C:\Windows\Fonts (または同等の) フォルダに追加すれば十分です。

4.8.8 HTML から PDF への変換の設定

HTML から PDF への変換プロセスは、Acrobat 9 の設定を使用するように設計されています。この設定は、LiveCycle PDF Generator ES2 の設定よりも優先されます。

注意： この設定は、HTML から PDF への変換プロセスを有効にするために必要です。設定が行われていない場合、この変換タイプは失敗します。

▶ HTML から PDF への変換を設定するには

1. [「Acrobat Professional の設定」\(36 ページ\)](#) の説明に従って、Acrobat をインストールして検証します。
2. [LiveCycleES2 root]\plugins\x86win_32 ディレクトリにある pdfgen.api ファイルを探し、[Acrobat root]\Acrobat\plug_ins ディレクトリにコピーします。

4.8.8.1 HTML から PDF への変換における Unicode フォントのサポート

警告： 入力用 zip ファイルにファイル名が 2 バイト文字の HTML ファイルが含まれている場合、HTML から PDF への変換は失敗します。この問題を回避するには、HTML ファイルに名前を付けるときに 2 バイト文字を使用しないようにします。

1. Unicode フォントを、使用しているシステムに応じて、次のいずれかのディレクトリにコピーします。
 - Windows
[Windows root]\windows\fonts
[Windows root]\winnt\fonts

- UNIX

- UNIX
 - /usr/X/lib/X11/fonts/TrueType
 - /usr/openwin/lib/X11/fonts/TrueType
 - /usr/share/fonts/default/TrueType
 - /usr/X11R6/lib/X11/fonts/ttf
 - /usr/X11R6/lib/X11/fonts/truetype
 - /usr/X11R6/lib/X11/fonts/TrueType
 - /usr/X11R6/lib/X11/fonts/TTF
 - /Users/cfqauser/Library/Fonts
 - /System/Library/Fonts
 - /Library/Fonts
 - /Users/ + System.getProperty(<user name>, root) + /Library/Fonts
 - System.getProperty(JAVA_HOME) + /lib/fonts
 - /usr/share/fonts (Solaris)

注意： /usr/lib/X11/fonts ディレクトリが存在することを確認します。ディレクトリがない場合は、ln コマンドを使用して /usr/share/X11/fonts から /usr/lib/X11/fonts へのシンボリックリンクを作成します。

2. [LiveCycleES2 root]/adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルにある cffont.properties ファイルで、フォント名マッピングを変更します。

- このアーカイブを展開し、cffont.properties ファイルを探して、エディタで開きます。
- Java フォント名のカンマ区切りリストで、フォントタイプごとに、Unicode システムフォントにマップを追加します。以下の例では、kochi mincho が Unicode システムフォントの名前です。

```
dialog=Arial, Helvetica, kochi mincho
dialog.bold=Arial Bold, Helvetica-Bold, kochi mincho ...
```

- プロパティファイルを保存して閉じ、adobe-generatepdf-dsc.jar ファイルを再パッケージ化して再デプロイします。

注意： 日本語のオペレーティングシステムでは、cffont.properties.ja ファイルでもフォントマッピングを指定します。これは、標準の cffont.properties ファイルよりも優先されます。

ヒント： リスト内のフォントは、左から右に検索され、最初に見つかったフォントが使用されます。HTML から PDF の変換ログでは、システム内で見つかったすべてのフォント名のリストが返されます。マップが必要なフォント名を特定するには、前述したいずれかのディレクトリにフォントを追加し、サーバーを再起動して変換を実行します。マッピングに使用するフォント名は、ログファイルから特定できます。

生成された PDF ファイルにフォントを埋め込むには、cffont.properties ファイル内の embedFonts プロパティを true に設定します (デフォルトは false)。

4.8.9 Microsoft Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する

マクロを含む Microsoft Visio 2007 のファイルを変換しようとすると、Microsoft Office Visio のセキュリティに関する通知ダイアログが表示され、変換がタイムアウトします。マクロが含まれているファイルを正常に変換するには、Visio のデフォルトのマクロ設定を変更する必要があります。

▶ Visio 2007 のデフォルトのマクロ設定を変更する

- Visio 2007 で、ツール／セキュリティセンター／マクロの設定をクリックし、次のいずれかのオプションを選択して、「OK」をクリックします。
 - 警告を表示せずにすべてのマクロを無効にする
 - すべてのマクロを有効にする

4.8.10 ネットワークプリンタクライアントのインストール

PDF Generator ES2 には、クライアントコンピュータに PDF Generator ES2 ネットワークプリンタをインストールするための実行ファイルが含まれています。インストールが完了すると、PDF Generator ES2 プリンタがクライアントコンピュータの既存のプリンタのリストに追加されます。その後、このプリンタを使用してドキュメントを送信し、PDF に変換することができます。

注意： PDF Generator ES2 ネットワークプリンタクライアント (ウィザード) は、32 ビットの Windows プラットフォームのみでサポートされています。

Windows で PDFG ネットワークプリンタのインストールが失敗する場合や、プリンタを UNIX または Linux のプラットフォームにインストールする場合は、各オペレーティングシステムのネイティブのプリンタ追加ユーティリティを使用して、[「Windows でネイティブのプリンタの追加ウィザードを使用して PDFG ネットワークプリンタを設定するには」](#) (42 ページ) の説明に従って設定してください。

▶ PDF Generator ES2 ネットワークプリンタクライアントをインストールするには

1. PDF Generator ES2 をサーバーに正常にインストールしたことを確認します。
2. Windows クライアントコンピュータから、Web ブラウザに次の URL を入力します。[*server*] は PDF Generator ES2 をインストールしたサーバーの名前、[*port*] は使用しているアプリケーションサーバーポートです。

```
http://[server]:[port]/pdfg-ipp/install
```

3. インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」を選択して、PDFG 管理者またはユーザーのロールを持つ LiveCycle ユーザーの資格情報を指定します。このユーザーには電子メールアドレスも必要です。このアドレスは、変換済みのファイルを受信する際に使用できます。このセキュリティ設定をクライアントコンピュータ上のすべてのユーザーに適用するには、「すべてのユーザーに同じセキュリティ設定を使う」を選択して、「OK」をクリックします。

インストールが終了すると、Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 が正常にインストールされたことを示すダイアログボックスが表示されます。

4. 「OK」をクリックします。使用可能なプリンタのリストに Adobe LiveCycle PDF Generator ES2 という名前のプリンタが追加されます。

▶ Windows でネイティブのプリンタの追加ウィザードを使用して PDFG ネットワークプリンタを設定するには

1. スタート／プリンタと FAX をクリックし、「プリンタの追加」をダブルクリックします。
2. 「次へ」をクリックし、「ネットワークプリンタ、またはほかのコンピュータに接続されているプリンタ」を選択して、「次へ」をクリックします。
3. 「インターネット上または自宅 / 会社のネットワーク上のプリンタに接続する」を選択し、次の PDFG プリンタの URL を入力します。[*server*] はサーバー名、[*port*] はサーバーを実行しているポート番号です。

```
http://[server]:[port]/pdfg-ipp/printer
```

4. インターネットポートの構成画面で、「指定されたユーザーアカウントを使う」を選択し、ユーザーの有効な資格情報を指定します。
 5. 「プリンタドライバの選択」ボックスで、任意の標準的な PostScript ベースのプリンタドライバ (HP Color LaserJet PS など) を選択します。
 6. 適切なオプション (このプリンタをデフォルトに設定するなど) を選択してインストールを完了します。
- 注意：** プリンタの追加の際に使用するユーザーの資格情報では、応答を受信するために、有効な電子メール ID を User Management で設定する必要があります。
7. 電子メールサービスの sendmail サービスを設定します。サービスの設定オプションで有効な SMTP サーバーと認証情報を指定します。
- ▶ プロキシサーバーのポート転送を使用するように PDF Generator ES2 ネットワークプリンタクライアントをインストールして設定するには
1. CC プロキシサーバーで特定のポートについて LiveCycle ES2 サーバーへのポート転送を設定し、プロキシサーバーレベルで認証を無効にします (LiveCycle ES2 で独自の認証を使用するため)。転送を設定したポートでクライアントがこのプロキシサーバーに接続すると、すべての要求が LiveCycle ES2 サーバーに転送されます。
 2. 次の URL を使用して、PDFG ネットワークプリンタをインストールします。
`http://[proxy server]:[forwarded port]/pdfg-ipp/install.`
 3. PDFG ネットワークプリンタの認証に必要な資格情報を指定します。
 4. PDFG ネットワークプリンタがクライアントマシンにインストールされます。これにより、ファイアウォールで保護されている LiveCycle ES2 サーバーを使用した PDF 変換が可能になります。

4.8.11 監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定

監視フォルダを使用した PDF の変換を実行するための十分なディスク容量がないことを示す `java.io.IOException` エラーメッセージが発生しないように、LiveCycle 管理コンソールで PDF Generator の設定を変更できます。

また、トランザクションタイムアウトの最大値と ORB サービス値が適切な値になっていることも確認する必要があります (を参照)。

- ▶ PDF Generator のパフォーマンスパラメータを設定するには：
1. LiveCycle 管理コンソールにログインし、サービス/アプリケーションおよびサービス/サービスの管理をクリックします。
 2. サービスのリストで **PDFGConfigService** を探してクリックし、以下の値を設定します。
 - **PDFG Cleanup Scan Seconds** : 1800
 - **Job Expiration Seconds** : 6000
 - **Server Conversion Timeout** : デフォルト値の 270 から 450 などの大きい値に変更します。
 3. 「保存」をクリックして、サーバーを再起動します。

4.9 LiveCycle Rights Management ES2 の最終設定

Rights Management ES2 では、SSL を使用するようにアプリケーションサーバーを設定する必要があります ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照)。

4.10 LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定

LiveCycle 7.x 製品用に LDAP を設定している場合、これらの設定はアップグレードプロセス中に移行されるため、この節の手順を実行する必要はありません。LDAP を事前に設定していない場合は、次の手順をガイドラインとして、LDAP を使用した認証をサポートするように User Management を設定することができます。

▶ LDAP に対応するように User Management を設定するには (エンタープライズドメイン)

1. Web ブラウザを開き、[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) に移動してログインします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(31 ページ\)](#) を参照)。
2. 設定/ユーザー管理/ドメインの管理をクリックし、「新規エンタープライズドメイン」をクリックします。
3. 「ID」ボックスにドメインの一意の ID を入力し、「名前」ボックスにドメインの識別名を入力します。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

4. 「認証を追加」をクリックし、「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択します。
5. 「OK」をクリックします。
6. 「ディレクトリを追加」をクリックし、「プロファイル名」ボックスに、LDAP プロファイルの名前を入力します。
7. 「次へ」をクリックします。
8. 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」の各ボックスに値を指定し、「ページに次の情報を入力」ボックスで、ディレクトリ設定オプション (「Sun ONE のデフォルト値」など) を選択します。また、「名前」ボックスと「パスワード」ボックスで、匿名アクセスが無効な場合に LDAP データベースへの接続に使用する値を指定します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
9. (オプション) 設定をテストします。
 - 「テスト」をクリックします。画面に、サーバーのテストが成功したか、または設定エラーが存在することを示すメッセージが表示されます。
10. 「次へ」をクリックして、必要に応じて、「ユーザー設定」を設定します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。
11. (オプション) 設定をテストします。
 - 「テスト」をクリックします。
 - 「検索フィルタ」ボックスで、検索フィルタを確認するか新しい検索フィルタを指定してから、「送信」をクリックします。画面に検索条件に一致するエントリのリストが表示されます。
 - 「閉じる」をクリックしてユーザー設定画面に戻ります。
12. 「次へ」をクリックして、必要に応じて、「グループ設定」を設定します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ディレクトリ設定」を参照)。

13. (オプション) 設定をテストします。
 - 「テスト」をクリックします。
 - 「検索フィルタ」ボックスで、検索フィルタを確認するか新しい検索フィルタを指定してから、「送信」をクリックします。画面に検索条件に一致するエントリのリストが表示されます。
 - 「閉じる」をクリックしてグループの設定画面に戻ります。
14. 「完了」をクリックして新規ディレクトリページを閉じ、「OK」をクリックして終了します。

▶ **User Management を設定するには (ローカルドメイン) :**

1. Web ブラウザを開き、[http://\[host\]:\[port\]/adminui](http://[host]:[port]/adminui) に移動してログインします ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(31 ページ\)](#) を参照)。
2. 設定/ユーザー管理/ドメインの管理をクリックし、「新規ローカルドメイン」をクリックします。
3. 該当するボックスにドメイン ID とドメイン名を入力します ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「ローカルドメインの追加」を参照)。
4. (オプション)「アカウントロックを有効にする」オプションの選択を解除して、アカウントロックを無効にします。
5. 「OK」をクリックします。

4.11 FIPS モードの有効化

LiveCycle ES2 には FIPS モードがあり、RSA BSAFE Crypto-C 2.1 暗号化モジュールを使用して、データ保護を連邦情報処理規格 (FIPS) 140-2 承認アルゴリズムに限定しています。

LiveCycle ES2 の設定中に LiveCycle Configuration Manager を使用してこのオプションを有効化しなかった場合、または有効化した設定を無効化する場合は、LiveCycle 管理コンソールからこの設定を変更できます。

FIPS モードを変更した場合は、サーバーを再起動する必要があります。

FIPS モードでは、Acrobat のバージョン 7.0 以前はサポートされていません。FIPS モードが有効になっており、パスワードを使用した暗号化およびパスワードの削除の各プロセスに Acrobat 5 の設定が含まれている場合、プロセスは失敗します。

通常、FIPS が有効化されていると、Assembler サービスでは、どのドキュメントにもパスワードの暗号化が適用されません。この処理が試行されると、`FIPSMODEException` が発生し、FIPS モードではパスワードを暗号化できないことが示されます。また、ベースドキュメントがパスワードで暗号化されている場合、`PDFsFromBookmarks` エレメントは FIPS モードではサポートされません。

▶ **FIPS モードをオンまたはオフにするには**

1. LiveCycle 管理コンソールにログインします。
2. 設定/コアシステム設定/設定をクリックします。
3. 「FIPS を有効にする」を選択して FIPS モードを有効化するか、選択を解除して FIPS モードを無効化します。
4. 「OK」をクリックして、アプリケーションサーバーを再起動します。

注意 : LiveCycle ES2 ソフトウェアでは、FIPS の互換性を確認するためのコードの検証を行いません。FIPS 操作モードは、FIPS で承認されたライブラリ (RSA) の暗号化サービスで、FIPS で承認されたアルゴリズムが使用されるようにするために提供されています。

4.12 HTML 電子署名の設定

Forms ES2 の HTML 電子署名機能を使用するには、次の手順を実行します。

▶ HTML 電子署名を有効にするには

1. [LivecycleES2 root]/deploy/adobe-forms-ds.ear ファイルをアプリケーションサーバーに手動でデプロイします。
2. LiveCycle 管理コンソール にログインし、サービス / LiveCycle Forms ES2 をクリックします。
3. 「HTML 電子署名が有効です」を選択し、「保存」をクリックします。

4.13 Document Management サービスの設定

Content Services ES2 をインストールし、アプリケーションサーバーがデフォルト以外のポートで動作している場合は、Document Management サービスで使用するポートを変更します。

▶ ポートを変更するには

1. LiveCycle 管理コンソールにログインし、サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理をクリックします。
2. リストで「DocumentManagementService」を選択します。
3. 「設定」タブの「HTTP ポート」ボックスで、使用しているポート番号を指定して、「保存」をクリックします。

4.14 Connector for EMC Documentum サービスの設定

注意： LiveCycle ES2 でサポートされる EMC Documentum のバージョンは、6.0 および 6.5 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for EMC Documentum サービスを LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、Documentum リポジトリに接続するようサービスを設定します。

▶ Connector for EMC Documentum を設定するには

1. [appserver root]/profiles/[profile name] フォルダにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます（ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します）。
2. 次の Documentum Foundation Classes JAR ファイルを指定する新しいシステムプロパティを追加します。
 - dfc.jar
 - aspectjrt.jar
 - log4j.jar
 - jaxb-api.jar
 - (Connector for EMC Documentum 6.5 のみ)
 - configservice-impl.jar
 - configservice-api.jar

新しいシステムプロパティは、次の形式にする必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの Content Server と Documentum Foundation Classes のインストールを使用して、次のいずれかのシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾は改行にしてください。

- Connector for EMC Documentum 6.0 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar
```

- Connector for EMC Documentum 6.5 のみ：

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforEMCDocumentum.ext=  
C:/Program Files/Documentum/Shared/dfc.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/aspectjrt.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/log4j.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/jaxb-api.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-impl.jar,  
C:/Program Files/Documentum/Shared/configservice-api.jar
```

注意：上記のテキストには、改行が含まれています。このテキストをコピー＆ペーストする場合、改行を削除してください。

3. (Connector for EMC Documentum 6.0 のみ) C:%Documentum%config ディレクトリにある dfc.keystore ファイルを削除します。

注意：この手順は、WebSphere および Documentum Foundation Classes of EMC Documentum 6.0 の JDK 要件に互換性がないために必要です。

4. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

http://[host]/:[port]/adminui

5. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名： administrator

パスワード： password

6. サービス / LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum / 環境設定に移動して、次のタスクを実行します。

- 必要な Documentum リポジトリ情報のすべてを入力します。
- Documentum をリポジトリプロバイダとして使用するには、「リポジトリサービスプロバイダ」で「EMC Documentum リポジトリプロバイダ」を選択し、「保存」をクリックします（詳しくは、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#) ページの右上隅にあるヘルプリンクをクリックしてください）。

7. (オプション) サービス / LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum / リポジトリ証明書の設定に移動して、「追加」をクリックし、Docbase 情報を指定して、「保存」をクリックします（詳しくは、右上隅の「ヘルプ」をクリックしてください）。

8. アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

9. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

http://[host]/:[port]/adminui

10. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
 - ユーザー名** : administrator
 - パスワード** : password
11. サービス／アプリケーションおよびサービス／サービスの管理に移動して、次のサービスを選択します。
 - EMCDocumentumAuthProviderService
 - EMCDocumentumContentRepositoryConnector
 - EMCDocumentumRepositoryProvider
12. 「起動」をクリックします。サービスのいずれかが正常に起動されない場合は、手順 6 で入力した設定を確認します。
13. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - Documentum Authorization サービス (EMCDocumentumAuthProviderService) を使用して、Workbench ES2 のリソースビューで Documentum リポジトリから内容を表示するには、この手順を続行します。Documentum Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が上書きされるため、Documentum 秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
 - LiveCycle ES2 リポジトリを使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の秘密鍵証明書 (デフォルトは「Administrator」と「password」) を使用して Workbench ES2 にログインします。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 6 で指定した秘密鍵証明書を使用してデフォルトリポジトリにアクセスし、デフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。
14. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定／User Management／ドメインの管理をクリックします。
15. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意： (WebSphere および WebLogic のみ) LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100 文字、2 バイト文字で 50 文字、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。
16. カスタム認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択します。
 - 「EMCDocumentumAuthProvider」を選択し、「OK」をクリックします。
17. LDAP 認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」を選択します。
18. LDAP ディレクトリを追加します。
 - 「ディレクトリを追加」をクリックします。
 - 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
 - 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。

- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。
- 「次へ」をクリックし、ユーザー設定を指定して「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックします。

19. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。
20. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。

(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。

21. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。
22. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。
 - 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
 - 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「User Management ヘルプ」をクリックします。

23. 次の秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 を起動し、ログインします。

ユーザー名: [username]@[repository_name]

パスワード: [password]

これで、Documentum リポジトリが Workbench ES2 のリソースビューに表示されます。
[username]@[repository_name] を使用してログインしない場合、Workbench ES2 では、手順 6 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。

24. (オプション) Connector for EMC Documentum の LiveCycle ES2 サンプルをインストールする場合、「Samples」という名前の Documentum リポジトリを作成してその中にインストールします。

Connector for EMC Documentum サービスを設定したら、Documentum リポジトリを使用した Workbench ES2 の機能の正しい設定について、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

4.15 Documentum リポジトリでの XDP MIME 形式の作成

ユーザーが Documentum リポジトリから XDP ファイルを取得し、保存できるようにするには、次のタスクのいずれかを実行する必要があります。

- ユーザーがアクセスする XDP ファイルが置かれている各リポジトリに、対応する XDP 形式を作成します。
- Documentum リポジトリにアクセスするときに Documentum 管理者アカウントを使用するように、Connector for EMC Documentum サービスを設定します。この場合、Connector for EMC Documentum サービスでは必要に応じて XDP 形式が使用されます。

▶ Documentum 管理者アカウントを使用して Documentum Content Server に XDP 形式を作成するには

1. Documentum 管理者アカウントにログインします。
2. 「形式」をクリックし、ファイル / 新規作成 / 形式を選択します。

3. 次の情報を対応するフィールドに入力します。
 - 名前** : xdp
 - デフォルトのファイル拡張子** : xdp
 - Mime タイプ** : application/xdp
 4. ユーザーが XDP ファイルを保存する他のすべての Documentum リポジトリについて、手順 1 ~ 3 を繰り返します。
- ▶ **Documentum 管理者アカウントを使用するように Connector for EMC Documentum サービスを設定するには**
1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
http://[host]/:[port]/adminui
 2. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
 - ユーザー名** : administrator
 - パスワード** : password
 3. サービス / LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum / 環境設定をクリックします。
 4. 「Documentum プリンシパル秘密鍵証明書に関する情報」領域で、次の情報を更新し、「保存」をクリックします。
 - ユーザー名** : [Documentum 管理者のユーザー名]
 - パスワード** : [Documentum 管理者のパスワード]
 5. 「リポジトリ証明書の設定」をクリックして、リストからリポジトリを選択します。リストにない場合は、「追加」をクリックします。
 6. 対応するフィールドで適切な情報を指定して、「保存」をクリックします。
 - リポジトリ名** : [リポジトリ名]
 - リポジトリ証明書のユーザー名** : [Documentum 管理者のユーザー名]
 - リポジトリ証明書のパスワード** : [Documentum 管理者のパスワード]
 7. ユーザーが XDP ファイルを保存するすべてのリポジトリについて、手順 5 ~ 6 を繰り返します。

4.16 Configuring the Connector for IBM FileNet service

LiveCycle ES2 でサポートされる IBM FileNet のバージョンは、4.0 および 4.5 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM FileNet サービスを LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、FileNet のオブジェクトストアに接続するようサービスを設定する必要があります。

FileNet 4.0.1 を使用して Connector for IBM FileNet サービスを設定するには、次の手順を実行します。

▶ FileNet 4.x および CEWS トランスポートを使用してコネクタを設定するには

1. 次の操作を実行します。
 - (WebSphere 6.1) WebSphere Administrative Console にログインして、Servers / Application servers をクリックし、構成するサーバーインスタンスの名前 (例えば server1) をクリックします。
 - (WebSphere 7) WebSphere Administrative Console にログインして、Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックし、構成するサーバーインスタンスの名前 (例えば server1) をクリックします。
2. 「Server Infrastructure」で、Java and Process Management / Process Definition をクリックします。
3. 「Additional Properties」で、「Java Virtual Machine」をクリックします。
4. 「Generic JVM arguments」で、FileNet 設定ファイルの場所を、アプリケーションサーバーの start コマンドに Java オプションとして追加します。

```
-Dwaspl.location= <configuration files location>
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次の Java オプションを追加します。

```
-Dwaspl.location=C:/Progra~1/FileNet/AE/CE_API/wsi
```
5. 「Apply」をクリックして、「Save to Master Configuration」をクリックします。
6. [appserver root]/profiles/[profile name] フォルダにある adobe-component-ext.properties ファイルを開きます (ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します)。
7. 次の FileNet Application Engine JAR ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。
 - javaapi.jar
 - log4j-1.2.13.jar
 - soap.jar
 - wasp.jar
 - builtin_serialization.jar (FileNet 4.0 のみ)
 - wsdl_api.jar
 - jaxm.jar
 - jaxrpc.jar
 - saaj.jar
 - jetty.jar
 - runner.jar
 - p8cjares.jar
 - Jace.jar
 - (オプション) pe.jar

注意： pe.jar ファイルは、デプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用する場合にのみ追加します。新しいシステムプロパティには、次の構造を反映させる必要があります。

```
[component id].ext=[JAR files and/or folders]
```

例えば、デフォルトの FileNet Application Engine インストールを Windows オペレーティングシステムで使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

注意： 次のテキストには、改行が含まれています。このテキストを、このドキュメント以外の場所にコピーする場合は、新しい場所に貼り付けるときに改行を削除してください。

```
com.adobe.livecycle.ConnectorforIBMFileNet.ext=  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/javaapi.jar,  
C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥CE_API¥lib2¥log4j-1.2.13.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/soap.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/wasp.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/builtin_serialization.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/wsdapi.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jaxm.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jaxrpc.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/saaj.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/jetty.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/runner.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib2/p8cjares.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/lib/Jace.jar,  
C:/Program Files/FileNet/AE/Workplace/WEB-INF/lib/pe.jar
```

注意： C:¥Program Files¥FileNet¥AE¥Workplace¥WEB-INF¥lib¥pe.jar は、実際のデプロイメントで IBMFileNetProcessEngineConnector サービスを使用している場合のみ追加します。

注意： FileNet 4.5 の場合は、C:/Program Files/FileNet/AE/CE_API/wsi/lib/builtin_serialization.jar, の行を削除します。

8. (FileNet Process Engine Connector のみ) 次の手順で、プロセスエンジンの接続プロパティを設定します。

- テキストエディタを使用してファイルを作成し、次のコンテンツを 1 行で入力します。末尾で改行してください。

```
RemoteServerUrl = cemp:http://[contentserver_IP]:[contentengine_port]/  
wsi/FNCEWS40DIME/
```

- このファイルを WcmApiConfig.properties という名前で別のフォルダに保存して、そのフォルダの場所を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

例えば、このファイルを c:¥pe_config¥WcmApiConfig.properties として保存して、パス c:¥pe_config を adobe-component-ext.properties ファイルに追加します。

注意： ファイル名では大文字と小文字が区別されます。

9. ファイル wsjaas.conf を開いて、次の行を追加します。

```
FileNetP8 {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};  
FileNetP8WSI {com.filenet.api.util.WSILoginModule required;};  
FileNetP8Engine  
{com.ibm.ws.security.common.auth.module.proxy.WSLoginModuleProxy  
  required delegate=com.ibm.ws.security.common.auth.module.  
  WSLoginModuleImpl;};  
FileNetP8Server  
{com.ibm.ws.security.common.auth.module.proxy.WSLoginModuleProxy  
  required delegate=com.ibm.ws.security.common.auth.module.  
  WSLoginModuleImpl;};  
FileNetP8KerberosService  
{com.ibm.ws.security.common.auth.module.proxy.WSLoginModuleProxy  
  required delegate=com.filenet.engine.authentication.kerberos.login.  
  KrbServiceLoginModule;  
com.ibm.ws.security.common.auth.module.proxy.WSLoginModuleProxy required  
  delegate=com.ibm.ws.security.server.lm.ltpaLoginModule;
```

```
com.ibm.ws.security.common.auth.module.proxy.WSLoginModuleProxy required
delegate=com.ibm.ws.security.server.lm.
wsMapDefaultInboundLoginModule;};
```

注意： wsjaas.conf ファイルはデフォルトで [appserver root]/profiles/[profile name]/properties/ フォルダにあります。

10. アプリケーションサーバーが実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。
11. (IBM FileNet と LiveCycle が同じ WebSphere アプリケーションサーバーにインストールされている場合のみ該当) 次の操作を実行し、これらの設定が WebSphere Administrative Console に正しく実装されていることを確認します。

- (WebSphere 6.1) WebSphere 管理コンソールのナビゲーションツリーで、Security / Secure administration, applications, and infrastructure をクリックします。
(WebSphere 7) WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Security / Global セキュリティをクリックします。
- 「Authentication」で、Java Authentication and Authorization Service / Application logins をクリックします。
- 「FileNetP8」をクリックし、「JAAS login modules」をクリックします。
このページの値が次の値と一致しない場合は修正します。

Module class name : "com.filenet.api.util.WSILoginModule"

Authentication Strategy : REQUIRED

Module Order : 1

「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

12. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。

`http:// [host] : [port] /adminui`

13. デフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。

ユーザー名 : administrator

パスワード : password

14. サービス / LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet をクリックします。

15. 必要なすべての FileNet リポジトリ情報を入力し、「リポジトリサービスプロバイダ」の下で「IBM FileNet リポジトリプロバイダ」を選択します。

オプションのプロセスエンジンサービスをデプロイメントで使用する場合、「プロセスエンジン設定」領域で「プロセスエンジンコネクタサービスを使用」を選択し、プロセスエンジンの各設定を指定します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。

注意： この手順で指定する秘密鍵証明書は、IBM FileNet リポジトリサービスを後で起動するときに検証されます。秘密鍵証明書が無効な場合はエラーが発生し、サービスは起動されません。

16. 「保存」をクリックして、サービス / アプリケーションおよびサービス / サービスの管理に移動します。

17. 次の各サービスの横にあるチェックボックスを選択して「開始」をクリックします。

- IBMFileNetAuthProviderService
- IBMFileNetContentRepositoryConnector

- IBMFileNetRepositoryProvider
- IBMFileNetProcessEngineConnector (設定されている場合)

サービスのいずれかが正常に開始しない場合は、手順 15 で入力した設定を確認します。

18. 次のいずれかのタスクを実行します。

- FileNet Authorization サービス (IBMFileNetAuthProviderService) を使用して Workbench ES2 のリソースビューで FileNet オブジェクトストアからコンテンツを表示するには、この手順を続行します。FileNet Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が上書きされるため、FileNet の秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
- LiveCycle ES2 リポジトリを使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の秘密鍵証明書 (デフォルトは「Administrator」と「password」) を使用して Workbench ES2 にログインします。この場合、手順 15 で指定した秘密鍵証明書は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。

19. アプリケーションサーバーを再起動します。

20. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定 / User Management / ドメインの管理をクリックします。

21. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

22. カスタム認証プロバイダを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択します。
- 「IBMFileNetAuthProviderService」を選択し、「OK」をクリックします。

23. LDAP 認証プロバイダを追加します。

- 「認証を追加」をクリックします。
- 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。

24. LDAP ディレクトリを追加します。

- 「ディレクトリを追加」をクリックし、「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力して、「次へ」をクリックします。
- 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。
- (オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
- ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

25. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。

26. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。
(オプション) 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。
27. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。
28. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。
 - 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
 - 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。
29. Workbench ES2 を起動して、IBM FileNet リポジトリ用の次の秘密鍵証明書を使用してログインします。
ユーザー名: [username]@[repository_name]
パスワード: [password]
これで、FileNet オブジェクトストアが Workbench ES2 のリソースビューに表示されます。
[username]@[repository_name] を使用してログインしない場合、Workbench ES2 では、手順 15 で指定したデフォルトリポジトリへのログインが試行されます。
30. (オプション) Connector for IBM FileNet の LiveCycle ES2 サンプルをインストールする場合、Samples という名前の FileNet オブジェクトストアを作成してその中にインストールします。

Connector for IBM FileNet サービスを設定したら、FileNet リポジトリを使用した Workbench ES2 の機能の正しい設定について、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

4.17 SharePoint クライアントアクセスの設定

Microsoft SharePoint クライアントを設定して、LiveCycle ES2 からコンテンツサービスにアクセスできます。そのためには、LiveCycle Configuration Manager を使用して、SharePoint Alfresco Module Package を追加します。SharePoint AMP ファイル (adobe-vti-module.amp) は、[LiveCycleES2 root]¥LiveCycle_ES_SDK¥misc¥ContentServices フォルダにあります。

SharePoint AMP を追加した後で、次の手順を実行します。

4.17.1 share.war ファイルの取得と編集

Alfresco CMS では、share.war ファイルを使用して、Content Services ES2 に接続します。SharePoint クライアントが Content Services ES2 にアクセスできるようにするには、share.war ファイルを変更する必要があります。

1. Alfresco インストールから share.war を取得します。詳しくは、Alfresco のドキュメントを参照してください。
2. ファイルシステム内のディレクトリに share.war ファイルをコピーします。
3. WinRar などのファイルアーカイブユーティリティを使用して、share.war ファイルを開きます。
4. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル WEB-INF/classes/alfresco/webscript-framework-config.xml を抽出し、テキストエディタで開きます。

5. 行 `<endpoint-url>http://localhost:9080/alfresco/s</endpoint-url>` を探して、これを `<endpoint-url>http://localhost:9080/contentspaces/s</endpoint-url>` に変更します。
6. ファイルを保存して閉じます。

4.17.2 share.war ファイルのデプロイ

1. WinRar などのアーカイブユーティリティを使用し、アプリケーションサーバーに適した場所で、アーカイブファイル `adobe-contentservices.ear` を開きます。
 - (WebSphere) : `[appserver root]¥profiles¥[profile name]¥installedApps¥<cell name>¥`
2. アーカイブユーティリティのウィンドウで開いた `adobe-contentservices.ear` アーカイブに、更新済みの `share.war` ファイルを追加します。
3. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウからローカルファイルシステムのフォルダに、ファイル `application.xml` を抽出して、テキストエディタで開きます。このファイルは、`adobe-contentservices.ear¥META-INF` ディレクトリにあります。

4. `<application>` タグの下に、次の行を追加します。

```
<module id="Share">
  <web>
    <web-uri>share.war</web-uri>
    <context-root>/share</context-root>
  </web>
</module>
```

5. 更新した `application.xml` ファイルを、`adobe-contentservices.ear` アーカイブにコピーして戻します。
6. アーカイブを保存して閉じます。
7. 更新した EAR ファイルをデプロイします。

注意：アプリケーションサーバーの管理コンソールを使用して、更新した EAR ファイルを手動でデプロイする必要があります。

4.18 IPv6 モードでの CIFS の有効化

IPv6 の実装で Content Services ES2 の CIFS を有効にする場合は、LiveCycle ES2 をホストするマシンに補足の IPv6 アドレスを明示的に追加する必要があります。この IPv6 アドレスは、クライアントと同じサブネットに存在する静的 IP アドレスであることが必要です。LiveCycle Configuration Manager を使用して LiveCycle ES2 を設定した後で、次のタスクを実行する必要があります。通常は、EAR ファイルの設定の後で LiveCycle Configuration Manager を一時停止してから、EAR ファイルを編集します。EAR ファイルを編集した後で LiveCycle Configuration Manager に戻り、更新した EAR ファイルを、選択した他の EAR ファイルと共にデプロイできます。

4.18.1 contentservices.war ファイルの編集

1. `[LiveCycleES2 root]¥configurationManager¥export` ディレクトリに移動します。
2. WinRar などのファイルアーカイブユーティリティを使用して、`contentservices.war` ファイルを開きます。
3. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウから、ファイル `contentservices.war¥WEB-INF¥classes¥alfresco¥file-services-custom.xml` を抽出して、テキストエディタで開きます。

4. 次の行を探し、`ipv6="enabled"` を追加して、この行を変更します。

```
<tcpipSMB platforms="linux,solaris,macosx,windows,AIX"/>
```

これを次のように変更します。

```
<tcpipSMB platforms="linux,solaris,macosx,windows,AIX" ipv6="enabled"/>
```

5. ファイルを保存して閉じます。
6. ファイルアーカイブユーティリティのウィンドウからローカルファイルシステムのフォルダに、ファイル `contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\extension\file-servers-properties` を抽出して、テキストエディタで開きます。
7. 行 `cifs.ipv6=disabled` を探して、`cifs.ipv6=enabled` に置き換えます。
8. ファイルを保存して閉じます。
9. 更新した `file-servers-custom.xml` ファイルを、`contentservices.war\WEB-INF\classes\alfresco\extension` にあるアーカイブにコピーします。
10. `contentservices.war` ファイルを保存します。

注意： EAR ファイルを更新した後で、LiveCycle Configuration Manager を使用して、更新した EAR ファイルをデプロイする必要があります。

4.19 Connector for IBM Content Manager の設定

注意： LiveCycle ES2 でサポートされる IBM Content Manager のバージョンは、8.4 のみです。ECM が適切にアップグレードされていることを確認してください。

Connector for IBM Content Manager サービスを LiveCycle ES2 ソリューションの一部としてインストールした場合は、次の手順を実行して、IBM Content Manager データストアに接続するようサービスを設定します。

▶ Connector for IBM Content Manager を設定するには

1. `[appserver root]/profiles/[profile name]` フォルダで `adobe-component-ext.properties` ファイルを開きます。ファイルが存在しない場合は、ファイルを作成します。
2. 次の IBM II4C JAR ファイル、IBM II4C プロパティファイルを含む Config フォルダ、DB2 Universal Database Client インストールの ZIP ファイルの場所を指定する、新しいシステムプロパティを追加します。
 - `cmb81.jar`
 - `cmbcm81.jar`
 - `cmbicm81.jar`
 - `cmblog4j81.jar`
 - `cmbSDK81.jar`
 - `cmbutil81.jar`
 - `cmbutilicm81.jar`
 - `cmbview81.jar`
 - `cmbwas81.jar`
 - `cmbwcm81.jar`
 - `cmgmt`

注意： cmgmt は JAR ファイルではありません。Windows では、このフォルダはデフォルトで
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/ にあります。

- common.jar
- db2jcc.jar
- db2jcc_license_cisuz.jar
- db2jcc_license_cu.jar
- ecore.jar
- ibmjgssprovider.jar
- ibmjseprovider2.jar
- ibmpkcs.jar
- icmrm81.jar
- jcache.jar
- log4j-1.2.8.jar
- xerces.jar
- xml.jar
- xsd.jar

新しいシステムプロパティは、次のような構造になります。

[component id].ext=[JAR files and/or folders]

例えば、デフォルトの DB2 Universal Database Client および I4C インストールを使用する場合、次のシステムプロパティをファイルに追加します。その際、システムプロパティは新しい行に記述し、行中に改行を入れず、末尾で改行してください。

```
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/cmgmt,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjseprovider2.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmjgssprovider.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/ibmpkcs.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/java/jre/lib/xml.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbview81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmb81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xsd.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/common.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/ecore.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwcm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/jcache.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutil81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbutilicm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/icmrm81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cu.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/db2jcc_license_cisuz.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/xerces.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmblog4j81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/log4j-1.2.8.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbsdk81.jar,  
C:/Program Files/IBM/db2cmv8/lib/cmbwas81.jar
```

3. アプリケーションサーバーが現在実行されていない場合は、サーバーを起動します。実行されている場合は、サーバーを停止し、再起動します。

これで、IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use User Credentials」をログインモードとして使用して接続できます。

これで、この手順に必要なステップを完了しました。

(オプション) IBMCMConnectorService プロパティシートから IBM Content Manager データストアに、「Use Credentials From Process Context」をログインモードとして使用して接続するには、次の手順を実行します。

▶ 「Use Credentials from process context」 ログインモードを使用して接続するには

1. Web ブラウザを開き、次の URL を入力します。
http://[host]/:[port]/adminui
2. 次のデフォルトのユーザー名とパスワードを使用してログインします。
ユーザー名：administrator
パスワード：password
3. サービス / LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager / 環境設定をクリックします。
4. 必要なリポジトリ情報のすべてを入力して「保存」をクリックします。IBM Content Manager リポジトリ情報について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。
5. 次のいずれかのタスクを実行します。
 - IBM Content Manager Authorization サービス (IBMCMProviderService) を使用して IBM Content Manager データストアの内容を Workbench ES2 のプロセスビューで使用するには、この手順を続行します。IBM Content Manager Authorization サービスを使用すると、デフォルトの LiveCycle ES2 認証が上書きされるため、IBM Content Manager 秘密鍵証明書を使用して Workbench ES2 にログインするよう設定する必要があります。
 - Workbench ES2 のプロセスビューで IBM Content Manager データストアからコンテンツを使用するために手順 4 で指定したシステム資格情報を使用するには、LiveCycle ES2 の上級管理者の資格情報 (デフォルトは Administrator と password) を使用して Workbench ES2 にログインします。これで、この手順に必要なステップを完了しました。この場合、手順 4 で指定したシステム秘密鍵証明書は、デフォルトリポジトリにアクセスするためにデフォルトの LiveCycle ES2 認証サービスを使用します。
6. LiveCycle 管理コンソールにログインし、設定 / User Management / ドメインの管理をクリックします。
7. 「新規エンタープライズドメイン」をクリックして、ドメイン ID と名前を入力します。ドメイン ID は、ドメインの固有の識別子です。名前は、ドメインの識別名です。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして DB2 を使用している場合、ID の許容される最大長は、1 バイト (ASCII) 文字で 100、2 バイト文字で 50、4 バイト文字で 25 文字です ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。

注意： LiveCycle ES2 データベースとして MySQL を使用している場合、ID には 1 バイト (ASCII) 文字のみを使用してください ([LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「エンタープライズドメインの追加」を参照)。
8. カスタム認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「カスタム」を選択し、「IBMCMAuthProviderService」を選択して、「OK」をクリックします。

9. LDAP 認証プロバイダを追加します。
 - 「認証を追加」をクリックします。
 - 「認証プロバイダ」リストで「LDAP」を選択し、「OK」をクリックします。
10. LDAP ディレクトリを追加します。
 - 「ディレクトリを追加」をクリックします。
 - 「プロファイル名」ボックスに一意の名前を入力し、「次へ」をクリックします。
 - 「サーバー」、「ポート」、「SSL」、「バインド」および「ページに次の情報を入力」オプションの値を指定します。「バインド」オプションで「ユーザー」を選択する場合は、「名前」と「パスワード」フィールドにも値を指定する必要があります。(オプション) 必要に応じてベースドメイン名を取得するには、「BaseDN を取得」を選択します。完了したら、「次へ」をクリックします。
 - ユーザー設定を指定し、「次へ」をクリックし、必要に応じてグループ設定を指定して「次へ」をクリックします。

上記の設定について詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックしてください。

11. 「OK」をクリックして「ディレクトリを追加」ページを閉じ、もう一度「OK」をクリックします。
12. 新しいエンタープライズドメインを選択し、「今すぐ同期」をクリックします。LDAP ネットワークのユーザーとグループ数および接続の速度によって、同期処理には数分かかる場合があります。
13. 同期のステータスを確認するには、「更新」をクリックし、「現在の同期の状態」列にステータスを表示します。
14. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックします。
15. LDAP から同期されたユーザーを検索し、以下のタスクを実行します。
 - 1 つ以上のユーザーを選択し、「ロールをアサイン」をクリックします。
 - 1 つ以上の LiveCycle ES2 ロールを選択し、「OK」をクリックします。
 - 「OK」をもう一度クリックして、ロールアサインを確認します。

ロールをアサインするすべてのユーザーについて、この手順を繰り返します。詳しくは、ページの右上隅にある「ヘルプ」リンクをクリックします。
16. Workbench ES2 を起動し、IBM Content Manager データストア用の次の秘密鍵証明書を使用してログインします。

ユーザー名: [username]@[repository_name]

パスワード: [password]

これで、IBMCMConnectorService オーケストレーション可能コンポーネントのログインモードが「Use Credentials from process context」と選択されている場合に、Workbench ES2 のプロセスビューで IBM Content Manager データストアを使用できます。

Connector for IBM Content Manager サービスを設定したら、[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)を参照することをお勧めします。

4.20 システムイメージバックアップの実行

実稼働環境に LiveCycle ES2 をインストールおよびデプロイした後、このシステムを稼働する前に、LiveCycle ES2 を実装したサーバーのシステムイメージバックアップを実行することをお勧めします。このバックアップには、LiveCycle ES2 のデータベース、GDS ディレクトリおよびアプリケーションサーバーを含める必要があります。これは、ハードドライブまたはコンピュータ全体が動作しなくなった場合に、コンピュータの内容の復元に使用できる完全なシステムバックアップです。[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「LiveCycle ES2 のバックアップおよび回復」トピックを参照してください。

4.21 LiveCycle ES2 のアンインストール

[Livecycle ES2 root] ディレクトリにあるアンインストーラでは、LiveCycle ES2 インストーラで作成されたファイルおよびアプリケーションが削除されます。ただし、アンインストーラでは、アプリケーションサーバーにデプロイされた LiveCycle 以外のカスタムアプリケーションのフォルダやファイルは削除されません。アンインストール中に一部のフォルダが削除されない場合は、システムを再起動して、削除されていないフォルダを手動で削除してください。

注意： コマンドラインインターフェイス (CLI) から LiveCycle ES2 をインストールした場合は、CLI を使用して LiveCycle ES2 をアンインストールする必要があります。[「付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール」 \(83 ページ\)](#) を参照してください。

警告： アンインストーラを実行すると、製品インストールディレクトリ内のすべての内容が警告メッセージなしに削除されます。操作を進める前に、保存しておく必要があるデータのバックアップを作成してください。

▶ コンピュータからファイルを削除するには

1. アンインストールプログラムを起動します。

- (Windows) 次のいずれかを実行します。
 - Windows のコントロールパネルの「プログラムの追加と削除」を使用して、Adobe LiveCycle ES2 を削除します。
 - 手動アンインストール：
 - WebSphere から IBM JDK を使用するように、JAVA_HOME および PATH を設定します。
 - アンインストーラが格納されているディレクトリに移動します：
[LiveCycleES2 root]¥Uninstall_Adobe LiveCycle ES2
 - Uninstall Adobe LiveCycle ES2.exe ファイルをダブルクリックします。
- (UNIX) 次の操作を実行します。
 - 端末から、アンインストールスクリプトが格納されているディレクトリに移動します：
cd /opt/adobe/adobe_livecycle_es2/Uninstall_Adobe LiveCycle ES2
 - ./Uninstall Adobe LiveCycle ES2 と入力します (コマンドを chmod 777 のように入力して、このバイナリを実行ファイルにする必要がある場合があります)。

注意： (UNIX) アンインストールスクリプトが格納されているディレクトリ (Uninstall_Adobe LiveCycle ES2) に移動して、そのスクリプトを実行します。ディレクトリ名にスペースが含まれているため、製品をアンインストールするには、ディレクトリの完全パスをコマンドの一部として含める必要があります。

- (AIX) 以下のタスクを実行します。
 - WebSphere から IBM JDK を使用するように、JAVA_HOME および PATH を設定します。
 - ディレクトリを変更します：`cd /opt/adobe/livecycleES2/Uninstall_Adobe_LiveCycle_ES2`
 - 端末から、`java -jar uninstall.jar` と入力します。
- 2. アンインストールプログラムの画面の指示に従い、「完了」をクリックします。
- 3. LiveCycle ES2 を再インストールする場合は、[LiveCycleES2 root] ディレクトリに残っているディレクトリおよびファイルをすべて削除してください。

LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 の構成およびデプロイ

ここでは、LiveCycle Business Activity Monitoring ES2 (BAM) を手動で設定およびデプロイするために実行する必要があるタスクについて説明します。

- [「BAM Server 用の WebSphere の構成」 \(64 ページ\)](#)
- [「キーストアの構成」 \(65 ページ\)](#)
- [「bam.properties ファイルの作成」 \(65 ページ\)](#)
- [「BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースの作成」 \(66 ページ\)](#)
- [「BAM サーバーをサポートするための WebSphere の設定」 \(72 ページ\)](#)
- [「BAM Server 用の Process Management ES2 の設定」 \(73 ページ\)](#)
- [「WebSphere への BAM Server のデプロイ」 \(74 ページ\)](#)
- [「Business Activity Monitoring ES2 の設定」 \(75 ページ\)](#)
- [「BAM Dashboard の使用」 \(77 ページ\)](#)
- [「関連ドキュメント」 \(78 ページ\)](#)
- [「Business Activity Monitoring ES2 のアンインストール」 \(78 ページ\)](#)

このドキュメントの手順で使用する一般的なファイルパスの命名規則は、次のとおりです。

名前	説明	デフォルト値
[<i>appserver root</i>]	Business Activity Monitoring ES2 のアプリケーションサーバーのホームディレクトリ。	WebSphere (Windows) : C:¥Program Files¥IBM¥WebSphere¥AppServer WebSphere (Linux および Solaris) : /opt/IBM/WebSphere/AppServer WebSphere (AIX) : /usr/IBM/WebSphere/AppServer
[LiveCycleES2 root]	LiveCycle ES2 サービスがインストールされている場所。	Windows : C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2 UNIX : /opt/adobe/adobe_lifecycle_es2

このドキュメントに記述されているディレクトリの場所に関するほとんどの情報は、すべてのプラットフォームに当てはまります (UNIX では、すべてのファイル名とパスにおいて大文字と小文字が区別されます)。プラットフォーム固有の情報は、必要に応じて特記します。

5.1 BAM Server 用の WebSphere の構成

LiveCycle Process Management ES2 をインストールし、Business Activity Monitoring ES2 を使用する場合は、BAM Server が正しく実行されるように WebSphere を手動で設定する必要があります。

BAM Server は、独自のサーバーインスタンス内で実行する必要があります。このためには、新しいプロファイルを作成し、LiveCycle ES2 データベースへの接続も作成する必要があります。

次のタスクを完了します。

- BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースへの接続の設定
- アプリケーションサーバーパラメータの設定
- BAM Server をホストするプロファイルの作成
- LiveCycle ES2 データベースへの接続の設定

注意： WebSphere で Business Activity Monitoring ES2 を使用するには、LiveCycle ES2 を実行するインスタンスとは別の BAM Server を実行するためのプロファイルを作成します。

▶ WebSphere でのプロファイルの作成：

1. コマンドプロンプトで、現在のディレクトリを [appserver root]/bin/ProfileManagement に変更します。
2. 次のコマンドを入力して WebSphere Profile Creation ウィザードを起動します。
 - (Windows) pmt.bat
 - (AIX、Solaris または Linux) pmt.sh
3. Welcome 画面で、「Launch Profile Management Tool」をクリックします。
4. 現在使用できるプロファイルの一覧が表示されている画面で、「Create」をクリックします。
5. Environment Selection 画面で、「Application Server」オプションを選択し、「Next」をクリックします。
6. Profile Creation Options 画面で、「Typical profile creation」を選択して「Next」をクリックします。
7. Administrative Security 画面でセキュリティを有効にするかどうかを選択し、「Next」をクリックします。
8. Profile Creation Summary 画面で情報を確認します。表示されるポート番号（特に WebSphere Administrative Console のポート番号）を確認し、正しければ「Create」をクリックします。

注意： Windows では、新しいプロファイルはデフォルトでサービスとして実行されます。

▶ WebSphere でのプロファイルの手動作成：

次の手順を実行して、プロファイル管理ツールを使用せずにプロファイルを作成します。

1. コマンドプロンプトで、現在のディレクトリを [appserver root]¥bin に変更します。
2. 次のコマンドを入力し、「AppSrv02」という名前のプロファイルを作成します。
 - (Windows) manageprofiles.bat -create -profileName AppSrv02 -profilePath [appserver root]¥profiles¥AppSrv02 -templatePath [appserver root]¥profileTemplates¥default -nodeName bamnode1 -cellName bamcell1 -hostname localhost
 - (AIX、Solaris または Linux) ./manageprofiles.sh -create -profileName AppSrv02 -profilePath [appserver root]/profiles/AppSrv02 -templatePath [appserver root]/profileTemplates/default -nodeName bamnode1 -cellName bamcell1 -hostname localhost

3. 次のコマンドを入力し、アプリケーションサーバーを起動します。
 - (Windows) `startServer.bat server1`
 - (AIX, Solaris または Linux) `./startServer.sh server1`

5.2 キーストアの構成

パスワードの暗号化および復号化用に、管理者キーストアとユーザーキーストアを設定する必要があります。また、これらのキーストアの場所も指定する必要があります。

▶ キーストアの設定と場所の指定：

1. `admin.jks` キーストアファイルを、`[LiveCycleES2 root]¥LiveCycle_ES_SDK¥misc¥Business_Activity_Monitoring¥keystore` から `[Admin Keystore Location]` にコピーします。デフォルトのパスワードは `40fd2442fa` です。
2. `user_sample.jks` キーストアファイルを、`[LiveCycleES2 root]¥LiveCycle_ES_SDK¥misc¥Business_Activity_Monitoring¥keystore` から `[User Keystore Location]` にコピーします。デフォルトのパスワードは `8deb5102f8` です。

▶ ユーザーキーストアの作成：

独自のユーザーキーストアを作成することを強くお勧めします。ユーザーキーストアを作成するには、次の手順を実行します。

1. Java キーストアの作成方法については、[LiveCycle Workbench ES2 ヘルプ](#)の「Working with Encryption Configuration」を参照してください。
2. ユーザーキーストアの場所を、`bam.properties` ファイル内にあるシステム設定プロパティ `Keystore Location` で指定します ([「bam.properties ファイルの作成」\(65 ページ\)](#)を参照)。

5.3 bam.properties ファイルの作成

インストールを始める前に、`bam.properties` という名前のシステムプロパティテキストファイルを作成する必要があります。通常、このファイルは `[appserver-bam root]/bin` ディレクトリに作成します。このドキュメントでは、このファイルの場所を `[bam.properties file location]` と表します。Business Activity Monitoring ES2 を正常に起動するには、このファイルに含まれるプロパティが必要です。このテキストファイルがないと、BAM Workbench に「First Time Setup」Web ページダイアログボックスが表示されます。これは、必須のシステムプロパティの一部が設定されていないからです。

以下のプロパティとデフォルト値を、起動用プロパティテキストファイルに設定する必要があります。

```
SMTP¥ Host=[Hostname or IP Address]
SMTP¥ From¥ Address=sntp@company.com
SMTP¥ User=user
SMTP¥ Password=password
Logging¥ Directory=[log Directory]
Additional¥ Log4j¥ Properties=[Log4j Location]/log4j.properties
Recovery¥ Log¥ Directory=[Recovery Log Directory]
Recover¥ State¥ on¥ Restart=true
Enable¥ Checkpoint=true
Admin¥ Keystore¥ Location=[Admin Keystore Location]/admin.jks
Keystore¥ Location=[User Keystore Location]/user_sample.jks
Keystore¥ Password=8deb5102f8
User¥ PrivateKey¥ Password=8deb5102f8
```

さらに、log4j.properties ファイルを作成し、システム設定プロパティ Additional Log4j Properties でその場所を指定します。このファイルには、次の内容が含まれています。

```
com.cognos.obi.metadata.DDLDispatch=com.cognos.obi.settings.DbgLow
```

注意： リカバリファイルが保存される場所を [Recovery Log Directory] と表します。プロパティ名内のスペースはすべてバックスラッシュ (\) でエスケープする必要があります。さらに、bam.properties で使用されるすべてのファイルパスにスラッシュ (/) を使用する必要があります。

5.4 BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースの作成

BAM Server が監視するプロセス評価基準の定義を保存するには、BAM Server メタデータデータベースを作成する必要があります。また、Business Activity Monitoring ES2 地理的データベースを作成して地理的マップをサポートする必要もあります。これは、BAM Dashboard で地理的チャートを使用する際に必要です。サポートされるデータベースおよび権限について詳しくは、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照してください。

5.4.1 ユーザーアカウントの作成

BAM Server が BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースに接続するために使用する専用のユーザーアカウントを作成する必要があります。必要なユーザー権限について詳しくは、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照してください。

5.4.2 データベース環境の設定 (DB2 のみ)

この節の説明は、メタデータデータベースおよび地理的データベースとして DB2 を使用している場合にのみ適用されます。

DB2 を BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースとして使用している場合は、関連する DB2 インスタンスの名前を格納する環境変数を作成する必要があります。また、DB2 共有ライブラリのパスをライブラリパス変数に格納する必要があります。

環境変数を設定するためのコマンドの例を以下に示します。該当するオペレーティングシステムに対応するコマンドを使用してください。DB2 のインストール場所に従って、コマンドの修正が必要になる場合があります。

例: Windows で環境変数を設定するためのコマンド

以下のコマンドを使用して、DB2 ライブラリファイルが C:\SQLLIB\BIN にインストールされている、DB2 という名前の DB2 インスタンスの環境変数を構成します。

```
set DB2INSTANCE=DB2
set PATH=C:\SQLLIB\BIN;%PATH%
```

例: Solaris で環境変数を設定するためのコマンド

以下のコマンドを使用して、DB2 ライブラリファイルが /opt/IBM/db2/V9.1/lib にインストールされている、db2fs という名前の DB2 インスタンスの環境変数を構成します。

```
export DB2INSTANCE=db2fs
export LD_LIBRARY_PATH=/opt/IBM/db2/V9.1/lib:${LD_LIBRARY_PATH}
```

例: AIX で環境変数を構成するためのコマンド

以下のコマンドを使用して、DB2 ライブラリファイルが /opt/IBM/db2/V9.1/lib ディレクトリにインストールされている、db2f という名前の DB2 インスタンスの環境変数を構成します。

```
export DB2INSTANCE=db2f  
export LIBPATH=/opt/IBM/db2/V9.1/lib:${LIBPATH}
```

5.4.2.1 BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成

BAM Server メタデータデータベースおよび地理的データベースにアクセスできるユーザーアカウントの JAAS 認証エイリアスを作成します。

1. BAM Server 用の WebSphere Application Server インスタンスが起動していることを確認します。
2. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Security / Global Security をクリックします。
3. 右側のウィンドウで、「Authentication」の Java Authentication and Authorization Service / J2C authentication data をクリックします。
4. 次の画面で、右側のウィンドウにある「New」をクリックします。
5. 以下のプロパティの値を指定して、「OK」をクリックします。

Alias : エイリアスの名前 (BAMDB など)

User ID : BAM Server メタデータデータベースにアクセスできるユーザーアカウントのユーザー名

Password : 指定したユーザー ID に関連付けられているパスワード

Description : (オプション) エイリアスの説明

6. 「Apply」をクリックし、「Save」をクリックします。

5.4.2.2 LiveCycle ES2 データベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成

LiveCycle ES2 データベースにアクセスできるユーザーアカウントに対して、BAM Server での JAAS 認証エイリアスを作成します。

1. BAM Server 用に作成した WebSphere Application Server が起動していることを確認します。
2. メタデータデータベースの種類に応じて、「[データソース用の J2C 認証の設定](#)」(103 ページ) の手順に従い、LiveCycle ES2 データベースに接続するための JAAS 認証エイリアスを作成および設定します。

5.4.2.3 BAM Server メタデータデータベースに対応する JDBC プロバイダの作成

BAM Server メタデータデータベースへの接続を作成するための JDBC プロバイダを作成します。

▶ JDBC プロバイダの作成 :

1. BAM Server 用の WebSphere Application Server インスタンスが起動していることを確認します。
2. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Provider をクリックします。
3. JDBC プロバイダ領域で、BAM Server 用に作成した有効範囲を選択して、「New」をクリックします。

4. (Oracle の場合) Step 1 画面で次の値を選択します。

Database type : Oracle
Provider type : Oracle JDBC Driver
Implementation type : Connection pool data source

5. (DB2 の場合) Step 1 画面で次の値を選択します。

Database type : DB2
Provider type : DB2 Universal JDBC Driver Provider
Implementation type : Connection pool data source

6. (SQL Server の場合) Step 1 画面で次の値を選択します。

Database type : SQL Server
Provider type : WebSphere embedded Connect JDBC driver for MS SQL Server
Implementation type : Connection pool data source

7. 「Next」をクリックし、「Classpath」ボックスで、BAM Server メタデータの保存に使用しているデータベースの種類に合わせて、ボックスの他のエントリの後にファイルパスを追加します。複数のクラスパスを追加する場合は、各パスの後に改行を挿入してください。

- Oracle :
{WAS_INSTALL_ROOT}/db_driver/ojdbc5.jar (For WebSphere 6.1)
{WAS_INSTALL_ROOT}/db_driver/ojdbc6.jar (For WebSphere 7.0)
- DB2 :
{WAS_INSTALL_ROOT}/db_driver/db2jcc.jar
- SQL Server - デフォルトのネイティブドライバを適用します :
{WAS_INSTALL_ROOT}/db_driver/sqljdbc.jar

注意 : 「Classpath」ボックスの既存のエントリは削除しないでください。

8. Step 2 画面で「Next」をクリックし、Step 3 画面で「Finish」をクリックします。
9. 「Save」をクリックし、「Save」をクリックして、内容をマスター構成に保管します。

5.4.2.4 LiveCycle ES2 データベースに対応する JDBC プロバイダの作成

BAM Server 用に作成したサーバーで LiveCycle ES2 JDBC プロバイダを作成します。この JDBC プロバイダを使用して LiveCycle ES2 データベースに接続します。

▶ JDBC プロバイダの作成 :

- DB2 の場合、[「DB2 JDBC プロバイダの作成 :」 \(104 ページ\)](#) を参照してください。
- Oracle の場合、[「Oracle JDBC プロバイダの作成 :」 \(109 ページ\)](#) を参照してください。
- SQL Server の場合、[「SQL Server JDBC プロバイダの作成」 \(113 ページ\)](#) を参照してください。

5.4.3 BAM Server メタデータデータベースのデータソースの定義

BAM Server が BAM Server メタデータデータベースに接続できるようにデータソースを作成します。

▶ DB2 JDBC データソースの作成：

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックします。
2. 右側のウィンドウの「All scopes」リストで、BAM Server の適切な有効範囲（通常はノード）を選択し、「New」をクリックします。
3. Step 1 画面で、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - **Data source name** : com.cognos.obi.metadata.metaDatasource
 - **JNDI name** : com.cognos.obi.metadata.metaDatasource
4. Step 2 画面で、「Select an existing JDBC provider」を選択し、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JDBC プロバイダの作成」\(67 ページ\)](#) で作成した JDBC プロバイダをリストから選択します。
5. Step 3 画面で、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - **Drive type** : DB2 のデータベースドライバの種類（通常は 4）
 - **Database name** : BAM サーバーのデータベース名
 - **Server name** : DB2 データベースを実行しているマシンのホスト名または IP アドレス
 - **Port number** : DB2 を実行するポート番号（通常は 50000 ですが、設定に応じて異なる場合があります）
6. Step 4 画面で、値を次のように設定します。
 - 「Component-managed authentication alias」のリストで、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成」\(67 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成」\(67 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
7. 「Next」をクリックし、Step 5 画面で「Finish」をクリックします。
8. 「Save」をクリックし、さらに「Save」をクリックして、内容をマスター構成に保管します。
9. このデータソースについて、[「com.cognos.obi.metadata.metaDatasource 接続プールの設定：」\(71 ページ\)](#) で説明されている手順を完了します。

▶ Oracle データソースの作成：

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックします。
2. BAM Server の適切な有効範囲（通常はノード）を選択して、「New」をクリックします。
3. Step 1 画面で、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - **Data source name** : com.cognos.obi.metadata.metaDatasource
 - **JNDI name** : com.cognos.obi.metadata.metaDatasource
 - **Component-managed authentication** : このデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
4. Step 2 画面で、「Select an existing JDBC provider」を選択し、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JDBC プロバイダの作成」\(67 ページ\)](#) で作成した JDBC プロバイダをリストから選択します。

5. 「Next」をクリックし、Step 3 画面の「URL」ボックスに以下に示すテキストを入力します。ここで、[server_host] はデータベースサーバーの IP アドレス、[port] はデータベースがリスンしているポート（デフォルトは 1521）、[SID] はデータベースのサービス ID を示します。

```
jdbc:oracle:thin:@[server_host]:[port]:[SID]
```
6. 「Data Store Helper Class Name」 リストで、「Oracle 10g data store helper」を選択します。
7. 「Use this datasource in container managed persistence (CMP)」を選択解除します。
8. Step 4 画面で、値を次のように設定します。
 - 「Component-managed authentication alias」のリストで、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成」\(67 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成」\(67 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
9. 「Next」をクリックし、Summary 画面で「Finish」をクリックします。
10. 「Save」をクリックし、「Save」をクリックして、内容をマスター構成に保管します。
11. このデータソースについて、[「com.cognos.obi.metadata.metaDatasource 接続プールの設定：」\(71 ページ\)](#) で説明されている手順を完了します。

▶ SQL Server 2005 データソースの作成：

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックします。
2. BAM Server の適切な有効範囲（通常はノード）を選択して、「New」をクリックします。
3. Step 1 画面で、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
Data source name : com.cognos.obi.metadata.metaDatasource
JNDI name : com.cognos.obi.metadata.metaDatasource
4. Step 2 画面で、「Select an existing JDBC provider」を選択し、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JDBC プロバイダの作成」\(67 ページ\)](#) で作成した JDBC プロバイダをリストから選択します。
5. Step 3 画面で、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - **Database name** : BAM サーバーのデータベース名
 - **Port number** : SQL Server を実行するポート番号（通常は 1433 ですが、設定に応じて異なる場合があります）
 - **Server name** : SQL Server データベースを実行しているマシンのホスト名または IP アドレス
6. Step 4 画面で、値を次のように設定します。
 - 「Component-managed authentication alias」のリストで、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成」\(67 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「BAM Server メタデータデータベースに対応する JAAS 認証エイリアスの作成」\(67 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
7. 「Next」をクリックし、Step 5 画面で「Finish」をクリックします。

8. 「Save」をクリックし、さらに「Save」をクリックして、内容をマスター構成に保管します。
9. このデータソースについて、[「com.cognos.obi.metadata.metaDatasource 接続プールの設定：」](#) (71 ページ) で説明されている手順を完了します。

▶ **com.cognos.obi.metadata.metaDatasource 接続プールの設定：**

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、先ほど作成したデータソースをクリックします。
2. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、プロパティを次のように設定します。
 - 「Maximum connections」ボックスに 20 (または必要に応じてそれ以上の値) と入力します。
 - 「Minimum connections」ボックスに 1 と入力します。
3. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save」をクリックして、内容をマスター構成に直接保管します。

5.4.4 BAM サーバー地理的データベースのデータソースの定義

地理的マップをサポートするには、地理的データソースを定義する必要があります。地理的マップのサポートを設定するには、[「BAM Server メタデータデータベースのデータソースの定義」](#) (69 ページ) に記載されている WebSphere Administrative Console でのデータソースの作成手順に従います。ただし、データソース名と JNDI 名には `com.cognos.obi.geo.geoDatasource` を指定する必要があります。

5.4.4.1 LiveCycle ES2 データベースに対応するデータソースの作成

BAM Server 用に作成したサーバーで IDP_DS データソースを作成します。このデータソースでは、BAM Server から LiveCycle ES2 データベースへのアクセスが許可されます。

- DB2 の場合、[「DB2 JDBC データソースの作成：」](#) (105 ページ) を参照してください。
- Oracle の場合、[「Oracle JDBC データソースの作成：」](#) (110 ページ) を参照してください。
- SQL Server の場合、[「LiveCycle ES2 用の SQL Server データソースの作成」](#) (114 ページ) を参照してください。

5.4.4.2 IDP_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、「IDP_DS」データソースをクリックします。
2. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、プロパティを次のように設定します。
 - 「Maximum connections」ボックスに 50 と入力します。
 - 「Minimum connections」ボックスに 10 と入力します。
3. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save」をクリックして、内容をマスター構成に直接保管します。

5.4.4.3 データベース接続のテスト

WebSphere のテスト接続機能を使用して、JDBC プロバイダの設定をテストすることをお勧めします。

▶ データベース接続のテスト :

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、使用しているプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「com.cognos.ob.metadata.metaDataSource」、「com.cognos.ob.geo.geoDataSource」、「IDP_DS」をクリックします。
3. 「Test Connection」をクリックします。

画面の一番上の「Message」ボックスにテストの結果が表示されます。テストが失敗した場合は、WebSphere エラーレポート機能を使用して、問題の原因を特定してください。

5.5 BAM サーバーをサポートするための WebSphere の設定

BAM Server をサポートするために、いくつかの WebSphere Application Server パラメータを設定する必要があります。

▶ アプリケーションサーバーパラメータの設定 :

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Servers / Application Servers をクリックし、BAM Server をデプロイするアプリケーションサーバーの名前をクリックします。
2. 「Configuration」タブをクリックし、「Server Infrastructure」で Java and Process Management / Process Definition をクリックします。
3. 次の画面の「Additional Properties」で、「Java Virtual Machine」をクリックします。
4. 次の画面の「Initial Heap」および「Maximum Heap」ボックスに、値を指定します。
これらのパラメータはシステムの性能に合わせて設定します。できるだけ高い値に設定することをお勧めします。デフォルト値は 256 と 1024 です。
5. 「Generic JVM Arguments」ボックスに、次のパラメータをスペースで区切って入力します。

```
-Dfile.encoding=utf8  
-DCASBOOTPROPS=[bam.properties file location including the file name]  
-Dcom.cognos.ob.bootstrap.envpropname=CASBOOTPROPS  
-Dintegrationenabled=false  
-Danonymousaccessenabled=false
```

注意 : 上記のすべての引数はスペースによって区切られます。

6. 「Classpath」ボックスに、次のクラスパスを入力します。

- (Windows) :

```
[obiProperties_Lava_Adobe Location]/obiProperties_Lava_Adobe.jar;  
[obiProperties Location]/obiProperties.jar;  
[Jaxen Location]/jaxen-1.1.1.jar;  
[Log4j Location]/log4j.jar
```

- (UNIX または Linux) :

```
[obiProperties_Lava_Adobe Location]/obiProperties_Lava_Adobe.jar:  
[obiProperties Location]/obiProperties.jar:  
[Jaxen Location]/jaxen-1.1.1.jar:  
[Log4j Location]/log4j.jar
```

注意：これらのパラメータは 1 行で入力する必要があります。また、jaxen-1.1.1.jar と log4j.jar は、どちらも [LiveCycleES2 root]/LiveCycle_ES_SDK/client-libs/thirdparty ディレクトリにあります。

7. 「Apply」をクリックし、「OK」をクリックします。次に、「Save」をクリックして、内容をマスター構成に保管します。
8. 画面の一番上のサーバー名をクリックしてメインサーバー画面に戻り、「Container Settings」で、Container Services / Transaction Service をクリックします。
9. 次の画面の「Total transaction lifetime timeout」ボックスに、600 と入力します。
10. 「OK」をクリックし、「Save」をクリックして、内容をマスター構成に保管します。
11. WebSphere を再起動します。

5.6 BAM Server 用の Process Management ES2 の設定

LiveCycle 管理コンソールを使用して BAM Server に接続できるように LiveCycle Process Management ES2 を設定できます。LiveCycle ES2 サーバーと BAM Server を実行しているサーバー、および BAM Server へのアクセスで使用するユーザーアカウント情報を指定する必要があります。

► BAM Server 用の Process Management ES2 の設定：

1. Web ブラウザから LiveCycle 管理コンソール にログインします。
http://[host name]:[port]/adminui.
2. サービス / LiveCycle Process Management ES2 / サーバー設定 / BAM の設定をクリックします。
3. 次のプロパティの値を指定します。

BAM ホスト：BAM Server を実行しているサーバーのホスト名または IP アドレス。

注意：LiveCycle ES2 と BAM が異なるマシンにある場合は、ローカルホストではなく、BAM ホストのホスト名または IP アドレスを入力する必要があります。

BAM ポート：BAM Server を実行しているアプリケーションサーバーのサービスポート。WebSphere において、Business Activity Monitoring ES2 が LiveCycle ES2 と同じサーバーにデプロイされている場合、この値は通常 9080 です。新しいプロファイルを作成すると、ポート番号は 9081 になります。

LiveCycle サーバーホスト：LiveCycle ES2 サーバーを実行しているサーバーのホスト名または IP アドレス。デフォルト値は localhost です。

注意：LiveCycle ES2 と BAM が異なるマシンにある場合は、ローカルホストではなく、LiveCycle ES2 ホストのホスト名または IP アドレスを入力する必要があります。

LiveCycle サーバーポート：LiveCycle ES2 サーバーを実行しているアプリケーションサーバーのサービスポート。WebSphere において、この値は通常 9080 です。

ユーザー名：(オプション) Process Management ES2 が BAM Server にアクセスするために使用する管理者ユーザーアカウント。デフォルトのユーザー名は CognosNowAdmin です。

注意：別のユーザーアカウントのユーザー名を指定する場合は、そのユーザーに BAM Server に対する完全な管理権限が割り当てられていることを確認してください。BAM Server ユーザーアカウントの管理について詳しくは、「[Creating Processes Using LiveCycle Workbench ES2](#)」ヘルプを参照してください。

パスワード：(オプション) 上記で指定したユーザー名に対する有効なパスワード。デフォルトのパスワードは manager です。

4. 「保存」をクリックして、LiveCycle ES2 サーバーを再起動します。

5.7 WebSphere への BAM Server のデプロイ

BAM Server EAR ファイルを、BAM Server を実行するために設定したアプリケーションサーバーにデプロイします。

▶ 共有ライブラリの作成：

WebSphere アプリケーションサーバーを適切に設定するには、[LiveCycleES2 root]/deploy ディレクトリから `AdobelIntegration.jar` を設定するための共有ライブラリを作成する必要があります。

1. WebSphere Administrative Console にログオンします。
2. `AdobelIntegration.jar` を設定するための共有ライブラリを作成します。`AdobelIntegration.jar` は、[LiveCycleES2 root]/deploy ディレクトリから取得できます。
3. Environment / Shared Libraries に移動します。
4. 次の値を使用して新しい共有ライブラリを作成します。

Name : UDFExtraClasses

Classpath : <location>/AdobelIntegration.jar

▶ BAM Server EAR ファイルのデプロイ：

1. BAM サーバー用に作成した WebSphere Application Server が起動していることを確認します。
2. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Applications / New Application をクリックします。
3. 右側のウィンドウで、「New Enterprise Application」を選択します。
4. 「Browse」をクリックし、`Lava_Adobe.ear` を選択して「Next」をクリックします。
5. 「Detailed - Show all installation options and parameters」を選択して「Choose to generate default bindings and mappings」を展開し、「Generate Default Bindings」オプションを選択して、「Next」をクリックします。
6. Step 4 の **Shared Library References** 画面で、URI の Web モジュールに UDF 参照の追加クラス、`obiWAR.war` および `WEB-INF/web.xml` を追加します。
7. 「Save」をクリックし、「Finish」をクリックします。

注意：「Resource Warning」メッセージが表示される場合がありますが、無視してかまいません。

8. 「Save」をクリックした後、「Save」をクリックして、変更をマスター構成に保管します。
9. `Lava_Adobe.ear` を起動します。
 - Applications / Enterprise Applications をクリックします。
 - 「Adobe LiveCycle ES2 Business Activity Monitoring」を選択して、「Start」をクリックします。

5.8 Business Activity Monitoring ES2 の設定

BAM Workbench インターフェイスにログインし、BAM Server システムを設定する必要があります。

▶ BAM Workbench インターフェイスへのログイン：

1. WebSphere Application Server を起動したら、Web ブラウザに次の URL を入力して BAM Workbench インターフェイスにアクセスします。

`http://[host name]:[port]/bam/login/workbench.htm`

2. 管理者としてログインします。BAM サーバーのデフォルトの管理者アカウントは、以下のとおりです。

Username : CognosNowAdmin

Password : manager

▶ BAM Server システム設定の調整：

BAM Workbench に初めてログインする場合、システム設定を調整するよう求められます。

1. 「Administration Console」タブで、「System Settings」をクリックします。
2. 「Configure」リストから「Checkpoint Configuration」を選択し、「Enable Checkpoint」が選択されていることを確認します。

注意： BAM Recovery Log Directory は、WebLogic および WebSphere では /root にデフォルトで設定されます。カスタム BAM 回復ログディレクトリを設定して、復元用に DEFAULTRECOVERYLOGGER ファイルをバックアップし忘れてもデータが失われないようにすることができます。

3. 「Configure」リストから「System Control」を選択し、「Recover State on Restart」が選択されていることを確認します。
4. 「Configure」リストから「Encryption Configuration」を選択します。
5. 「Keystore Password」ボックスと「User PrivateKey Password」ボックスでパスワードを指定します。デフォルトのユーザーキーストアパスワードは 8deb5102f8 です。
6. 「OK」をクリックします。

▶ LiveCycle ES2 メタデータ定義の読み込み：

1. 「Administration Console」タブ / Import/Export をクリックします。
2. 「Import Metadata from a JAR file (upload)」を選択して「Browse」をクリックし、LiveCycle ES2 データベースに対応した Business Activity Monitoring ES2 メタデータテンプレートの場所を指定するフルパスを入力します。
 - (DB2) adobeimport_DB2.jar
 - (MySQL) adobeimport_MySQL.jar
 - (Oracle) adobeimport_Oracle.jar
 - (SQL Server) adobeimport_SQLServer.jarこれらのファイルは [LiveCycleES2 root]/deploy ディレクトリにあります。
3. 「OK」をクリックしてファイルを読み込みます。

このタスクにより、長期間有効なすべてのプロセスで「Auto generates BAM dashboards」が有効になります。読み込み後は管理者ユーザーとしてログインし、すべての Workbench および Dashboard オブジェクトを表示できます。

▶ **Adobe User Management プラグインの読み込み：**

1. 「Workbench」タブで「JAR Files」をクリックし、右側で「New JAR」をクリックします。
2. Create JAR File ダイアログで名前を `BAMUMPlugin` として入力し、「Browse」をクリックして、`[LiveCycleES2 root]/deploy/adobe-um-plugin.jar` の場所を選択し、「Open」をクリックします。
3. 「Save」をクリックします。
4. 「Administration Console」タブで、「System Settings」をクリックします。
5. 「Configure」リストから、UM-SSO Configuration / BAMUMPlugin を選択します。
6. 「OK」をクリックします。
7. 「System Settings」をクリックし、「Configure」リストから「Adobe LiveCycle Settings」を選択して、必要に応じて以下の値を更新し、「OK」をクリックします。

ユーザー名：管理者ユーザーアカウント

パスワード：管理者パスワード

ホスト：LiveCycle ES2 サーバーのマシン名または IP アドレス

ポート：LiveCycle ES2 サーバーポート

サーバータイプ：WebSphere

Invocation Protocol：SOAP

5.9 LiveCycle User Management からのユーザーの同期

BAM Workbench および BAM Dashboard でユーザーを認証できるように、そのユーザーを LiveCycle User Management から BAM に同期させることができます。そのためには、User Management でグループを作成し、User Management からユーザーのリストを同期させる必要があります。

▶ **User Management グループの作成：**

1. `http://[host name]:[port]/adminui` で、セキュリティ管理者ロールを持つユーザーとして LiveCycle 管理コンソールにログインします。
2. 設定 / User Management / ユーザーとグループをクリックし、「新規グループ」をクリックします。
3. 「グループ名」を入力し、その他の詳細を入力して、「次へ」をクリックします。
4. グループのメンバーシップページで、グループに関連付けるユーザーを選択し、「他のグループにこのグループに関連付け」を選択し、「次へ」をクリックします。
5. 「次へ」をクリックし、「完了」をクリックします。

注意： BAM に対して複数のグループを作成する場合、そのグループ名には必ず同じプレフィックスを付けるようにします。

▶ **User Management からのユーザーの同期：**

1. Web ブラウザに `http://[host name]:[port]/bam/login/workbench.htm` と入力して、BAM Workbench にログインします。
2. 「Administration Console」タブで「System Settings」をクリックし、「Configure」リストから「Adobe LiveCycle Settings」を選択します。

3. 「Role Prefix」のプレフィックスを BAM グループのプレフィックスに合わせて変更し、「OK」をクリックします。
4. 「System Settings」をクリックし、「Configure」リストから、UM-SSO Configuration / BAMUMPlugin をクリックします。
5. ユーザーを同期させるスケジュールを設定し、「OK」をクリックします。
6. (オプション) 直ちにユーザーを同期させるには、「Synchronize Now」をクリックし、「OK」をクリックします。BAM グループのすべてのユーザーが BAM システムと同期します。

注意：別のユーザー同期を実行すると、BAM サーバー内の既存のユーザーとその BAM ロールが再度書き込まれます。これを回避するには、新しい BAM ユーザー用に新しいユーザーグループを作成し、「Synchronize Now」オプションを使用します。

5.10 BAM Dashboard の使用

LiveCycle Workbench ES2 のプロセスを作成する際に「Auto generate BAM dashboards」を選択した場合、Business Activity Monitoring ES2 でプロセス固有のダッシュボードが作成されます。プロセスがアクティブ化され、すぐに呼び出されるとき、そのプロセスインスタンスは対応する BAM Dashboard に登録されていません。BAM Server では、プロセスがアクティブ化されてからプロセスのアクティビティが監視可能になるまでに数秒かかります。プロセスをアクティブ化した後、数秒間待機してからプロセスを呼び出してください。

LiveCycle ES2 がプロセスを実行した後に BAM Server をインストールする場合、BAM Dashboard を入力する必要があります。BAM Dashboard を入力すると、BAM Server が初期化され、LiveCycle ES2 データベースのポーリングが開始されます。このプロセスが有効になると、LiveCycle ES2 データベースから収集された情報を基に AdobeView を作成できます。LiveCycle ES2 のクリーンインストールの場合、データベースは空になり、ビューは作成されません。

▶ BAM Dashboard への入力

1. Web ブラウザの URL フィールドに `http://[host name]:[port]/bam/login/workbench.htm` と入力して、BAM Workbench にログインします。
2. 「Workbench」タブで、「Public Folders」をクリックします。
3. `ActivityInstanceStartedEvent` および `ActivityInstanceCompletedEvent` を見つけます。
4. 各 Data Stream を無効にします。各 Data Stream をダブルクリックし、各 Data Stream ページの右側で「Status: Enabled」をクリックし、「Disable Dependencies」ボタンをクリックします。
5. 各 Data Stream を有効にします。各 Data Stream をダブルクリックし、各 Data Stream ページの右側で「Status: Disabled」をクリックし、「Enable All」ボタンをクリックします。
6. `ProcessInstanceStartedEvent` および `ProcessInstanceCompletedEvent` について、手順 4～5 を繰り返します。
7. `AdobeEvent`、`VC_SYSTEM_EVENTS` および `VC_TASK_EVENTS` 以外の残りのイベントすべてについて、手順 4～5 を繰り返します。

BAM Dashboard が入力されたら、BAM Dashboard にログインして LiveCycle ES2 プロセスを表示できます。

▶ BAM Dashboard へのログイン

1. Web ブラウザにダッシュボードの URL を入力します。例えば、次の URL を入力します。
`http://[host name]:[port]/bam/`
2. 管理者としてログインします。BAM Server のデフォルトの管理者アカウントは、以下のとおりです。
Username : CognosNowAdmin
Password : manager

5.11 関連ドキュメント

[Adobe Business Activity Monitoring ES2 ヘルプ](#)で Business Activity Monitoring ES2 の関連情報を確認できます。

5.12 Business Activity Monitoring ES2 のアンインストール

再インストールの前に、BAM Server を完全にアンインストールする必要があります。LiveCycle ES2 をアンインストールすると、BAM も削除されます。一部のフォルダについてはアンインストール中に削除されないことがあります。したがって、BAM を再インストールする場合は、その前に BAM が完全にアンインストールされていることを確認する必要があります。

▶ BAM Server のアンインストール：

1. WebSphere Administrative Console を使用して、BAM Server EAR ファイルのデプロイを解除します。
2. 回復ログディレクトリおよびログディレクトリから、次のパターンに似た名前を持つファイルをすべて削除します。
 - filestore*.dat
 - DEFAULTRECOVERYLOGGER_*
 - chkpoint*
3. [appserver root]¥bin フォルダの内容を確認して、chkpoint* ファイルがある場合は削除します。
4. データベース管理ツールを使用して、BAM Server メタデータを保存するデータベーステーブルをドロップします。
 - UNCOMMITTED_TID
 - ALLOCATED_UID
 - METADATA_OBJECTSまたは、新しい BAM Server メタデータデータベースを作成できます。

6

高度な実稼働環境の設定

ここでは、LiveCycle Output ES2、LiveCycle Forms ES2 および LiveCycle PDF Generator ES2 の高度なチューニングについて説明します。この章に記載されている作業は、上級アプリケーションサーバー管理者が実稼働システムに対してのみ行ってください。

6.1 Output ES2 および Forms ES2 のプールサイズの設定

PoolMax の現在のデフォルト値は 4 です。実際に設定する値は、使用環境のハードウェア構成と予想される使用量によって異なります。

最適な使用方法としては、PoolMax の下限を使用可能な CPU の数以上に設定し、上限はサーバーの負荷パターンによって決めることをお勧めします。一般的に、上限はサーバー上にある CPU コアの数に 2 倍に設定します。

▶ 既存の PoolMax 値を変更するには

1. WebSphere Administrative Console にログインします。
2. ナビゲーションツリーで、Servers / Application Servers / [server name] / Java and Process Management / Process Definition / Java Virtual Machine / Custom Properties をクリックします。
3. ConvertPdf の以下のプロパティを追加します。
 - `com.adobe.convertpdf.bmc.POOL_MAX=[new_value]`
 - `com.adobe.convertpdf.bmc.MAXIMUM_REUSE_COUNT=5000`
 - `com.adobe.convertpdf.bmc.REPORT_TIMING_INFORMATION=true`
 - `com.adobe.convertpdf.bmc.CT_ALLOW_SYSTEM_FONTS=true`
4. XMLFM の以下のプロパティを追加します。
 - `com.adobe.xmlform.bmc.POOL_MAX=[new_value]`
 - `com.adobe.xmlform.bmc.MAXIMUM_REUSE_COUNT=5000`
 - `com.adobe.xmlform.bmc.REPORT_TIMING_INFORMATION=true`
 - `com.adobe.xmlform.bmc.CT_ALLOW_SYSTEM_FONTS=true`

6.2 LiveCycle PDF Generator ES2

LiveCycle PDF Generator ES2 では、一部の種類の入力ファイルについて、複数の PDF 変換を同時に行うことができます。これは、ステートレスセッションビーンを使用して実行されます。

6.2.1 EJB プールサイズの設定

以下の種類の入力ファイルについて個別のプールサイズを適用するために、4 種類のステートレスセッションビーンがあります。

- Adobe PostScript® および Encapsulated PostScript (EPS) ファイル
- 画像ファイル (BMP、TIFF、PNG、JPEG ファイルなど)

- OpenOffice ファイル
- Microsoft Office ファイル、Photoshop® ファイル、PageMaker® ファイル、FrameMaker® ファイルなど、その他すべての種類のファイル (HTML ファイルを除く)

HTML から PDF への変換時のプールサイズは、ステートレスセッションビーンでは管理されません。

PostScript および EPS ファイルと画像ファイルのデフォルトのプールサイズは 3 に設定され、OpenOffice とその他の種類のファイル (HTML を除く) のデフォルトのプールサイズは 1 に設定されます。

CPU の数や各 CPU 内のコアの数など、使用しているサーバーハードウェア構成に基づいて、PS/EPS と画像のプールサイズを別の値に設定できます。ただし、PDF Generator ES2 を正常に機能させるためには、OpenOffice とその他の種類のファイルのプールサイズを 1 のままにする必要があります。

この節では、サポートされるアプリケーションサーバーのそれぞれについて、PS2PDF (PS から PDF への変換) と Image2PDF (画像から PDF への変換) のプールサイズを設定する方法を説明します。

以下の説明は、次の 2 つの LiveCycle ES2 アプリケーション EAR ファイルがアプリケーションサーバーにデプロイされていることを前提としています。

- adobe-lifecycle-websphere.ear
- adobe-lifecycle-native-websphere-[platform].ear

この [platform] は、オペレーティングシステムに応じて、次のいずれかの文字列に置き換えられます。

- (Windows) x86_win32
- (Linux) x86_linux
- (SunOS™) sparc_sunos
- (AIX) powerpc_aix

▶ PS2PDF および Image2PDF 用のプールサイズを構成するには：

[LiveCycle ES2 管理ヘルプ](#)の「サービスの管理」の節にある、「Distiller サービスの設定」および「Generate PDF サービスの設定」を参照してください。

6.3 Windows での CIFS の有効化

LiveCycle ES2 をホストする Windows Server 2003 および 2008 マシンを手動で設定する必要があります。Alfresco で CIFS サポートを有効にすると、ユーザーはネットワークフォルダとして Content Services ES2 リポジトリにアクセスできるようになり、ローカルファイルシステムでの場合と同様に各種のファイル操作を実行できます。LiveCycle Content Services ES2 では、ディレクトリプロバイダとして ActiveDirectory を使用するエンタープライズドメインユーザーについて CIFS がサポートされます。

注意：サーバーには、静的 IP アドレスが必要です。

Windows マシンで、次の作業を行う必要があります。

- [「NetBIOS over TCP/IP の有効化」 \(81 ページ\)](#)
- [「他の IP アドレスの追加」 \(81 ページ\)](#)
- [「SMB over NetBIOS レジストリの無効化 \(Windows 2003 のみ\)」 \(81 ページ\)](#)
- [「ファイルとプリンタの共有の無効化 \(Windows 2008 のみ\)」 \(81 ページ\)](#)

6.3.1 NetBIOS over TCP/IP の有効化

LiveCycle ES2 サーバーに接続するクライアントの要求がサーバーホスト名において解決されるように、NetBIOS over TCP/IP を有効にする必要があります。

1. ローカルエリア接続のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、「インターネットプロトコル」を選択し、「プロパティ」をクリックします。
2. インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、サーバーに静的 IP アドレスが使用されていることを確認します。「詳細設定」をクリックします。
3. TCP/IP 詳細設定ダイアログボックスで、「WINS」タブを選択し、「NetBIOS over TCP/IP を有効にする」を選択します。

6.3.2 他の IP アドレスの追加

1. ローカルエリア接続のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、「インターネットプロトコル」を選択し、「プロパティ」をクリックします。
2. インターネットプロトコル (TCP/IP) のプロパティダイアログボックスの「全般」タブで、サーバーに静的 IP アドレスが使用されていることを確認します。「詳細設定」をクリックします。
3. TCP/IP 詳細設定ダイアログボックスで、「IP 設定」タブを選択し、「追加」をクリックします。
4. 静的 IP アドレスを指定して「追加」をクリックします。

6.3.3 SMB over NetBIOS レジストリの無効化 (Windows 2003 のみ)

Windows レジストリを編集することによって、SMB over NetBIOS を無効にする必要があります。

1. Windows のレジストリエディタで、HKEY_LOCAL_MACHINE / SYSTEM / CurrentControlSet / Services / NetBT / Parameters に移動します。
2. DWORD の SMBDeviceEnabled を 0 に設定します。この値が存在しない場合は、SMBDeviceEnabled という名前の新しい DWORD 値を追加して 0 に設定します。

6.3.4 ファイルとプリンタの共有の無効化 (Windows 2008 のみ)

- 「ネットワークの設定」に移動し、「Microsoft ネットワーク用ファイルとプリンタ共有」の選択を解除して、「適用」をクリックします。

7

トラブルシューティング

LiveCycle ES2 のインストールおよび設定のトラブルシューティングについて詳しくは、『[LiveCycle ES2 のトラブルシューティング](#)』ガイドを参照してください。

A

付録 - コマンドラインインターフェイスのインストール

LiveCycle ES2 には、インストールプログラム用のコマンドラインインターフェイス (CLI) が用意されています。CLI は、LiveCycle ES2 の上級ユーザーが使用したり、インストールプログラムのグラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) がサポートされていないサーバー環境で使用したりすることを前提としています。CLI はコンソールモードで実行します。1つのインタラクティブセッションで、すべてのインストール操作を行うことができます。

CLI インストールオプションを使用してモジュールをインストールする前に、次の点を確認してください。

- LiveCycle ES2 の実行に必要なソフトウェアおよびハードウェアが使用環境に含まれている。
- 必要な環境が整っている (『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照)。
- [「製品ファイルのインストール」 \(14 ページ\)](#) の最初のページと [「LiveCycle ES2 モジュールのインストール」 \(13 ページ\)](#) に目を通した。

この付録には、以下のトピックが含まれています。

- [「LiveCycle ES2 のインストール」 \(83 ページ\)](#)
- [「エラーログ」 \(85 ページ\)](#)
- [「コンソールモードでの LiveCycle ES2 のアンインストール」 \(85 ページ\)](#)
- [「次の手順」 \(86 ページ\)](#)

A.1 LiveCycle ES2 のインストール

ここでは、LiveCycle ES2 の初期のインストールについて説明します。設定およびデプロイメントについては、[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 \(18 ページ\)](#) や [「付録 - LCM コマンドラインインターフェイス」 \(87 ページ\)](#) を参照してください。

注意： デプロイメントの際の権限の問題を回避するため、LiveCycle ES2 インストール CLI および LiveCycle Configuration Manager を実行する際には、アプリケーションサーバープロセスを実行するユーザーとしてログインしてください。

インストールプロセスを開始したら、画面の指示に従ってインストールオプションを選択します。各プロンプトに応答しながらインストールを進めてください。前の手順で選択した内容を変更する場合は、back と入力します。quit と入力すれば、いつでもインストールをキャンセルできます。

▶ LiveCycle ES2 をインストールするには

1. コマンドプロンプトを開き、実行可能なインストーラが含まれるインストールメディアまたはハードディスクのフォルダに移動します。
 - (Windows) livecycle_server¥9.0¥Disk1¥InstData¥Windows¥VM
 - (Windows 64 ビット版) livecycle_server¥9.0¥Disk1¥InstData¥Windows_64bit¥VM
 - (Linux) livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Linux/NoVM
 - (Solaris) livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/Solaris/NoVM
 - (AIX) livecycle_server/9.0/Disk1/InstData/AIX/NoVM

注意： WebSphere の場合、32 ビットのオペレーティングシステムでは Adobe LiveCycle ES2 のインストールはサポートされていません。このインストールは続行しないようにすることをお勧めします。

2. コマンドプロンプトを開いて、次のコマンドを実行します。

- (Windows) `install.exe -i console`
- (AIX、Linux、Solaris) `./install.bin -i console`

注意： `-i console` オプションを指定せずにコマンドを入力すると、GUI ベースのインストーラが起動します。

3. 次の表の説明に従って、プロンプトに応答します。

プロンプト	説明
Choose Locale	インストールで使用するロケールを値 1 ~ 2 を入力して選択します。デフォルト値を選択するには、 Enter キーを押します。 English、または日本語を選択できます。デフォルトの言語は日本語です。
Choose Install Folder	Destination 画面で、 Enter キーを押してデフォルトディレクトリを使用するか、新しいインストールディレクトリの場所を入力します。 デフォルトのインストールフォルダは次のとおりです。 (Windows) : C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2 (AIX、Linux、Solaris) : /opt/adobe/adobe_livecycle_es2 注意： ディレクトリ名にアクセント記号付きの文字を使用しないでください。アクセント記号付きの文字を使用すると、CLI によってアクセントが無視され、アクセント記号付きの文字が変更されてからディレクトリが作成されます。
Choose Operating System	(Windows のみ) LiveCycle ES2 をインストールするオペレーティングシステムを選択します。 Windows、AIX、Linux、Solaris のいずれかを選択できます。Windows (ロケール) がデフォルトです。 異なるターゲットオペレーティングシステムを選択すると、LiveCycle ES2 を別のオペレーティングシステムにデプロイするために Windows 上のインストールをステージングプラットフォームとして使用できます。
LiveCycle ES2 Server License Agreement	Enter キーを押して、使用許諾契約のページに目を通します。 契約に同意する場合は、 <code>Y</code> を入力し、 Enter キーを押します。
Pre-Installation Summary	選択したインストール内容を確認し、その内容でインストールを続行する場合は Enter キーを押します。 前の手順に戻って設定を変更するには、 <code>back</code> と入力します。
Ready To Install	インストーラによりインストールディレクトリが表示されます。 Enter キーを押すと、インストールプロセスが開始します。インストール中、進行状況バーによりインストールの進行状況が示されます。 設定を変更する場合は <code>back</code> と入力します。 <code>quit</code> と入力すると、インストールが終了します。
Installing	インストールの進行状況が示されます。

プロンプト	説明
LiveCycle Configuration Manager	<p>Enter キーを押すと、LiveCycle ES2 のインストールが完了します。</p> <p>LiveCycle Configuration Manager を実行するには、次のスクリプトを呼び出します。</p> <p>(Windows) :</p> <pre>C:¥Adobe¥Adobe Livecycle ES2¥configurationManager¥bin¥ConfigurationManager.bat</pre> <p>(AIX、Linux、Solaris) :</p> <pre>/opt/adobe/adobe_livecycle_es2/ configurationManager/bin/ConfigurationManager.sh</pre>
Installation Complete	<p>インストールの完了画面にインストールのステータスと場所が表示されます。</p> <p>Enter キーを押すと、インストーラが終了します。</p> <p>Adobe LiveCycle ES2 を適切にアンインストールするには、<code>-i console</code> フラグを使用してコマンドラインからアンインストーラを実行します。</p>

A.2 エラーログ

エラーが発生した場合は、次のインストールのログディレクトリで `Adobe_LiveCycle_ES2_InstallLog.log` を確認できます。

- (Windows) `C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2¥log`
- (AIX、Linux、Solaris) `/opt/adobe/adobe_livecycle_es2/log`

インストール中に発生するおそれのあるエラーについて詳しくは、適切なトラブルシューティングガイドを参照してください。

A.3 コンソールモードでの LiveCycle ES2 のアンインストール

コマンドラインオプションを使用して LiveCycle をインストールした場合は、コマンドラインからアンインストーラを実行するだけで Adobe LiveCycle ES2 をアンインストールできます。サイレントアンインストールを実行する場合は、「`-i console`」フラグを省略します。

次の操作を実行します。

1. コマンドプロンプトを開き、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリに移動します。

注意： UNIX システムの場合は、ディレクトリ名にスペースが含まれているので、アンインストールスクリプトが含まれるディレクトリには手動で移動する必要があります。

- (Windows) `cd C:¥Adobe¥Adobe LiveCycle ES2¥Uninstall_Adobe LiveCycle ES2`
- (AIX、Linux、Solaris) `cd /opt/adobe/adobe_livecycle_es2
/Uninstall_Adobe LiveCycle ES2`

2. プロンプトで次のコマンドを入力し、Enter キーを押します。

- (Windows) `Uninstall Adobe LiveCycle ES2.exe -i console`
- (AIX、Linux、Solaris) `./Uninstall Adobe LiveCycle ES2 -i console`

注意： `-i console` オプションを指定せずにアンインストールコマンドを入力すると、サイレントアンインストールが実行されます。

3. 画面の指示に従って操作します。

プロンプト	説明
Uninstall Adobe LiveCycle ES2	Enter キーを押すと、アンインストールが続行します。 quit と入力すると、アンインストールプログラムが終了します。 アンインストールプログラムを開始した後に、前の手順に戻って変更を加えるには、 back と入力します。
Uninstalling... Uninstall Complete	アンインストールが開始したら、残りのアンインストールプロセスが完了し、カーソルがプロンプトに戻ります。 一部の項目については削除されない可能性があります。また、LiveCycle ES2 のインストール後に作成されたフォルダは削除されません。これらのファイルやフォルダは手動で削除する必要があります。

A.4 次の手順

デプロイする LiveCycle ES2 を設定する必要があります ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 \(18 ページ\)](#))
または [「付録 - LCM コマンドラインインターフェイス」 \(87 ページ\)](#) を参照)。

LiveCycle ES2 には、LiveCycle Configuration Manager 用のコマンドラインインターフェイス (CLI) が用意されています。LiveCycle ES2 の上級ユーザーを対象としている CLI は、例えば LiveCycle Configuration Manager のグラフィカルユーザーインターフェイス (GUI) がサポートされていないサーバー環境で使用します。この章では、CLI を使用して LiveCycle ES2 を構成する方法について説明します。

- [「操作の順序」 \(87 ページ\)](#)
- [「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(88 ページ\)](#)
- [「使用例」 \(98 ページ\)](#)
- [「エラーログ」 \(98 ページ\)](#)

B.1 操作の順序

LiveCycle Configuration Manager CLI は、GUI バージョンの LiveCycle Configuration Manager と同じ順序で操作する必要があります。CLI は以下の順序で操作してください。

1. LiveCycle ES2 を構成します。
2. アプリケーションサーバポートポロジを検証します。
3. データベース接続を検証します。
4. アプリケーションサーバを構成します (WebSphere および WebLogic のみ)。
5. アプリケーションサーバの構成を検証します。
6. LiveCycle ES2 をデプロイします。
7. LiveCycle ES2 を初期化します。
8. Business Activity Monitoring ES2 を初期化します。
9. LiveCycle ES2 サーバーを検証します。
10. LiveCycle ES2 モジュールをデプロイします。
11. 7.x 互換レイヤーを LiveCycle ES2 モジュールと共にデプロイします。
12. LiveCycle ES2 モジュールのデプロイメントを検証します。
13. PDF Generator ES2 のシステム準備設定を確認します。
14. PDF Generator ES2 の管理者ユーザーを追加します。
15. LiveCycle ES2 Connector for IBM Content Manager を構成します。
16. LiveCycle ES2 Connector for IBM FileNet を構成します。
17. LiveCycle ES2 Connector for EMC Documentum を構成します。
18. LiveCycle ES2 Connectors for ECM の構成をすべてテストします。

19. Content Services ES2 を構成します。

警告： LiveCycle Configuration Manager CLI の操作を完了したら、WebSphere Application Server を再起動する必要があります。

B.2 コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル

LiveCycle Configuration Manager CLI には、LiveCycle 環境用に定義したプロパティを含むプロパティファイルが必要です。プロパティファイルのテンプレートである `cli_propertyFile_template.txt` は、`[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin` フォルダにあります。このファイルのコピーを作成して、値を編集する必要があります。このファイルは、使用する LiveCycle Configuration Manager の操作に基づいてカスタマイズできます。次の節で、必要なプロパティとその値について説明します。

プロパティファイルは、インストールの状態に応じて作成する必要があります。次のいずれかの方法を使用します。

- プロパティファイルを作成し、インストールシナリオおよび構成シナリオに応じて値を設定します。
- プロパティファイル `cli_propertyFile_template.txt` をコピーしてそのファイルをテンプレートとして使用し、使用する LiveCycle Configuration Manager 操作に基づいて値を編集します。
- LiveCycle Configuration Manager の GUI を使用し、GUI バージョンによって作成されたプロパティファイルを CLI バージョンのプロパティファイルとして使用します。`[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin/configurationManager.bat` ファイルを実行すると、`userValuesForCLI.properties` ファイルが `[LiveCycleES2 root]/configurationManager/config` ディレクトリに作成されます。このファイルを LiveCycle Configuration Manager CLI の入力として使用できます。

注意： CLI プロパティファイルでは、Windows パスのディレクトリセパレータ (`\`) にエスケープ文字 (`¥`) を使用する必要があります。例えば、指定する Fonts フォルダが `C:¥Windows¥Fonts` である場合、LiveCycle Configuration Manager CLI スクリプトでは `C:¥¥Windows¥¥Fonts` と入力する必要があります。

B.2.1 共通のプロパティ

共通のプロパティは次のとおりです。

WebLogic および WebSphere 固有のプロパティ：アプリケーションサーバーの設定、LiveCycle のデプロイ、アプリケーションサーバートポロジおよびアプリケーションサーバー設定の検証操作に必要です。

LiveCycle サーバー固有のプロパティ：LiveCycle の初期化と LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作に必要です。

以下の操作に必要なプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle ES2 を初期化する
- LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする。

プロパティ	値	説明
WebSphere 固有のプロパティ		
<code>targetServer.topologyType</code>	server または cluster	LiveCycle ES2 にデプロイするアプリケーションサーバートポロジの種類。
<code>targetServer.name</code>	文字列	アプリケーションサーバーノードまたはクラスタに割り当てられた名前。

プロパティ	値	説明
targetServer.adminHost	文字列 デフォルトは localhost です。	WebSphere アプリケーションサーバーがインストールされているサーバーのホスト名。
targetServer.adminPort	整数	WebSphere 管理サーバーが SOAP 要求をリスンするポートのポート番号。
targetServer.adminUserID	文字列	WebSphere アプリケーションサーバーへのアクセスに使用する管理ユーザー ID。
localServer.appServerRootDir	デフォルト : (Windows) C:\Program Files\IBM\WebSphere\AppServer (Linux、Solaris) /opt/IBM/WebSphere/AppServer (AIX) /usr/IBM/WebSphere/AppServer	ローカルに構成するアプリケーションサーバーインスタンスのルートディレクトリ (LiveCycle ES2 をデプロイしたり、LiveCycle ES2 をデプロイするリモートサーバーと通信するために使用したりするディレクトリ)。
LiveCycle サーバー固有のプロパティ		
LCHost	文字列	LiveCycle ES2 をデプロイするサーバーのホスト名。
LCPort	整数	LiveCycle ES2 のデプロイ先の Web ポート番号。
excludedSolutionComponents	文字列。次の値がサポートされています。 ALC-LFS-Forms、 ALC-LFS-BusinessActivityMonitoring、 ALC-LFS-ConnectorEMCDocumentum、 ALC-LFS-ConnectorIBMFileNet、 ALC-LFS-ConnectorIBMContentManager、 ALC-LFS-ContentServices、 ALC-LFS-DigitalSignatures、 ALC-LFS-DataCapture、 ALC-LFS-Output、 ALC-LFS-PDFGenerator、 ALC-LFS-PDFGenerator3D、 ALC-LFS-ProcessManagement、 ALC-LFS-ReaderExtensions、 ALC-LFS-RightsManagement	(オプション) 構成しない LiveCycle ES2 モジュールを指定します。構成対象から除外するモジュールが複数ある場合はカンマで区切ります。

B.2.2 LiveCycle の構成プロパティ

以下のプロパティは LiveCycle の構成操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
AdobeFontsDir	文字列	Adobe サーバーフォントディレクトリの場所。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
customerFontsDir	文字列	カスタマーフォントディレクトリの場所。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
systemFontsDir	文字列	システムフォントディレクトリの場所。複数のシステムフォントの場所は、セミコロンで区切って入力します。 このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできる必要があります。
LCTempDir	文字列	一時ディレクトリの場所。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
LCGlobalDocStorageDir	文字列	グローバルドキュメントを保存するルートディレクトリ。 長期間有効なドキュメントを保存したり、それらをすべてのクラスタノードで共有したりするために使用する、NFS 共有ディレクトリのパスを指定します。 このプロパティは、LiveCycle ES2 コンポーネントをクラスタ環境にデプロイする場合にのみ指定します。このパスは、デプロイ先のサーバーからアクセスできるようにする必要があります。
EnableDocumentDBStorage	true または false デフォルト : false	永続ドキュメントについて、データベースへのドキュメントの保存を有効または無効にします。 データベースへのドキュメントの保存を有効にしても、GDS のファイルシステムディレクトリは必要です。
enableFIPS	true または false デフォルト : false	「FIPS を有効にする」オプションを選択すると、RSA BSAFE Crypto-J 3.5.2 暗号化モジュールと FIPS 140-2 検証証明書 #590 を使用して FIPS 140-2 承認済みアルゴリズムにデータ保護が制限されます。このオプションは、FIPS を実行する必要がある場合にのみ設定してください。

プロパティ	値	説明
Content Services ES2 のみ		
contentServices.rootDir	文字列	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] Content Services ES2 で使用するルートディレクトリを指定します。クラスタ環境で LiveCycle を実行している場合、クラスタ内のすべてのノードによって、すべてのノードにわたって同じパスでこのディレクトリが共有されている必要があります。
contentServices.myfacesDir	文字列	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] [WebSphere のみ]。myfaces jar のコピー先ディレクトリ。共有ライブラリとして使用します。
contentServices.topology	文字列。SERVER または CLUSTER を指定します。 デフォルト：SERVER	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] シングルノードの場合は SERVER、クラスタ構成の場合は CLUSTER。
contentServices.cifs.enable	true または false デフォルト：false	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS を有効または無効にします。
contentServices.cifs.servername	文字列	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS サーバーのサーバー名。
contentServices.cifs.implementation	文字列。次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • NetBIOS • PureJava 	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS サーバーへの Content Services ES2 の接続方法を指定します。
contentServices.cifs.dllpath	文字列。 NetBIOS DLL のコピー元のパスを指定します。	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] NetBios DLL のコピー元のパス。「contentServices.cifs.implementation=NetBIOS」の場合は必須。このパスは環境内に存在している必要があります。
contentServices.cifs.alternateIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] CIFS サーバーの代替 IP アドレス。静的 IP である必要があります。「contentServices.cifs.implementation=PureJava」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.WinsOrBrdcast	文字列。次のいずれかを指定します。 <ul style="list-style-type: none"> • winsServer • broadcast 	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] DNS 検索方法。「winsServer」または「broadcast」になります。「contentServices.cifs.implementation=PureJava」の場合、これは必須フィールドです。

プロパティ	値	説明
contentServices.cifs.winsPrmIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] プライマリ WINS サーバーの IP アドレス。ipconfig/all コマンドから取得できます。 「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=winsServer」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.winsSecIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] セカンダリ WINS サーバーの IP アドレス。ipconfig/all コマンドから取得できます。 「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=winsServer」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.cifs.brdCastIP	数値	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] ブロードキャスト IP アドレス。 「contentServices.cifs.implementation=PureJava」および「contentServices.cifs.WinsOrBrdcast=broadCast」の場合、これは必須フィールドです。
contentServices.dbType	文字列	[Adobe LiveCycle Content Services ES2 のみ] Content Services のデータベースタイプ。

B.2.3 アプリケーションサーバーの設定および検証のプロパティ

LiveCycle Configuration Manager では、LiveCycle ES2 の必要に応じて、WebSphere アプリケーションサーバーを構成および検証できます。

次の操作に適用されるプロパティを、以下の表に示します。

- アプリケーションサーバーの構成
- アプリケーションサーバートポロジの検証
- アプリケーションサーバー構成の検証
- データベース接続の検証

プロパティ	値	説明
WebSphere 固有のプロパティセクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(88 ページ) を参照してください。		
jvm.initialHeapSize	デフォルト： 512	JVM の初期ヒープサイズ (MB)。
jvm.maxHeapSize	デフォルト： 1792	JVM の最大ヒープサイズ (MB)。
データソース構成		
datasource.dbType	次のオプションから選択します。 <ul style="list-style-type: none"> ● oracle ● mysql ● db2 ● sqlserver 	LiveCycle ES2 で使用するよう構成するデータベースの種類。
datasource.dbName	文字列	データベースの名前。
datasource.dbHost	文字列	データベースがあるサーバーのホスト名または IP アドレス。
datasource.dbPort	整数	LiveCycle ES2 がデータベースとの通信に使用するデータベースポート。
datasource.dbUser	文字列	LiveCycle ES2 がデータベースへのアクセスに使用するユーザー ID。
datasource.dbPassword	文字列	データベースユーザー ID に関連付けられているパスワード。
datasource.target.driverPath	文字列	アプリケーションサーバーの lib ディレクトリ内の JDBC ドライバ。このパスは、構成するサーバーからアクセスできる、有効なパスである必要があります。
datasource.local.driverPath	文字列	ローカル JDBC ドライバ。この値は、直接データベース接続のテストにのみ使用します。

B.2.4 LiveCycle のデプロイプロパティ

以下のプロパティは LiveCycle ES2 のデプロイ操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(88 ページ) を参照してください。		
deployment.includeIVS	true または false	IVS EAR ファイルをデプロイメントに含めるかどうかを指定します。 警告： IVS EAR ファイルは実稼働環境に含めないようにすることをお勧めします。

B.2.5 LiveCycle の初期化プロパティ

以下のプロパティは LiveCycle ES2 の初期化操作にのみ適用されます。

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(88 ページ) を参照してください。		

B.2.6 BAM の初期化プロパティ

以下のプロパティは BAM の初期化操作にのみ適用されます。

注意： Business Activity Monitoring ES2 は、LiveCycle ES2 のオプションコンポーネントです。

プロパティ	値	説明
BAMHost	文字列	BAM をデプロイして実行するサーバーのホスト名。
BAMPort	整数	BAM サーバーが要求をリスンするポート番号。
BAMAdminUserID	文字列	BAM サーバーへの接続に使用する BAM 管理者ユーザー ID。
BAMAdminPassword	文字列	BAM サーバーへの接続に使用する BAM 管理者パスワード。
databaseType	次のオプションから選択します。 <ul style="list-style-type: none">oraclemysqldb2sqlserver	LiveCycle が BAM データのキャプチャに使用するデータベースの種類。

B.2.7 LiveCycle コンポーネントのデプロイプロパティ

以下の操作に適用されるプロパティは次の表のとおりです。

- LiveCycle コンポーネントのデプロイ
- LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証
- LiveCycle サーバーの検証

プロパティ	値	説明
LiveCycle サーバー情報セクションを構成する必要があります。詳しくは、 「共通のプロパティ」(88 ページ) を参照してください。		
LCAdminUserID	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるユーザー ID。このユーザー ID は、LiveCycle 管理コンソールへのログオンに使用されます。
LCAdminPassword	文字列	LiveCycle 管理者ユーザーに割り当てるパスワード。このパスワードは、LiveCycle 管理コンソールへのログオンに使用されます。

B.2.8 コマンドラインインターフェイスの使用

プロパティファイルを構成したら、次のフォルダに移動する必要があります。
[LiveCycleES2 root]/configurationManager/bin フォルダ

LiveCycle Configuration Manager CLI のコマンドの詳細な説明を表示するには、
ConfigurationManagerCLI help <command name> と入力します。

B.2.8.1 LiveCycle の設定 CLI の使用

LiveCycle の構成操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#)を参照してください。

B.2.8.2 アプリケーションサーバーの構成 CLI の使用

WebSphere のアプリケーションサーバーの構成操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
configureApplicationServer -targetServer_AdminPassword <password> -f <propertyFile> [-skip <configurationsToSkipList>]
```

説明：

- -targetServer_AdminPassword <password>：コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer_AdminPassword プロパティが上書きされます。
- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -skip <configurationsToSkipList>：構成しないアプリケーションサーバーコンポーネントを指定できるオプションのパラメータです。構成対象から除外するコンポーネントが複数ある場合はカンマで区切ります。有効なオプションは、Datasource および Core です。

B.2.8.3 LiveCycle のデプロイ CLI の使用

LiveCycle のデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#) を参照してください。

B.2.8.4 LiveCycle の初期化 CLI の使用

LiveCycle の初期化操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeLiveCycle -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#) を参照してください。

B.2.8.5 Business Activity Monitoring の初期化 CLI の使用

Business Activity Monitoring の初期化操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
initializeBAM -f <propertyFile>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#) を参照してください。

B.2.8.6 LiveCycle コンポーネントのデプロイ CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイ操作では、次の構文を使用する必要があります。

```
deployLiveCycleComponents -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile>：必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password>：コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.2.8.7 アプリケーションサーバートポロジの検証 CLI の使用

アプリケーションサーバートポロジの検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerTopology -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.2.8.8 データベース接続の検証 CLI の使用

データベース接続の検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateDBConnectivity -f <propertyFile> -datasource_dbPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -datasource_dbPassword <password> : コマンドラインでデータベースユーザーパスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの datasource.dbPassword プロパティが上書きされます。

B.2.8.9 アプリケーションサーバ構成の検証 CLI の使用

アプリケーションサーバ構成の検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateApplicationServerConfigurations -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.2.8.10 LiveCycle サーバーの検証 CLI の使用

LiveCycle サーバーの検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleServer -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」 \(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.2.8.11 LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証 CLI の使用

LiveCycle コンポーネントのデプロイメントの検証操作 (オプション) では、次の構文を使用する必要があります。

```
validateLiveCycleComponentDeployment -f <propertyFile> -targetServer_AdminPassword <password>
```

説明：

- -f <propertyFile> : 必要な引数が含まれるプロパティファイル。プロパティファイルの作成手順について詳しくは、[「コマンドラインインターフェイスのプロパティファイル」\(88 ページ\)](#) を参照してください。
- -targetServer_AdminPassword <password> : コマンドラインで管理者パスワードを設定できます。この引数を指定すると、プロパティファイルの targetServer.adminPassword プロパティが上書きされます。

B.3 使用例

C:\Adobe\Adobe LiveCycle ES2\configurationManager\bin から次のコマンドを入力します。
ConfigurationManagerCLI configureLiveCycle -f cli_propertyFile.txt

cli_propertyFile.txt には、作成済みのプロパティファイルの名前を指定します。

B.4 エラーログ

エラーが発生した場合は、[LiveCycleES2 root]\configurationManager\log フォルダにある CLI エラーログで確認できます。生成されるログファイルには、命名規則に基づいて lcmCLI.0.log のような名前が付けられます。ファイル名の数字 (ここでは 0) は、ログファイルがロールオーバーされるたびに増加します。

B.5 次の手順

LiveCycle Configuration Manager CLI を使用して LiveCycle ES2 の構成とデプロイを行った場合は、この時点で次の作業を実行できます。

- デプロイメントの確認 ([「監視フォルダのパフォーマンスパラメータの設定」\(43 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle 管理コンソールへのアクセス ([「LiveCycle 管理コンソールへのアクセス」\(31 ページ\)](#) を参照)。
- LDAP にアクセスするための LiveCycle モジュールの構成 ([「LiveCycle ES2 の LDAP アクセス設定」\(44 ページ\)](#) を参照)。
- LiveCycle ES2 のアンインストール ([「LiveCycle ES2 のアンインストール」\(61 ページ\)](#) を参照)。

デプロイメントのためのアプリケーションサーバーの構成を行っていない場合は、この時点でアプリケーションサーバーを構成する必要があります ([「付録 - WebSphere の手動設定」\(99 ページ\)](#) を参照)。

注意：ここでは、LiveCycle ES2 のアプリケーションサーバーを手動で設定する方法について説明します。LiveCycle Configuration Manager には、これらの手順を自動で実行するためのオプションが用意されています。このオプションの選択を解除した場合は、この付録で説明する手順を実行する必要があります。

アプリケーションサーバーを自動的に設定する方法については、[「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」\(18 ページ\)](#) を参照してください。

インストールのこの段階では、既に LiveCycle ES2 ファイルがインストールされ、デプロイ可能な LiveCycle ES2 アーカイブを設定するための LiveCycle Configuration Manager が実行されています。これで、アプリケーションサーバーとデータベースの接続を手動で設定できます。

LiveCycle ES2 をアプリケーションサーバーにデプロイする際には、LiveCycle Configuration Manager を使用して LiveCycle ES2 と LiveCycle ES2 Business Activity Monitoring を初期化できます（該当する場合）。

この章には、以下のトピックが含まれています。

- [「ディレクトリ権限の設定」\(99 ページ\)](#)
- [「JVM 引数の設定」\(100 ページ\)](#)
- [「WebSphere のタイムアウトの設定」\(101 ページ\)](#)
- [「LiveCycle PDF Generator ES2 のスロットリングの設定」\(102 ページ\)](#)
- [「LiveCycle ES2 データベース接続の設定」\(103 ページ\)](#)
- [「次の手順」\(119 ページ\)](#)

C.1 ディレクトリ権限の設定

LiveCycle ES2 では、[WAS_HOME]/installedApps ディレクトリ (/usr/IBM/WebSphere/AppServer) にファイルを抽出する必要があります。このディレクトリへの書き込み権限があることを確認する必要があります。書き込み権限がない場合にファイルの抽出先を変更する方法については、次の手順を参照してください。

▶ ファイルの抽出先を変更するには

1. WebSphere Administrative Console にログインし、ナビゲーションツリーで次の操作を実行します。
(WebSphere 6.1) Servers / Application servers をクリックします。
(WebSphere 7.0) Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックします。
2. 右側のウィンドウで、サーバー名（例えば server1）をクリックします。
3. 「Server Infrastructure」で、Java and Process Management / Process Definition をクリックします。
4. 「Additional Properties」で「Java Virtual Machine」をクリックし、次の画面で「Custom Properties」をクリックします。
5. 「New」をクリックし、adobeidp.RootDirectory という名前のカスタムプロパティを作成します。
6. 作成した新しいプロパティの値を、アドビのネイティブファイルの抽出先となるパスに設定します（例えば、[WAS_HOME]/profiles/[server]/installedApps に設定します）。説明を変更することもできます。

C.2 JVM 引数の設定

JVM の引数とカスタムプロパティを設定する必要があります。

警告： Pure IPv6 WebSphere Application Server 環境（つまり、IPv4 アドレスが存在しない環境）でインストールする場合は、LiveCycle ES2 EAR ファイルを手動で設定してデプロイする必要があります。必要な操作は次のとおりです。

- LiveCycle Configuration Manager を実行して、LiveCycle ES2 を設定する
- WebSphere を手動で設定する
- LiveCycle ES2 EAR ファイルを手動でデプロイする

これらの操作が完了したら、LiveCycle Configuration Manager で次の操作を実行します。

- LiveCycle ES2 のデータベースを初期化する
- LiveCycle ES2 コンポーネントをデプロイする
- LiveCycle ES2 コンポーネントのデプロイメントを検証する

▶ JVM 引数を設定するには

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、アプリケーションサーバーに対して次の操作を実行します。

(WebSphere 6.1) Servers / Application servers をクリックします。

(WebSphere 7.0) Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックします。

2. 右側のウィンドウで、サーバー名をクリックします。
3. 「Server Infrastructure」で、Java and Process Management / Process Definition をクリックします。
4. 「Additional Properties」で、「Java Virtual Machine」をクリックします。
5. 「Initial Heap Size」ボックスに 256 と入力し、「Maximum Heap Size」ボックスに 1024 と入力します。

注意： この値は、ハードウェアの構成やメモリの空き容量によって異なります。x86/64 ビットのサーバーを使用している場合は、「Maximum Heap Size」を 1792 以上に設定できます。

6. 「Generic JVM arguments」ボックスに `-Dfile.encoding=utf8` と入力します。
7. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
8. 右側のウィンドウの「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「New」をクリックします。
9. 「Name」ボックスに `java.net.preferIPv4Stack` (IPv4 の場合) または `java.net.preferIPv6Stack` (IPv6 の場合) と入力し、「Value」ボックスに `true` と入力します。
10. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

C.3 WebSphere のタイムアウトの設定

CreateLocalUsers API を 1 回呼び出すだけで、多数のユーザーを一度に作成することができます。この API では、すべての新規ユーザーが正常に作成されるか、エラーが発生した場合はすべての変更がロールバックされることが求められます。したがって、この API は、ロールバックをサポートするために 1 回のトランザクションで実行する必要があります。トランザクションの存続時間はアプリケーションサーバーの設定 (通常は 30 秒) によって制限されるので、所定の時間内に実行できる挿入の回数には限りがあります。このため、CreateLocalUser などの一括挿入 API では、ユーザー数が一定の制限数を超えるとエラーが発生します。この制限もトランザクションの存続時間によって決まります。

次のタイムアウトの設定を変更する必要があります。

- トランザクションタイムアウト値
- CORBA タイムアウト値
- SOAP 要求タイムアウト値

注意： LiveCycle PDF Generator ES2 をインストールする場合は、[「次の手順」 \(119 ページ\)](#) も完了する必要があります。

▶ トランザクションタイムアウトを設定するには

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、アプリケーションサーバーに対して次の操作を実行します。
(WebSphere 6.1) Servers / Application servers をクリックします。
(WebSphere 7.0) Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックします。
2. 右側のウィンドウで、サーバー名をクリックします。
3. 「Container Settings」で、Container Services / Transaction Service をクリックします。
4. 「General Properties」の「Total transaction lifetime timeout」ボックスに 300 (またはそれ以上) と入力します。
5. 「Maximum transaction timeout」ボックスの値を「Total transaction lifetime timeout」の値以上にします。
6. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ CORBA タイムアウト値を増やすには

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、アプリケーションサーバーに対して次の操作を実行します。
(WebSphere 6.1) Servers / Application servers をクリックします。
(WebSphere 7.0) Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックします。
2. 右側のウィンドウで、サーバー名をクリックします。
3. 「Container Settings」で、Container Services / ORB Service をクリックします。
4. 「General Properties」で、「Request timeout」ボックスに 360 と入力し、「Locate Request Timeout」ボックスに 300 と入力します。
5. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ SOAP 要求タイムアウト値を増やすには

1. [appserver root] ディレクトリに移動し、soap.client.props という名前のファイルをすべて検索します。この名前のファイルは複数存在する場合があります。例えば、次のファイルを変更しなければならないことがあります。次のテンプレートを使用してプロファイルを作成する場合にのみ、テンプレートプロファイルの定義を変更する必要があります。
 - [appserver root]/profileTemplates/default/documents/properties/soap.client.props
 - [appserver root]/profileTemplates/cell/default/documents/properties/soap.client.props
 - [appserver root]/cip/profileTemplates/minimal/documents/properties/soap.client.props
 - [appserver root]/profiles/AppSrv01/properties/soap.client.props
2. ファイルごとに、手順 3 を繰り返します。
3. ファイルをテキストエディタで開き、**com.ibm.SOAP.requestTimeout** プロパティを探し、値を 180 から 1800 に変更して、ファイルを保存します。
4. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、アプリケーションサーバーに対して次の操作を実行します。
 - (WebSphere 6.1) Servers / Application servers をクリックします。
 - (WebSphere 7.0) Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックします。
5. 右側のウィンドウで、サーバー名をクリックします。
6. 「Server Infrastructure」で、Administration / Administration Services をクリックします。
7. 「Additional Properties」で「JMX connectors」をクリックし、右側のウィンドウのリストで「SOAPConnector」をクリックします。
8. 次の画面で「Custom Properties」をクリックし、リストで「requestTimeout」をクリックします。
9. 「General Properties」で、「Value」ボックスの値を 600 から 1800 に変更します。
10. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

C.4 LiveCycle PDF Generator ES2 のスロットリングの設定

PDF Generator ES2 では、スロットリング設定をアプリケーションサーバーの設定に追加する必要があります。

▶ PDF Generator ES2 のスロットリング設定を指定するには

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、アプリケーションサーバーに対して次の操作を実行します。
 - (WebSphere 6.1) Servers / Application servers をクリックします。
 - (WebSphere 7.0) Servers / Server Types / WebSphere Application Servers をクリックします。
2. 右側のウィンドウで、サーバー名をクリックします。
3. 「Server Infrastructure」で、Java and Process Management / Process Definition をクリックします。
4. 「Additional Properties」で「Java Virtual Machine」をクリックし、次の画面で「Custom Properties」をクリックします。

5. 「New」をクリックし、以下のボックスに対応するテキストを入力して新しいプロパティを作成します。

Name : com.ibm.websphere.ejbcontainer.poolSize

Value : LiveCycle9#adobe-pdfg-bmc-invoker-ejb.jar#NativeToPDFInvoker=1,1:
LiveCycle9#adobe-pdfg-bmc-invoker-ejb.jar#OpenOfficeToPDFInvoker=1,1:
LiveCycle9#adobe-pdfg-bmc-invoker-ejb.jar#ImageToPDFInvoker=3,3:
LiveCycle9#adobe-pdfg-bmc-invoker-ejb.jar#PSToPDFInvoker=3,3

注意 : この値は手動で入力する必要があります。このマニュアルから値をコピー&ペーストしないでください。

この例で、LiveCycle9 は、WebSphere Application Server に表示される LiveCycle ES2 コアアプリケーションの名前です。この名前が異なる場合は、値パラメータに 4 つ出現する LiveCycle9 という文字列すべてを、実際のアプリケーション名に置き換える必要があります。

Description : Adobe PDF Generator Throttling Configuration

6. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

C.5 LiveCycle ES2 データベース接続の設定

WebSphere および LiveCycle ES2 デプロイメントから LiveCycle ES2 データベースに接続できるようにするには、データベースドライバをインストールし、データソースを設定して、LiveCycle ES2 のデータベース接続を作成します。

LiveCycle ES2 データベースとして使用するデータベースの種類に対応したドライバをインストールします。ドライバはアプリケーションサーバーのインストールディレクトリに配置する必要があります。

データベースに接続するデータソースを設定します。WebSphere では、DB2、Oracle または SQL Server のデータソースを設定できます。

『[LiveCycle ES2 のインストールの準備](#)』で行った操作から、次の情報が必要になります。

- データベース名
- サーバー名
- ユーザー名
- パスワード

C.5.1 データソース用の J2C 認証の設定

データソースを設定する前に、データソース用の J2C 認証を設定する必要があります。

▶ データソース用の J2C 認証の構成を作成するには :

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、次の操作を実行します。
(WebSphere 6.1) Security / Secure administration, applications, and infrastructure をクリックします。
(WebSphere 7.0) Security / Global Security をクリックします。
2. 右側のウィンドウの「Authentication」で、Java Authentication and Authorization Service / J2C authentication data をクリックして、「New」をクリックします。

3. 以下のボックスに適切な情報を入力します。

Alias : データベースユーザーに適切な名前を入力します (例えば、IDP_DS/db2-db2user と入力します)。

User ID : ユーザー ID を入力します。この ID は、IDP_DS データソースを使用してデータベースにアクセスするためのログイン資格情報となります (例えば、db2user)。

Password : このユーザーのパスワードを入力します。

4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

C.5.2 DB2 データソースの設定

DB2 データソースを設定するには、まず DB2 データベースドライバをインストールする必要があります。次に、WebSphere 上に DB2 JDBC プロバイダを作成してから、データソースを作成し、対応する接続プールを設定する必要があります。また、DB2 に接続する WebSphere 7.0 は、スレッドのデッドロックを回避するためにカスタムのプロパティが必要です。

注意 : これらの手順は、DB2 9.1 と DB2 9.5 の両方に適用されます。

▶ DB2 データベースドライバのインストール :

1. [appserver root] ディレクトリに db2libs という名前のディレクトリを作成します。
2. 次のいずれかのディレクトリから [appserver root]¥db2libs ディレクトリに db2jcc_license_cu.jar ファイルと db2jcc.jar ファイルをコピーします。
 - [dbserver root] ディレクトリの下にある Java ディレクトリ ([dbserver root]/ibm/Sqllib/java (Windows)、[dbserver root]/java (Linux または UNIX) など)
 - (DB9.1 のみ) [LiveCycleES2 root]¥lib¥db¥db2¥9.1
 - (DB9.5 のみ) [LiveCycleES2 root]¥lib¥db¥db2¥9.5

▶ DB2 JDBC プロバイダの作成 :

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Environment / Websphere Variables をクリックし、右側のウィンドウで「DB2UNIVERSAL_JDBC_DRIVER_PATH」をクリックします。
2. 「Value」ボックスに db2libs ディレクトリへのパスを入力します。
3. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
4. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックします。
5. 右側のウィンドウの「Scope」ドロップダウンリストで、レベルとして「Node=NodeName」を選択し、「New」をクリックします。
6. Step 1 ウィンドウで、値を次のように設定します。
 - 「Database type」リストで「DB2」を選択します。
 - 「Provider type」リストで「DB2 Universal JDBC Driver Provider」を選択します。
 - 「Implementation type」リストで「Connection pool data source」を選択します。各 LiveCycle Configuration Manager 設定スクリプトでは、フィールド実装クラス名は com.ibm.db2.jcc.DB2ConnectionPoolDataSource です。
 - 「Name」ボックスで、デフォルトの「DB2 Universal JDBC Driver Provider」をそのまま使用するか、または LiveCycle - DB2 - IDP_DS と入力します。

7. 「Next」 をクリックし、Step 2 ウィンドウでもう一度 「Next」 をクリックします。
8. Step 3 ウィンドウで、「Finish」 をクリックして、「Save directly to master configuration」 をクリックします。

▶ DB2 JDBC データソースの作成：

WebSphere 6.1

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「DB2 JDBC プロバイダの作成：」 \(104 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」 で 「Data sources」 をクリックし、「New」 をクリックします。
3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」 をクリックします。
 - 「Data source name」 ボックスに `Livecycle - DB2 - IDP_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」 ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - 「Component-Managed Authentication and XA Recovery Authentication」 の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択し、「Next」 をクリックします。
4. Step 2 ウィンドウで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) で作成したデータベースのデータベース名とサーバー名を入力します。
5. 「Use this data source in container managed persistence (CMP)」 が選択されていることを確認し、「Next」 をクリックします。
6. Step 3 ウィンドウで、「Finish」 をクリックします。
7. 右側のウィンドウで、前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースをクリックし、値を次のように設定します。
 - 「Container-managed authentication alias」 リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」 リストで 「DefaultPrincipalMapping」 を選択します。
8. 「OK」 または 「Apply」 をクリックし、「Save directly to master configuration」 をクリックします。
9. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」 で 「WebSphere Application Server data source properties」 をクリックします。
 - 「Statement cache size」 フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」 または 「Apply」 をクリックし、「Save directly to master configuration」 をクリックします。
10. 先ほど作成したデータソースを選択し、「Test Connection」 を選択して、データソース接続が正常に機能していることを確認します。

WebSphere 7.0

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「DB2 JDBC プロバイダの作成：」 \(104 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」 で 「Data sources」 をクリックし、「New」 をクリックします。

3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに `Livecycle - DB2 - IDP_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
4. Step 2 ウィンドウで、「[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：](#)」(103 ページ) で作成したデータベースのドライバの種類、データベース名、サーバー名およびポート番号を入力します。
5. 「Use this data source in container managed persistence (CMP)」が選択されていることを確認し、「Next」をクリックします。
6. Step 3 ウィンドウで、値を次のように設定します。
 - 「Component-managed authentication alias」の下のリストから、「[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：](#)」(103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択し、「Next」をクリックします。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、「[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：](#)」(103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
7. Step 4 ウィンドウで「Finish」をクリックします。
8. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. 先ほど作成したデータソースを選択し、「Test Connection」を選択して、データソース接続が正常に機能していることを確認します。

▶ Livecycle - DB2 - IDP_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、先ほど作成した JDBC プロバイダ ([「DB2 JDBC プロバイダの作成：」](#)(104 ページ) の例では「DB2 Universal JDBC Driver Provider」または「LiveCycle - db2 - IDP_DS」) をクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「Livecycle - DB2 - IDP_DS」を選択します。
3. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、プロパティを次のように設定します。
 - 「Maximum connections」ボックスに 30 (または必要に応じてそれ以上の値) と入力します。
 - 「Minimum connections」ボックスに 1 と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ (WebSphere 7.0 のみ) DB2 のカスタムプロパティの構成：

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、[「DB2 JDBC データソースの作成：」](#)(105 ページ) で作成したデータソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「New」をクリックします。

3. 「Name」ボックスに `useRRASetEquals` と入力し、「Value」ボックスに `true` と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ **LiveCycle Rights Management ES2 用の DB2 JDBC データソースの作成：**

注意： この節の説明は、Rights Management ES2 がインストール済みの場合にのみ適用されます。

WebSphere 6.1

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、[「DB2 JDBC プロバイダの作成：」 \(104 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに `Livecycle - DB2 - RM_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに `EDC_DS` と入力します。
 - 「Component-Managed Authentication and XA Recovery Authentication Alias」の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択し、「Next」をクリックします。
4. Step 2 ウィンドウで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) で作成したデータベースのデータベース名とサーバー名を入力します。
5. 「Use this data source in container managed persistence (CMP)」が選択されていることを確認し、「Next」をクリックします。
6. Step 3 ウィンドウで、「Finish」をクリックします。
7. 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースを選択し、値を次のように設定します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
8. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. 先ほど作成したデータソースを選択し、「Test Connection」を選択して、データソース接続が正常に機能していることを確認します。

WebSphere 7.0

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、[「DB2 JDBC プロバイダの作成：」 \(104 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。

3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに `Livecycle - DB2 - RM_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに `EDC_DS` と入力します。
4. Step 2 ウィンドウで、「[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：](#)」(103 ページ) で作成したデータベースのドライバの種類、データベース名、サーバー名およびポート番号を入力します。
5. 「Use this data source in container managed persistence (CMP)」が選択されていることを確認し、「Next」をクリックします。
6. Step 3 ウィンドウで、値を次のように設定します。
 - 「Component-managed authentication alias」の下のリストから、「[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：](#)」(103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択し、「Next」をクリックします。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、「[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：](#)」(103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
7. Step 4 ウィンドウで「Finish」をクリックします。
8. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. 先ほど作成したデータソースを選択し、「Test Connection」を選択して、データソース接続が正常に機能していることを確認します。

► **LiveCycle Rights Management ES2 用の Livecycle - DB2 - RM_DS 接続プールの設定：**

注意： この節の説明は、Rights Management ES2 がインストール済みの場合にのみ適用されます。

1. ナビゲーションツリーで、Resource / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、先ほど作成した「DB2 Universal JDBC Driver Provider for RM」という JDBC プロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「Livecycle - DB2 - RM_DS」を選択します。
3. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、プロパティを次のように設定します。
 - 「Maximum connections」ボックスに 20 (または必要に応じてそれ以上の値) と入力します。
 - 「Minimum connections」ボックスに 1 と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ (WebSphere 7.0 のみ) DB2 のカスタムプロパティの構成：

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、[「LiveCycle Rights Management ES2 用の DB2 JDBC データソースの作成：」 \(107 ページ\)](#) で作成したデータソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「New」をクリックします。
3. 「Name」ボックスに `useRRASetEquals` と入力し、「Value」ボックスに `true` と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ デフォルトの分離レベルの設定

1. WebSphere Integrated Solutions Console にログインします。
2. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックします。
3. 右側のペインのドロップダウンリストで、Node=[appropriate node name] を選択します。対応するノード下のすべてのデータソースが表示されます。
4. JNDI 名が IDP_DS である LiveCycle - DB2 - IDP_DS をクリックします。
5. Custom Properties をクリックします。
6. `webSphereDefaultIsolationLevel` プロパティを探し、クリックして、編集用に開きます。
7. 値を **2** に設定します。値 2 は Read Committed を意味します。
8. 「Apply」をクリックし、「OK」をクリックします。
9. ページ上部の「Messages」ボックスで、「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. WebSphere を再起動します。

C.5.3 Oracle データソースの設定

Oracle データソースを設定するには、まず Oracle データベースドライバをインストールする必要があります。次に、WebSphere 上に Oracle JDBC プロバイダを作成してから、データソースを作成し、対応する接続プールを設定する必要があります。

▶ Oracle 10g データベースドライバのインストール：

1. [appserver root] ディレクトリに `db_driver` という名前のディレクトリを作成します。
2. [DVD_root]/third_party/db/oracle ディレクトリから手順 1 で作成したディレクトリに、JDK 1.5 用の `ojdbc5.jar` または JDK 1.6 用の `ojdbc6.jar` ドライバファイルをコピーします。

▶ Oracle JDBC プロバイダの作成：

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Environment / Websphere Variables をクリックし、右側のウィンドウで、「ORACLE_JDBC_DRIVER_PATH」をクリックします。
2. 「General Properties」の「Value」ボックスに、[「Oracle 10g データベースドライバのインストール：」 \(109 ページ\)](#) で作成したデータベースドライバファイル (JDK 1.5 用の `ojdbc5.jar` または JDK 1.6 用の `ojdbc6.jar`) のパスを入力します。
3. 「OK」をクリックし、次に「Save directly to master configuration」をクリックします。

- ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックします。
- 右側のウィンドウの「Scope」ドロップダウンリストで、レベルとして「Node=NodeName」を選択し、「New」をクリックします。
- Step 1 ウィンドウで、値を次のように設定します。
 - 「Database type」リストで「Oracle」を選択します。
 - 「Provider type」リストで「Oracle JDBC Driver」を選択します。
 - 「Implementation type」リストで「Connection pool data source」を選択します。
 - 「Name」テキストボックスで、デフォルトの内容を変更するか、デフォルトをそのまま使用します。
- 「Next」をクリックし、Step 2 ウィンドウでデフォルトのデータベースクラスパスをそのまま使用して、もう一度「Next」をクリックします。
- Step 3 ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ Oracle JDBC データソースの作成：

- ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「Oracle JDBC プロバイダの作成：」 \(109 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
- 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
- Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに `Livecycle - oracle - IDP_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - 「Component-Managed Authentication and XA Recovery Authentication」の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
- Step 2 ウィンドウで、「URL」フィールドに次の行を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@[server_host]:[port]:[SID]
```

[server_host] はデータベースサーバーの IP アドレス、[port] はデータベースがリスンしているポート (デフォルトは 1521)、[SID] はデータベースのサービス ID です。

- (Oracle RAC のみ) Step 2 ウィンドウで、「URL」フィールドに次の接続 URL を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@(DESCRIPTION=(ENABLE=broken) (ADDRESS_LIST=(ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost1) (PORT=1521)) (ADDRESS=(PROTOCOL=TCP) (HOST=yourhost2) (PORT=1521)) (LOAD_BALANCE=on) (FAILOVER=on)) (CONNECT_DATA=(SERVER=dedicated) (SERVICE_NAME=service.yourcompany.com) (FAILOVER_MODE=(TYPE=session) (METHOD=basic) (RETRIES=10) (DELAY=3))))
```

接続 URL で太字で示されているテキストは、次の値に置き換えます。

- yourhost1**：データベースをホストするクラスタ内の最初のノードの名前、IP アドレス、または完全修飾ドメイン名。
- yourhost2**：データベースをホストするクラスタ内の 2 番目のノードの名前、IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名。

注意： データベースをホストするクラスタは任意の数のノードで構成することができます。**yourhost1** および **yourhost2** は、クラスタが 2 つのノードで構成される場合の例です。

- service.yourcompany.com**：Oracle RAC データベースのサービス名。

6. 「Oracle 10g data store helper」を選択します。
7. 「Next」をクリックし、Step 3 ウィンドウで「Finish」をクリックします。
8. 「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースを選択し、値を次のように設定します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには :」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
10. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
11. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ **Livecycle - oracle - IDP_DS 接続プールの設定 :**

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、先ほど作成した「Oracle JDBC Driver」データソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「Livecycle - oracle - IDP_DS」を選択します。
3. (WebSphere 6.1) 次の画面の「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「oracle9iLogTraceLevel」を null (値なし) に変更します。
4. 「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、「Maximum connections」ボックスに 30 と入力します。
5. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ **(WebSphere 7.0 のみ) Oracle のカスタムプロパティの設定 :**

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、[「Oracle JDBC データソースの作成 :」 \(110 ページ\)](#) で作成したデータソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「New」をクリックします。
3. 「Name」ボックスに useRRASetEquals と入力し、「Value」ボックスに true と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ **LiveCycle Rights Management ES2 用の Oracle JDBC データソースの作成 :**

注意 : この節の説明は、Rights Management ES2 がインストール済みの場合にのみ適用されます。

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「Oracle JDBC プロバイダの作成 :」 \(109 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。

3. Step 1 ウィンドウで値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに `Livecycle - oracle - RM_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに `EDC_DS` と入力します。
 - 「Component-Managed Authentication and XA Recovery Authentication」の下のリストから、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
4. Step 2 ウィンドウで、「URL」フィールドに次の行を入力します。

```
jdbc:oracle:thin:@[server_host]:[port]:[SID]
```

[server_host] はデータベースサーバーの IP アドレス、[port] はデータベースがリスンしているポート (デフォルトは 1521)、[SID] はデータベースのサービス ID です。
5. 「Oracle 10g data store helper」を選択します。
6. 「Next」をクリックし、Step 3 ウィンドウで「Finish」をクリックします。
7. 「Save directly to master configuration」をクリックします。
8. 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソース (RM_DS) を選択し、値を次のように設定します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには：」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
9. 「OK」をクリックし、次に「Save directly to master configuration」をクリックします。
10. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

► **LiveCycle Rights Management ES2 用の Livecycle - oracle - RM_DS 接続プールの設定：**

注意： この節の説明は、Rights Management ES2 がインストール済みの場合にのみ適用されます。

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、先ほど作成した「Oracle JDBC Driver」データソースをクリックします。
2. (WebSphere 6.1) 「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「oracle9iLogTraceLevel」を null (値なし) に変更します。
3. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「Livecycle - oracle - RM_DS」を選択します。
4. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、「Maximum connections」ボックスに 20 と入力します。
5. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ (WebSphere 7.0 のみ) Oracle のカスタムプロパティの構成：

1. ナビゲーションツリーで、**Resources** / **JDBC** / **Data sources** をクリックし、右側のウィンドウで、[「LiveCycle Rights Management ES2 用の Oracle JDBC データソースの作成：」 \(111 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、「New」をクリックします。
3. 「Name」ボックスに `useRRASetEquals` と入力し、「Value」ボックスに `true` と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

C.5.4 SQL Server データソースの設定

SQL Server データソースを設定するには、まず SQL Server データベースドライバをインストールする必要があります。次に、WebSphere 上に SQL Server JDBC プロバイダを作成してから、データソースを作成し、対応する接続プールを設定する必要があります。

▶ SQL Server データベースドライバのインストール：

- データベースドライバをまだインストールしていない場合は、[Microsoft のダウンロードセンター](#)から SQL Server JDBC Driver 1.2 をダウンロードし、指示に従ってインストールします。

注意： Microsoft SQL Server 2005 SP3 および Microsoft SQL Server 2008 のどちらのサーバーにも SQL Server JDBC ドライバ 1.2 を使用します。

注意： システム上でドライバをインストールしたディレクトリの場所を控えておいてください。

▶ SQL Server JDBC プロバイダの作成

1. WebSphere Administrative Console のナビゲーションツリーで、Environment / Variables をクリックし、右側のウィンドウで次のいずれかをクリックします。
 - (WebSphere 6.1) **MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH**
 - (WebSphere 7.0) **MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH**
2. 「General Properties」の「Value」ボックスに、[「SQL Server データベースドライバのインストール：」 \(113 ページ\)](#) で作成した `sqljdbc.jar` ファイルのパスを入力し、「OK」をクリックします。
3. 「Messages」ボックスで、「Save directly to master configuration」をクリックします。
4. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックします。
5. 右側のウィンドウの「Scope」ドロップダウンリストで、レベルとして「Node=NodeName」を選択し、「New」をクリックします。
6. (WebSphere 6.1) Create new JDBC provider ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Database type」リストで「User-defined」を選択します。
 - 「Implementation class name」ボックスで、実装クラスを次のように入力します。
`com.microsoft.sqlserver.jdbc.SQLServerConnectionPoolDataSource`
 - 「Name」ボックスで、SQL Server Provider と入力するか、デフォルト値 (User-defined JDBC Provider) をそのまま使用します。

- (WebSphere 7.0) Create new JDBC provider ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Database type」リストで「SQL Server」を選択します。
 - 「Provider type」リストで「Microsoft SQL Server JDBC Driver」を選択します。
 - 「Implementation type」リストで「Connection Pool Data Source」を選択します。
 - 「Name」ボックスで、Microsoft SQL Server JDBC Driver と入力するか、デフォルト値をそのまま使用します。
- Enter database class path information ウィンドウで、既存のエントリを次のいずれかに置き換えて、「Next」をクリックします。
 - (WebSphere 6.1) `${MSSQLSERVER_JDBC_DRIVER_PATH}/sqljdbc.jar`
 - (WebSphere 7.0) `${MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH}/sqljdbc.jar`

注意： WebSphere 7.0 では、WebSphere 変数 `MICROSOFT_JDBC_DRIVER_PATH` が設定されていると、データベースクラスパスの情報が自動的に設定されます。
- Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ LiveCycle ES2 用の SQL Server データソースの作成

次の手順に従って、使用しているアプリケーションサーバーのバージョンに適した SQL Server データソースを作成します。

WebSphere 6.1 :

- ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[SQL Server JDBC プロバイダの作成 \(113 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
- 「Additional properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
- Enter basic data source information ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに `Livecycle - SQLServer - IDP_DS` と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに `IDP_DS` と入力します。
 - 「Component-managed authentication alias and XA recovery authentication alias」のリストで、[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには : \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
- Enter database specific properties for the data source ウィンドウで、「Data store helper class name」ボックスの既存のエントリを次の値に置き換えて、「Next」をクリックします。
`com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper`
- Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。
- 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースを選択します。
- 値を次のように設定します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには : \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
- 「OK」をクリックし、次に「Save directly to master configuration」をクリックします。

9. 「Enter database specific properties for the data source」で、データベース名、サーバー名およびポートを入力します。
10. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to the master configuration」をクリックします。
11. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。

WebSphere 7.0 :

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[SQL Server JDBC プロバイダの作成](#) (113 ページ) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Enter basic data source information ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに Livecycle - SQLServer - IDP_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに IDP_DS と入力します。
4. 「Enter database specific properties for the data source」で、データベース名、サーバー名およびポートを入力します。
5. Setup security aliases ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Component managed authentication alias」リストで、[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには :](#) (103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container managed authentication alias」リストで、[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには :](#) (103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
6. Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。
7. データソースのデータストアヘルパクラスを設定します。次のタスクを実行します。
 - ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、作成したデータソースをクリックします。
 - 次の画面の「Data store helper class name」で、「Specify a user-defined data store helper」を選択し、既存のエントリを次のテキストに置き換えます。

```
com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper
```
8. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to the master configuration」をクリックします。

▶ Livecycle - SQLServer - IDP_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、WebSphere 6.1 または 7.0 用に既に作成したプロバイダをクリックします。
 - (WebSphere 6.1) **SQL Server Provider**
 - (WebSphere 7.0) **Microsoft SQL Server JDBC Driver**
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「Livecycle - SQLServer - IDP_DS」を選択します。
3. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、「Maximum connections」ボックスに 30 と入力します。
4. 9. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ (WebSphere 7.0 のみ) SQL Server のカスタムプロパティの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、[LiveCycle ES2 用の SQL Server データソースの作成](#) (114 ページ) で作成したデータソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Custom properties」をクリックし、「New」をクリックします。
3. 「Name」ボックスに useRRASetEquals と入力し、「Value」ボックスに true と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ Rights Management ES2 用の SQL Server データソースの作成

次の手順に従って、使用しているアプリケーションサーバーのバージョンに適した SQL Server データソースを作成します。

WebSphere 6.1 :

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[SQL Server JDBC プロバイダの作成](#) (113 ページ) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Enter basic data source information ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに Livecycle - SQLServer - RM_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに EDC_DS と入力します。
 - 「Component-managed authentication alias and XA recovery authentication alias」のリストで、[データソース用の J2C 認証の構成を作成するには:](#) (103 ページ) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
4. Enter database specific properties for the data source ウィンドウで、「Data store helper class name」ボックスの既存のエントリを次の値に置き換えて、「Next」をクリックします。
`com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper`
5. Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。
6. 前の手順で追加パラメータを変更するために作成したデータソースを選択します。

7. 値を次のように設定します。
 - 「Container-managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには:」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
8. 「OK」をクリックし、次に「Save directly to master configuration」をクリックします。
9. 「Enter database specific properties for the data source」で、データベース名、サーバー名およびポートを入力します。
10. 「OK」 **または** 「Apply」をクリックし、「Save directly to the master configuration」をクリックします。
11. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。

WebSphere 7.0 :

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、[「SQL Server JDBC プロバイダの作成」 \(113 ページ\)](#) で作成したプロバイダをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「New」をクリックします。
3. Enter basic data source information ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Data source name」ボックスに Livecycle - SQLServer - RM_DS と入力します。
 - 「JNDI name」ボックスに EDC_DS と入力します。
4. Enter database specific properties for the data source ウィンドウで、「Data store helper class name」ボックスの既存のエントリを次の値に置き換えます。
`com.ibm.websphere.rsadapter.GenericDataStoreHelper`
5. Setup security aliases ウィンドウで、値を次のように設定し、「Next」をクリックします。
 - 「Component managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには:」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
 - 「Mapping-configuration alias」リストで「DefaultPrincipalMapping」を選択します。
 - 「Container managed authentication alias」リストで、[「データソース用の J2C 認証の構成を作成するには:」 \(103 ページ\)](#) でこのデータソース用に作成した認証エイリアスを選択します。
6. Summary ウィンドウで、「Finish」をクリックして、「Save directly to master configuration」をクリックします。
7. ステートメントキャッシュサイズを変更します。次のタスクを実行します。
 - WebSphere Administrative Console で、JDBC / Data sources をクリックします。
 - 作成したデータソースをクリックし、「Additional Properties」で「WebSphere Application Server data source properties」をクリックします。
 - 「Statement cache size」フィールドの値を 80 に変更します。
 - 「OK」 **または** 「Apply」をクリックし、「Save directly to the master configuration」をクリックします。

▶ Livecycle - SQLServer - RM_DS 接続プールの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / JDBC Providers をクリックし、右側のウィンドウで、WebSphere 6.1 または 7.0 用に既に作成したプロバイダをクリックします。
 - (WebSphere 6.1) **User-defined JDBC Provider**
 - (WebSphere 7.0) **SQL Server Provider**
2. 「Additional Properties」で「Data sources」をクリックし、「Livecycle - SQLServer - RM_DS」を選択します。
3. 次の画面の「Additional Properties」で「Connection Pool Properties」をクリックし、「Maximum connections」ボックスに 20 と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ (WebSphere 7.0 のみ) SQL Server のカスタムプロパティの設定

1. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data sources をクリックし、右側のウィンドウで、[Rights Management ES2 用の SQL Server データソースの作成](#) (116 ページ) で作成したデータソースをクリックします。
2. 「Additional Properties」で「Custom properties」をクリックし、「New」をクリックします。
3. 「Name」ボックスに `useRRASetEquals` と入力し、「Value」ボックスに `true` と入力します。
4. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。

▶ Windows ログインを LiveCycle ES2 データベースユーザーにマップするには：

注意： ユーザーアカウントを作成し、Windows ドメインに関連付けておく必要があります。

注意： LiveCycle Configuration Manager を LiveCycle ES2 へアップグレードするプロセスの一部として実行する場合、Windows 認証をデータベース用の認証モードとして使用すると、データベースの検証が失敗します。設定手順の実行中は、このエラーを無視してかまいません。

1. Microsoft SQL Server Management Studio を使用して、LiveCycle ES2 データベースのホストであるデータベースサーバーに接続します。
2. 認証モードを「Windows authentication」に設定します。
3. セキュリティ/ログインで Windows ドメインユーザーに対して新しいアカウントを作成して、「Windows authentication」を選択します。
4. Login - New 画面で「User Mapping」をクリックして、新しいユーザーのデータベースおよびデフォルトスキーマを設定します。
5. データベースロールとして「db_owner」を選択し、「OK」をクリックします。

作成したユーザーを確認するには、ナビゲーションツリーで LiveCycle ES2 データベースを展開して、セキュリティ/ユーザーを開きます。新しいユーザーが表示されます。

▶ Windows の統合セキュリティを設定して、SQL Server との信頼できる接続を確保するには

1. Windows ドメインユーザーを使用して、アプリケーションサーバーを起動します。WebSphere Application Server をサービスとして実行している場合は、Windows ドメインユーザーアカウントを使用して起動する必要があります。
2. Web ブラウザの URL 行に `http://[host name]:[port]/IBM/console` と入力して、WebSphere Administrative Console を起動します。

3. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data Sources をクリックし、右側のウィンドウで「IDP_DS」をクリックします。
4. 右側のウィンドウの「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、次の画面で「integratedSecurity」をクリックします。
5. 次の画面の「General Properties」で、「Value」ボックスに true と入力します。
6. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
7. ナビゲーションツリーで、Resources / JDBC / Data Sources をクリックし、右側のウィンドウで「RM_DS」をクリックします。
8. 右側のウィンドウの「Additional Properties」で「Custom Properties」をクリックし、次の画面で「integratedSecurity」をクリックします。
9. 次の画面の「General Properties」で、「Value」ボックスに true と入力します。
10. 「OK」または「Apply」をクリックし、「Save directly to master configuration」をクリックします。
11. 「サービス」コントロールパネルを開き、IBM WebSphere Application Server <バージョン> - <ノード> サービスを停止します。
12. サービス名を右クリックして、プロパティ / ログオンをクリックします。
13. デフォルトの Log On プロパティを、Local System から [「Windows ログインを LiveCycle ES2 データベースユーザーにマップするには:」 \(118 ページ\)](#) で設定した Windows ドメインユーザーアカウントに変更して、サービスを再起動します。
14. アプリケーションサーバーがインストールされているコンピュータの Windows システムパス (C:\%Windows) に sqljdbc_auth.dll を追加します。

注意： sqljdbc_auth.dll ファイルは、Microsoft SQL JDBC 1.2 ドライバのインストールディレクトリ (デフォルトは [InstallDir]/sqljdbc_1.2/enu/auth/x86) と同じ場所にあります。

C.6 次の手順

この後、LiveCycle ES2 EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイする必要があります ([「LiveCycle ES2 をデプロイするための設定」 \(18 ページ\)](#) を参照)。

D

付録 - WebSphere への手動デプロイ

この章では、LiveCycle ES2 モジュールを WebSphere に手動でデプロイする方法について説明します。この章の内容は、LiveCycle ES2 を WebSphere Application Server に自動的にデプロイしない場合にのみ適用されます。LiveCycle ES2 をアプリケーションサーバーに自動的にデプロイする方法については、[「LiveCycle ES2 の設定、デプロイ」 \(20 ページ\)](#) を参照してください。

インストールのこの段階では、既に LiveCycle ES2 ファイルがインストールされ、デプロイ可能な LiveCycle ES2 アーカイブを設定するための LiveCycle Configuration Manager が実行されています。また、WebSphere Application Server が手動で設定されています。この時点で、デプロイ可能な LiveCycle ES2 アーカイブを手動でデプロイします。

この章には、以下のトピックが含まれています。

- [「LiveCycle ES2 モジュールのデプロイについて」 \(120 ページ\)](#)
- [「WebSphere へのデプロイ」 \(121 ページ\)](#)
- [「アプリケーションの起動」 \(122 ページ\)](#)

D.1 LiveCycle ES2 モジュールのデプロイについて

LiveCycle ES2 をデプロイする前に、次のタスクが完了していることを確認してください。

- 必要なソフトウェアとファイルがインストールしてあり、作業を行うディレクトリの場所を確認している。必要なファイルのインストールや作業ディレクトリの確認が完了していない場合は、『[LiveCycle ES2 のインストールの準備 \(シングルサーバー\)](#)』を参照してください。
- LiveCycle Configuration Manager を実行し、システムおよびアプリケーションサーバーの要件に従って LiveCycle ES2 モジュールを設定およびアセンブリしている。デプロイメントにモジュールを追加するには、LiveCycle Configuration Manager を実行して変更を行い、更新した EAR ファイルを再デプロイします。

LiveCycle ES2 を初めてデプロイする場合は、製品をデプロイした後に、LiveCycle Configuration Manager を使用してデータベースを初期化してください。

外部 Web サーバーを使用している場合は、Web サーバーのマニュアルを参照して、アプリケーションサーバーへのアクセスに必要な設定について確認してください。

D.1.1 WebSphere ディレクトリ名

この章では、WebSphere Application Server のホームディレクトリを [appserver root] と表します。ホームディレクトリは、WAS_INSTALL_ROOT 環境変数に指定されているものと同じです。同様に、[LiveCycleES2 root] は、LiveCycle ES2 コンポーネントがインストールされている場所を表します ([「このドキュメントで使用する表記」 \(7 ページ\)](#) を参照)。

D.1.2 デプロイ可能なコンポーネントの概要

デプロイメントプロセス中に、LiveCycle ES2 の次のコンポーネントをデプロイする必要があります。

- adobe-livecycle-native-websphere-[OS].ear
- adobe-livecycle-websphere.ear
- adobe-workspace-client.ear
- adobe-contentservices.ear (LiveCycle Content Services ES2 のみ)

LiveCycle Configuration Manager を使用して LiveCycle ES2 を設定すると (必須)、これらのファイルは [LiveCycleES2 root]/configurationManager/export/ ディレクトリに配置されます。

D.2 WebSphere へのデプロイ

LiveCycle ES2 モジュールを WebSphere にデプロイするには、WebSphere Administrative Console を使用して、コンポーネントの EAR ファイルをアプリケーションサーバーにデプロイします。

WebSphere にデプロイする前に、使用しているコンピュータでアプリケーションサーバーを起動します。必須のコンポーネントをデプロイしたら、サービスを起動する前にアプリケーションサーバーを停止して再起動します。

▶ EAR ファイルをデプロイするには

1. (WebSphere 6.x) WebSphere Administrative Console ナビゲーションツリーで、Applications / Install New Application をクリックします。
(WebSphere 7.x) WebSphere Administrative Console ナビゲーションツリーで、Applications / New Application をクリックします。
2. (WebSphere 6.x) 右側のウィンドウで、「Remote file system」または「Local File System」を選択します。
(WebSphere 7.x) 右側のウィンドウで、「New Enterprise Application」をクリックし、「Remote file system」または「Local File System」を選択します。
3. 「Browse」をクリックして、[「デプロイ可能なコンポーネントの概要」\(121 ページ\)](#) に示されているいずれかの EAR ファイルを選択します。
4. 「Show me all installation options and parameters」を選択して、「Next」をクリックします。
5. 「Generate Default Bindings」を選択して、「Next」をクリックします。
6. 右側の Summary ウィンドウの左側の列で最後の手順を選択してから、「Finish」をクリックします。
7. EAR ファイルが正常にインストールされたら、「Messages」ボックスで、「Save directly to Master Configuration」をクリックします。
8. [「デプロイ可能なコンポーネントの概要」\(121 ページ\)](#) の各 EAR ファイルについて、この手順を繰り返します。

D.3 アプリケーションの起動

モジュールをデプロイした後に、アプリケーションを起動する必要があります。アプリケーションが正しくデプロイされて起動されると、アプリケーション名の横にある赤い「X」が緑の矢印に変わります。アプリケーションを起動できないと、WebSphere のエラーメッセージが表示されます。

WebSphere のエラーメッセージについて詳しくは、WebSphere Application Server のマニュアルを参照してください。

▶ WebSphere でアプリケーションを起動するには

1. (WebSphere 6.x) WebSphere Administrative Console ナビゲーションツリーで、Applications / Enterprise Applications をクリックします。
(WebSphere 7.x) WebSphere Administrative Console ナビゲーションツリーで、Applications / Application Types / WebSphere Enterprise applications をクリックします。
2. 起動するいずれかの、またはすべての LiveCycle ES2 アプリケーションを選択して、「Start」をクリックします。ステータスの横にある赤い「X」が緑の矢印に変わったアプリケーションは、実行中であることを示しています。